THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年 第九號

第二百三十四號

露國 トルストイ著
日本 徳田秋江氏譯

【新刊發賣】

生ひ立ちの記

我邦に於ける杜翁(トルストイ)研究は、從來其思想的方面に於て僅に皮相を穿てるに過きす、久しく閑却せられたる其文藝的方面は『生ひ立の記』の新譯によりて眞面目なる研究の報告に接する事を得たり。我邦唯一の杜翁學者徳富蘆花氏は曾て「若し杜翁の著作悉く燒き盡して其二三を殘すとせば予は生ひ立ちの記と戰爭と平和とを以てせん」と云ひたりき。『生ひ立ちの記』は實に翁が八十年の著作生涯に於ける處女作にして、時の大家ツルゲネーフをして嘆賞措く能はさらしめたるもの、定木の如く直く、白紙の如く純白なる翁が少年時代の耳目に映せる自然人生の批評にして、露國に於ける最近自然派の先蹤をなせる杜翁が官能的描寫は遺憾なく此うちに味ふことを得可し。文藝に志ある者の必讀に値するは勿論、偉人が少時に於ける思想發達史として、善良なる家庭に於いて要する絶好の修養書也。

最上製美本
紙數四百頁
定價九拾錢
小包料八錢

發行所 東京神田區駿河臺 電話本局三千四番 東京國民書院

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

十月一日

中央公論

發行

秋期大附錄號

我「中央公論」の春秋二期の大附錄號は常に第一流の作家の佳作傑作を網羅して一年間の文壇に於ける最も目覺ましき活動をなし來りし事は我愛讀者諸彦の業に已に熟知せらるゝ處今更ら吾人の呶々するを須ゐず來る十月一日を以て發行する秋期大附錄號には

秋期大附錄號に
小說の寄稿をば
快諾せられたる
五大小說家氏名

小栗風葉
田山花袋
眞山青果
正宗白鳥
德田秋聲

の五大作家の雄篇を掲載して江湖の批判を仰がんと欲す殊に本號には概して長篇と目すべき作物多く量に於て質に於て從來の大附錄號よりも更らに〱文壇を驚かすべき充分の價値あるを信ず

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

市内は御一報次第直に御一覧に供し可申、地方の御注文は直ちに發送する手筈整ひ居候



內地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處曩に同店を辭し右の場所に合資會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遅れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候敬具

市内ハ電話又ハ御一報次第早速店員御用伺ニ參堂可仕候

安心の出來るクツとカバンは

アヲキ商店

京橋區南傳馬町一丁目東側

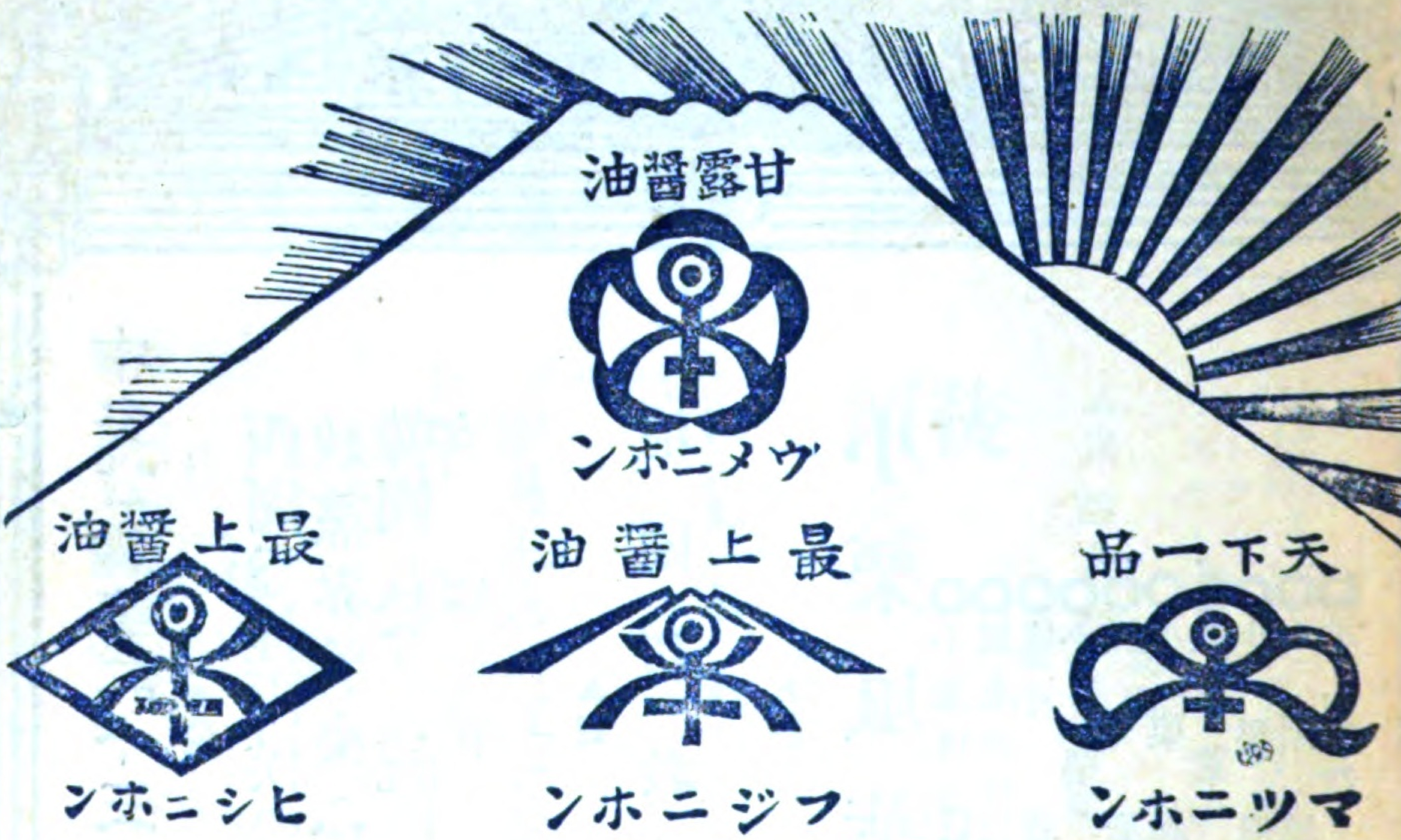
電話本局一七四三番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

醤油醸造界の一大革新

最良醤油



資本金壹千萬圓

醸造元
日本醤油醸造株式會社
東京深川區小名木川通　電話浪花「長」三七七三番 一五九五番

特色

製造清潔
品質佳良
黴を生ぜず
價格低廉

弊社は前人未發の新發明にかゝる斬新にして完全なる鈴木式醸造方法及機械的装置により精良無比の醤油を醸造販賣す

特色

特約販賣所
東京日本橋區北新堀町　電話浪花「長」一四六番
合資會社 **日本醤油東京販賣所**

其他東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

信用なき小店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第二十三年第九號目次

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新流行薄手側

夏持時計發售

天賞堂特別注文新品



●拾四金側　正價金參拾五圓

●十八金側　正價金四拾五圓

（金無地側十七形片硝子銀色支頭引紐廻し器械ニッケレーアンクル爪石入巻上龍頭巻）



（側面）

●十四金中蓋付無地側及斜子側正價五五

十六圓宛　●同梨子地側及彫刻側正價五五

十八圓宛

●十八金中蓋付無地側及斜子側正價七七

十圓宛　●同梨子地側及彫刻側正價七十

二圓宛

●銀中蓋付無地側正價十二圓　●同梨子地側正價十三圓

以上盤面文字羅馬數字亞剌比亞數字共同價ノ事

米國製

◉貴婦人用精確時計

○サイズ（十三形）無双器械ニッケレーアンクル切テンプ爪石入龍頭巻





（銀斜子側）價拾五圓半

（同金着側）價拾八圓半

（銀梨地側）價拾六圓半

（同花支）價拾七圓半

（銀彫刻側）價十七圓

（同金着側）價二十圓

十八金側ダイヤ入甲種　價百六十五圓

（乙種）價百五十圓

（金・銀象銀・側）價二十二圓

（同花支）價二十三圓

以上盤面文字羅馬數字亞剌比亞數字共同價又龍頭環ハ丸環佛環共同價ノ事

七寶側御婦人用時計



●第壹號　正價金拾圓也

七寶側十三形片硝子器械ヨルゲンシリンドル石入龍頭巻裏面体裁上圖ノ如シ



●第貳號　正價金八圓半

七寶側十三形片硝子器械ヨルゲンシリンドル石入龍頭巻裏面体裁上圖ノ如シ

以上裏面七寶（赤）（紫）（萌黄）（淺黄）等ノ各種同價又盤面文字羅馬數字亞剌比亞數字共同價ノ事

◉市外送料何レモ金拾貳錢

東京市京橋區尾張町貳丁目振替貯金口座三九六六

時計貴金屬美術品寶玉類内外小間物化粧品商　天賞堂本店

電話新橋特三三三、三一五三

天賞堂大阪出張所　電話（東七三三）

天賞堂神田出張所　電話（本二六〇）

天賞堂横濱出張所　電話（八七六）

天賞堂長崎出張所　電話（二二九）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

THE LESLIE BOY



BY SIR H. RAEBURN, R. A.



第二十三年
第九號
第二百卅四號

西園寺桂兩侯の對照

桂侯に代れる西園寺侯去つて、桂侯更らに之に代れり、思ふに我が政治舞臺は當分の間此の兩侯に依て代る〱支配せらるべき乎、茲に少しく兩侯の人物を對照し看るも亦一興ならずとせず。

（一）

西園寺侯は明治廿七年八月始めて伊藤内閣に入つて文部大臣となり、廿九年八月内閣總辭職まで在任し、其の間外務大臣陸奥伯病臥の間外務大臣をも兼攝したりき、明治三十一年伊藤内閣成るや、再び文部大臣となりしが、其の四月樞密院議長となり（後任は外山正一氏）、卅四年五月伊藤侯辭職の時、樞密院議長として總理大臣を兼攝すること約一ヶ月、後卅九年一月桂侯に代りて始めて總理大臣となり、以て本年七月に至れり、即ち大臣たることは桂侯より早きこと幾んど四年なるも、總理大臣としては聊か後進の

觀なきにあらず、侯の大臣たる期間は、第一次の文部大臣二年四ヶ月、第二次の文部大臣たる四ヶ月、總理大臣代理たる一ヶ月、總理大臣たると二年七ヶ月、通計五年四ヶ月とす。

桂侯の始めて大臣となれるは、三十一年の伊藤内閣に於て陸軍大臣たるを始めとし、茲に西園寺侯と同一閣僚となれり、爾後隈板内閣(同年六月成立)にも、山縣内閣(同年十一月成立)にも、次の伊藤内閣(卅三年十月成立)にも、陸軍大臣として勤續し、卅四年五月始めて總理大臣となり、卅九年一月に至る即ち大臣たる期間は通計九年一ヶ月にして西園寺侯の二倍以上なりとす(今次の内閣組織を省く)從つて大臣としての經歷は、西園寺侯の上にありとせざる可らず。

（二）

西園寺侯は、其の幼時に於て至尊の御學友たりき、啻だに門閥の高きのみならず、此の關係に依て至尊の御信寵を得ると最も篤し、思ふに今の政事家中、至尊の御信賴を辱ふするもの伊藤公を除かば、恐らくば、侯を以て首位に推さゞるを得ざるべし、山縣公は軍人として、且つ謹愨の重臣として、無比の御信用を有すと雖も、御心措きなき御信寵に至ては、或は西園寺侯に讓らざるを得ざらん、否此の一點より曰はゞ、伊藤公と雖も或は及ばざるべき也。

侯は又伊藤公の後繼者として政友會總裁たり、政友會は自由黨以來古き歷史を有する現在の最大多數黨にして、衆議院に於ける最大勢力たり、侯は上に至尊の優渥なる御信寵を辱ふし、而して下に衆議院の最大多數黨を有す、實に總理大臣としての最適任者といはざる可らず、況んや淸華の出として門葉甚

だ高く、人格崇高にして頗ぶる貴族院の一部にも敬重せらるゝをや、侯が洒脱にして細事に拘泥せず、且つ大勢を看るに明敏にして、進退に拘束さるゝとなく、恰かも沖天に飛翔する皓鶴の如き趣あるは、天成の總理大臣たる素質を具ふるものとせざる可らず、世或は侯の餘りに權勢に淡きため、執着力の脆きを難ずるものあるも、近く總理大臣として幾多の難局に忍耐したりしに視るに、少くも伊藤公よりもより多く執着力を有すると明か也、其の努めずして閣僚に推重せらるゝの一事は、蓋し侯唯一の長所にして、他の學んで及ぶ能はざる所とす。

（三）

桂侯は調和に於て特得の才能あり、凡そ歴代の内閣、多く政黨と戰へるも、戰ふて動搖するとはあり、困苦するとはありしも、然かも曾て之がため倒壞したるとはあらず、其の倒壞は寧ろ多く内部の不調和に原由するを常とす、桂侯の聰明にして而して利弊を視るに敏なる、早く之を認識したりしものか、其の始めて内閣を組織するや、寸毫も他の異分子を加へず、當時第二流第三流内閣の稱あるに拘らず、悉く自家と系統を同くする者のみを擧げ、且つ内に相鬩ぐとを堅く誡めたれば、四年有半の永き、曾て内に調和を破ぶれるとなく、僅かに政友會と爭へる結果、平田男の農商務大臣たるを罷め、疾患のため内海男の内務大臣たるを罷めしのみ、文部大臣菊池男罷めて、久保田氏之に代り、兒玉伯陸軍大臣の兼任を解きて寺内子之に代り、司法大臣として波多野男、遞信大臣として大浦男入りしも、總て不調和の故にはあらず、彼の山本伯の特能を以てしも、寸毫も調和を亂さゞりしが如き、既往に類例なかりし處と

す。

西園寺侯の內閣には、實に各省割據して豫算分取の弊ありき、阪谷男が大藏大臣を罷め、山縣氏が遞信大臣を辭せし實に其の結果にあらずや、此の內閣が常に豫算の編成に行悩めるも、畢竟は各省割據の結果に外ならず、勿論前數代の內閣も、總て各省割據して豫算分取を事としたりき、西鄕侯が文部大臣として歡迎せられ、多くの伴食大臣の侮蔑せられしも、要するに豫算分取の多寡に由るのみ、桂侯の內閣に至ては曾て其風なきを特異なる色彩とす、また能く調和を保つの一例と爲さゞる可らず。

且つ桂侯は財政事情に精通し、之を節理する材幹を有す、歷代の總理大臣多くは財政に通ぜず、伊藤公然り、山縣公更に然り、西園寺侯最も然り、僅かに松方侯ありて其の信望遙かに桂侯の上に出でたるのみ、桂侯か總理大臣として最も必要なる調和の特能あるに加へて、財政上の材幹あるは最も珍とせざる可らず。

抑も日淸戰役以後、我が財政著るしく膨脹し來れると同時に、政治上の最大難關は主として玆に橫はるに至れり、廿九年秋伊藤內閣の倒れたるも是が爲めなり、卅四年夏伊藤內閣の僅かに八ヶ月にして倒れたるも、大藏大臣たる渡邊子が、國家破產論を唱へたりし結果なり、西園寺內閣が衆議院に絕對の多數を有しながら、突如として倒れざるを得ざるに至りしも、畢竟財政上より一般の信望を喪へるが故也、此の時に方つて、財政上に材幹ある桂侯は、寧ろ時代の要求に應ずべき政事家なりと稱せざる可らず、況んや侯の同一系統又は幕僚の中に人材多くして、內閣を組織すると最も容易なるをや。

桂侯は素より衆議院に多數を有せず、然れども貴族院には多數を有す、勿論其の勢力の陵逸するを、今は到底曩昔の如くなるを得ざらんも、然かも貴族院の同情は、單に惰力のみにても尙ほ多く桂侯の內閣に吸集せらる、況んや侯及び侯の味方は、近時殊に貴族院の勢力を墜失せしむるため、嚴密なる用意を怠らざるをや、西園寺侯が兎にも角にも衆議院に最便の地歩を占むるが如く、桂侯も亦兎にも角にも貴族院に至便の地位を有す、此の點よりいはゞ、西侯の勢力正さしく互角なりとするを當然とすべし。

西園寺侯が伊藤公の政治的相續者たるが如く、桂侯は山縣公の相續者也、其の地位に於て、勢力に於て、爵位に於て、兩侯何ぞ其れ酷だ相似たるや、若し夫れ同名(異人)の妓を寵愛し、共に艶遊を好みて伊藤式習癖を脱せざるまで相似たるも一奇と謂べし。

(四)

若し兩侯の相異なる點を求めば、寧ろ獨逸式佛國式とも曰はゞ曰ひ得べき乎、西園寺侯は佛國に遊びたりき、隨つて早くより民權論を唱へ、政黨內閣を主義としたりき、此の點よりいへば、下つて政友會を組織し、竟に政黨內閣を實現せんとする伊藤公の如きも、寧ろ侯の後輩とするも可なるのみ。

桂侯は軍學を獨逸に學べり、隨つて政黨の勢力を認むるも政黨內閣を悅ばず、陛下の內閣として、其の同一意見の人材を網羅し、此の人材に由て最善の力を效すを以て理想とす、世或は之を頑冥といふも寧ろ却つて進步したる理想なるも知る可らず、何となれば政黨內閣主義の如きは、歐洲の政治學者が既

に業に陳腐とする所のものなれば也、理に於ても、事實に於ても、政黨内閣は必らずしも最善なる内閣に非ざれば也。

伊藤公は憲法論をスタイン博士に學びて、其の主張多くは獨逸式なりき、桂侯の如き或は獨逸に學びたる外、更らに公に私淑したる處多かりしも亦知る可らざる也、然れども公は情に於て俗に所謂浮氣なるが如く、其の主張にも亦甚だ粘着性を缺けり、曾て自由改進兩黨の聯合に迫られて隈板内閣を現出せしめ、後には自から下つて政友會を組織し、身其の總裁となりしが如きは、正さしく獨逸に學べる所を一擲して、英國式佛國式に遷れるものの如し、吾人は其の退歩か進歩かを輕々しく判斷する能はずと雖も、公の變化の著るしきには乃ち一驚を喫せざると能はず、何ぞ況んや又幾くならずして政友會を西園寺侯に讓り、自から樞密院に隱れ、更らに韓國統監として、純然たる元老官人に復舊したりしをや、之を以て單に一時山縣系に祭り込まれたる故のみと做すと勿れ、單に優詔に感激したりし故のみと做すと勿れ、抑も又之を以て間接に政友會を幇助し、竟に政黨内閣を實現するに便なるが故なりと做すと勿れ、主たる原因は、寧ろ公の特性たる『浮氣』の結果にあらずや、公も亦多くの點に於て淡泊也、隨つて執着力に乏しき缺點あるを免かれず。

山縣公は重厚を以て自任す、故に其の人を愛するや狹くして深し、一たび其の幕下と爲すものは、假令多くの缺點あるも、甚だしき敗德なき限り之を庇護し、時としては幾んど曲庇するとさへ之なきに非ず、故に或は世に忌まるゝと多きを免かれずと雖も、幕下は乃ち死力を盡すを惜まざる也、是れ公の系統に

人材多き所以にして、伊藤公愛護の下に發達したりし伊東巳代治子すら、尙ほ公に叛く能はざる所以ならずや、看よ、芳川伯、青木子、野村子、清浦子、大浦男、小村伯、寺內子、平田男、小松原氏、安廣氏、一木氏皆公の直參と稱せられ、而して桂侯また公の最も深く眷護する所ならずや、伊藤公は材に任じて不時の拔擢を敢てするも、然かも其の所謂「浮氣」は、永く其の信任を繼續する能はず、其の絕倫なる聰明に由て他の缺點弱點を看破するや、重愛一變してまた顧みず、公は國士豈私恩を沽る可けんやと自稱するも、寧ろ或は一種の負惜みならざらんや、故に公の勢力や廣しと雖も淺きを免かれず、何人も公を敵視せざるも、然かも死力を致すが如きものあらず、是れ通人にして而して「浮氣」なる人の通有性にはあらずや。

西園寺侯は幾んど總てに於て伊藤公の相續者たり、強いて其の異なる點を求むれば健康のみ、公は實に頑健と稱すべき程の健康を有す、曾て手に煙草を放たず、常に酒を被むり色を漁すると常人を拔くも然かも健康は依然たり、每夜十二時より早く寢ねたることなきも、然かも每曉五時より遲く起きたることあらずといふ、頑健にあらずして何ぞや、思ふに公が位人臣を極めて而して聲望一代に冠たる所以は、其の材識の外、更に異常なる健康を有すると其の一因ならざる可らず。

松方侯また健康人に超え、大隈伯も然り、井上侯に至ては、七十餘歲にして尙ほ每曉冷水に浴し、夜々双脚を蓐外に露出して眠り、嚴冬と雖も無外套にして幌馬車に乘る、山縣公今や飲食を愼み、滋養を秤量して用ふるがために、擂餌を食する鶯に喩へらるゝも、七十尙ほ矍鑠たるに視れば、其の健康また

普通に優さる遠きや論なし、凡そ諸元老が時代の寵兒たりし一個の原由は、少くも健康の一事に在ること何人も之を爭はざるべし。

我が西園寺侯に至ては、健康遠く諸老に及ばず、黄金に淡にして、高邁、洒落、善く飲み善く遊ぶこと總て酷だ伊藤公に肖たるも、唯だ健康の一事、全く公に及ばず。

桂侯は其の感情に趨らずして理性に從ひ、利害に敏にして勢ひを視るの慧なる、外交を重んじて大體に通ずること、寧ろ伊藤公に近くして山縣公に遠し、其の女色を愛し、交遊に長ぜること亦山縣公に似ずして伊藤公に肖たるも、竟に系統に於て山縣公の脈を引くは何ぞや、其の非政黨内閣主義のためのみ、軍人として多年山縣公の眷用を蒙むれるためのみ、然かも所謂世の『浮氣』なる點に於て、假令多少の差異はあらんも、兩侯また頗ぶる伊藤公に近き所あり、但し桂侯最も政事家の必要條件たる執着力に強きを特異なりとするのみ、而して健康に於て、兩侯また伯仲の間にあり。

(五)

單に政事家として論せば、桂侯素より西園寺侯の上にあらん、而して其政治的生命を打算せば、桂侯長くして西園寺侯短かるべし、政友會若し西園寺侯に叛くが如きことあらば、假令叛かざるも、西園寺侯煩に堪へずして政友會を捨つるが如きことあらば、若くば政友會に於ける實權を他に移すが如きことあらば竟に永く政界に立つことを得ざる可ければ也、凡そ人に長たるもの、其の下を喪へば獨立する能はず、桂侯の如き調和の才に兼ぬるに財政上の特技あるものは、之くとして可ならざるなし、推されて人の長た

らざるも、進んで自から成すに足る、惟ふに伊藤公なければ西園寺侯は竟に今日あるを得ざりしならん桂侯に至ては、文王を俟たずして起るべき人にあらずや。

人格よりいはゞ、兩侯素より同日に談ず可らず、西園寺侯は文雅にして勢利に淡なるも桂侯は高遠なる趣味を有せず、黄金にも亦全く清淨なるを得ざれば也、其の就任の始めに於て、大藏大臣の披露宴を催ふして多くの實業家と懇欵を盡したるは、西園寺侯が文士俳優と稱氣滿々たる交遊を訂しながら、曾て實業家と一歩だも近かざりしと相距る千萬里のみならず、而して是れ人格の大相違にして又實に政事家として巧拙の差の大なる所以ならざらんや。

政黨界將來の分野

（一）

內閣の更迭と共に、政黨の向背も亦一變して、竟に政界の分野に異色を呈せんとすとは、多くの人の豫期する所也

若し大主義によつて向背せず。單に利害及び行掛より敵味方と爲るを以て現代政黨の本色と做し、是に由て觀察し立論するを以て却つて事實に近く、而してまた興味ありとせば、吾人は玆に左の如く記せざるを得ず

（二）

若し吾人の理想する如く、積極主義を執るがために、政友會と大同倶樂部と合同し、而して桂侯進んで其の黨の新首領と爲らば、我が政黨の將來は稍々看るに足るものと爲るや必せり

桂侯亦或は斯く考慮せざるにも非ざるべし、但だ政友會の多數が西園寺侯に替ゆるに桂侯を以てするや否やを疑問とするのみ

抑も政友會が多數を占めて、而して進退に節制あり、徒らに議論を好みて紛然雜然曾て歸着する所なきが如き缺點を有せざるに於て、爲政者としては、斯る黨派に由るを最も便なりとせざる可らず、桂侯の聰明にして如何ぞ之を解せざらんや

唯だ西園寺侯に代ると至難なるも、伊藤公を煩さば、之を解決すると甚だ易し、一言にして之を盡さば、西園寺侯を樞密院議長とし、桂侯を以て政友會（大同倶樂部を含みたる）を統率せしむるに在り、

斯くすれば勿論伊藤山縣兩公は再び相親和せざる可らず、政友會は益々大を加へて暫らくは政界を獨占すべし、進步黨は民間黨として一時益々逆境に沈むべしと雖も、彼の猶興派革新會の如き皆進步黨に合併すべくして、而して實業派無所屬等も多く進步黨と步調を一にすべく、政友派の境遇一び民心に倦かるゝに至らば、進步黨また竟に聯合黨として多數を制するに至ると、今の英國自由黨の如きと無しとはす可らず

然れども是は寧ろ事實に遠き理想的考案なり、事實は却つて下の如くなるべき歟

政界は將來數年の間、西園寺桂の兩侯に依て支配せられ、兩侯常に對峙の姿勢を執るべし、山縣公伊藤公の時代は既に過ぎたり、松方侯の時代亦然り、大隈伯の如き恐らくは竟に政界を支配すべき機會に接せずして終らんのみ

(三)

今に於て藩閥といふは陳腐の見のみ、嚴正なる意義に於て政黨ありといふも如何はし、寧ろ概念的に西園寺黨、桂黨の二者ありとするを當然とす、政友會が西園寺黨たるは論なきも、桂黨たるは何ものぞといへば、是は唯だ一の大同倶樂部のみとは看る可らず、貴族院にも大なる桂黨あり、世の所謂官僚派は總て桂黨なり、彼の政界に於ける慧星と視られたる後藤新平男の如き、今や竟に桂黨に加盟したり、猶ほ桂黨たらんとするもの少からず、無所屬派實業派の中には素より之あり、進歩黨中にも亦甚だ多し

進歩黨の政務調査會が發表したりし財政整理案なるものを看るに、幾んど全く桂侯等の意見と同一なるが如く、其の不言の間に近接したる形迹や蔽ふ可らず、思ふに進歩黨の多數は桂侯の態度如何に由ては、換言すれば桂侯にして思ひ切て、公然進歩黨と提携せば、竟に甘んじて桂黨たるに至るべし、吾人の見を以てすれば、此の場合には彼の犬養毅氏と雖も必らず異存なかるべし

大同派を旗本とし、進歩黨及び無所屬實業派を外樣として茲に大合同大連盟を企て、且つ政友會中の内應者を招致せば、桂黨が衆議院に多數を制するや論を俟たず、而して其の事の甚だ面倒ならざるや亦言を要せず

（四）

政友會は桂侯に對して決して好感情を有するとなし、折角忍耐して總選擧を行ひ、之に由て兎も角も衆議院に多數を制し得たりしに拘らず、桂侯在るがために（敢て桂侯のためと做さゞるまでも）西園寺侯辭意を決したれば也、現に山縣公等が西園寺内閣を責むるに社會主義者の取締緩漫なるを以てし、之を闕下に伏奏したりといふが如き淺薄なる蜚語を放ち、西園寺内閣毒殺說をさへ流布せしめて、大に陣笠連の感情を激動せしめたる策士あるを視れば、彼等が桂内閣との間に竟に超ゆべからざる溝渠を掘らんとする意圖あること昭々たり

然れども政友會は、今斷然桂侯に反對を表する勇氣あらず、其の理由少くも二あり、第一は桂侯の將さに爲されんとする財政整理と外交刷新とは、西園寺内閣の名譽に取て少からざる毀傷を與ふべきが故に、政友會は之を嫉視して陰約の間に阻止せんと欲せんも、然かも堂々乎として之を正面より攻擊し反對する勇氣あらず、財政整理と外交刷新とは、國民多數の翹望し贊成する所にして、政友會若し公然之を妨害せば、痛く民心を喪ふべければ也、第二若し政友會にして桂侯の敵と爲らば、侯より手痛き壓迫を蒙むらざるを得ず、少くも侯は其の特有の高壓手段を加へて、政友會を粉碎せんとすべし、此の場合に至らば、政友會代議士の中、少くも四十人の脫黨者を生ぜんとは何人も之を想像す、折角得たりし代議士の多數を失ふと、政友會に取て最も怖るべき損失たり、故に政友會は少くも今冬期の議會には、敢て桂侯の敵と爲らず、不即不離の間に桂内閣を贊成して、自黨の無事中に結末を堅くするとを圖るべき也

若し夫れ西園寺侯にして樞密院に入るが如きとあらん乎、政友會は幾んど內閣を取るの機會を失はざるを得ざるべし、黨中一の總理大臣たるべき適任者なければ也、是れ幾んど首を喪へる象と齊しからずや、强ひて桂侯を迎へて總裁と仰ぐの外、全く出づべき途なからんとする也、然かも西園寺侯を巧みに樞密院に入るゝが如きは、桂侯得意の壇場たり、政友會は未だ俄かに桂侯に反對するを得ざる也

（五）

單に得失のみより打算せば、進步黨は假令如何の世評あるも、斷じて桂黨たるを利とすべし

進步黨は宜しく虛心にして政友會の過去を細視するを有す、自由黨の歷史は幾んど碧血の痕迹をさへ印したりし貴重のものならずや、然かも彼れは其の大を欲するがために、之を捨つると敝履の如くなりき、世間の所謂藩閥として嫉める所のものとも、彼れは其の大を欲するがために握手し交歡したりき、此がため藩閥に降伏したりといふが如き侮蔑的惡評を受けたるも、曾て寸分だも心に介せざりき、此がためには伊藤公を總裁とし、飽まで其の勢力と信用とを利用し得たりき、始めは九州進步黨たりし松田正久、長谷場純孝の諸氏をも網羅し、品川黨たりし元田肇、大岡育造の諸氏をも收容したりき、其の近畿東海に勢力を得たるは、また豈此がためならずや、改進黨以來進步黨の歷史は頗ぶる名譽あるもの也然かも之を愛惜するがために、却つて益々煢然として孤立し、孤立のため十年政權を得ず、逆境に立つも必らずしも多くの同情を集中し能はず、革新派猶興會とも一致するを得ざるにあらずや

故に桂侯若し政友會の總裁たるが如きとなくんば、進步黨は自から進んで全黨を侯の前に投げ出すべ

し、斯くして大同派無所屬實業派等の或るものと合同すべし、官僚派とも合同すべし、是れ自から大を成す所以にして又實に政權を得る所以の唯一手段ならずや

（六）

此の冬期議會は必らず無事なるべし、桂侯の實行する財政整理には必らず反對するもの莫かる可ければ也、財政以外今の處別に議會を衝動して、政海の波瀾を捲起すべきもの莫ければ也

桂侯の所謂一視同仁の下に、諸政黨も亦暫らく小康を保つの外なかるべし

政友會が爪牙を現はすの秋は、乃ち桂侯等の武裝する時也、否、桂侯の部下が武裝して蹶起する時也、侯は時として元老と雖も一蹴し去る氣慨なきにあらずと雖も、然かも悠揚不促を常とし、惡戰苦闘竟に寸分の餘裕なきまでに至るが如き質素に非ず、之を以て政友會假令挑戰するも、多く激戰せざるべし、然れども其の部下の大浦男は原敬氏と齊しく勇戰者也、寧ろ好戰者也、敵をして一敗地に塗まれてまた起つ能はざらしむるまでに惡戰すべし、桂侯は未だ戰はざるに早く戰機を見、直ちに敵黨粉碎の計圖を施すに止まらんも、大浦男等は最も露骨に、最も激烈に戰ふべし、是れ政界の一奇觀也、唯だ之を見物し得るの時期は、今尙ほ疑問の裏にあり、然り此の冬期議會にあらざる丈けは知るべきも、其の以後如何なる時季なるかは、未だ輕々しく判知し得ざるのみ

（七）

桂侯の今執るべきもの二路に岐る、一は言ふまでもなく、西園寺侯に代りて自から政友會を統率し、

官僚派大同派を合同せしめて政界に最大多數黨を作るに在り、二は西園寺侯と對峙の姿勢を永續し、進歩黨を根據として大同派、無所屬、實業派、官僚派等を加へ、且つ政友會中の或るものを拉し來りて以て多數を制するにあり、前者は西園寺侯に代るまで難きも、一び替れば前路は永く平安也、後者は其の初め易々たるも、幾んど烏合の如き大黨を操縱し訓練するの面倒あり、之を統合して始終多數を制するに費す精力大ならざるを得ず

或は政友會と進歩黨と提携して、猛然包圍し來る掛念ありと做すものあり、桂侯が一視同仁といふが如き體裁よき美名の下に、永く進歩黨を懊惱せしめば、彼等實に政友會と提携するなきを保せず、況んや革新派猶興會の中には、之を企畫する策士あるをや、是れまた一種の觀測也、然れども桂侯にして眞に財政整理を斷行して民心を繫ぎ、外交を刷新して中外の信用を得ば、政黨の包圍攻擊の如き恐るゝに足らざるのみ、桂侯は其の多年の經驗に依て包圍攻擊を免がるゝ技術を有すれば也



韓國に於ける統監政治

竹越與三郎

日露戰爭の遺したる事業として二つのものがある、即ち朝鮮と滿洲てある。此二つの遺産を如何に料理按排するかに依て、日露戰爭の禍福が決する譯であるが故に、國民は深く此二箇の遺産の營辨に就て注目し、且研究せねばならぬ。加之ならず凡そ近世の大國としては、第一に强大なる武力を有すると云ふ事、第二には此武力の威迫力を發揮する所の外交資源を澤山有つて、列國と互に利益を交換をする事、第三に殖民地を有つて居ると云ふ事が必要な條件てあるが、我邦は武力の點に於ては已に及第をした。第二の外交資源に於ても亦決して他國の後に落ちては居らぬ。唯第三の殖民地を有つて居ると云ふ事は、近年始めて出來た事てあるが、此殖民地を巧妙に運用し、經濟的に有利的に、且帝國の安全と開展との爲に經營すると云ふとになれば、大國の第三の條件が備はる譯であつて、今我邦は正に此點に就ては試練中であると謂はねばならぬ。然れば已に我が武力に嘆服し、我邦の位置に就て重きを措き、而して尚多少の疑を懷く所の列國が、我邦が如何に此殖民地を經營するかに就て、深き注意を拂ひつゝあることは偶然てはないと思ふが、之に反して我が國民は果して此殖民地經營に就て、列國が重を措くほどの重を措きつゝあるや、適當の注意を拂ひつつあるやと云ふことは疑問と謂はねばならぬ。

予は七月の末、事を以て京城に入たのであるが、第一に釜山に上陸して以來、到る處に我が日本人の勢力を樹立しつゝあるを見て極めて滿足し、而して統監政

治に就ても豫期したるよりも滿足を得て歸つて來た。故に自分の見る所を述べて世間識者の一考を請ひたいと思ふ。第一に言はねばならぬことは伊藤公の健康であるが、同公の元氣は依然として盛て、自分が伊藤公を訪問した頃は、恰度觀察使が全國より京城に集まり、公の訓令を受けて歸る最中であつた、炎熱の盛なる京城に在つて、伊藤公は朝の八時には已に客を見て、夕方に到るまで間斷なく應接して、依然として大磯に於けるが如く、大井村に於けるが如く、万丈の光焔を放つて居つた。韓國の事大に定まると雖も、制度文物の力のみに依賴すべからずして、依然として統監の一身に重きを置かねばならぬ。其人存すれば其政擧り、其人亡ぶれば其政廢ると云ふ場合であるから、第一に統監が非常の健康でなければならぬが、此點に就て統監は自分の豫期したよりも健康を有して居つた。是が第一に自分の滿足する所である。第二には制度緒に就いて、此制度を通して新しき生命の韓國に注込まれる段になつたので、一言にして謂へば韓國の事大に定まるのである。是れ第二に自分の滿足する所てある。第三には陰謀國の常として政治上の變化は恰も走馬燈の如く、殆と目、送迎に遑あらずと云ふ有樣であつたが、此紛々たる形勢の中より、伊藤統監は比較的に信用あり、比較的に技倆あり、而して比較的に最も堅固なる政府を作り、其政府の中總理大臣は英語を以て統監より訓令を受くることを得、以下の大臣中三人は日本語を以て統監より直接の訓令を受くることを得、十三人の觀察使中十二人までは、統監が日本語を以て直接に訓令を下すことを得ると云ふことてあるが故に、韓國の政府に對しては、統監が一つのベルを押せば、直ちに全國の津々浦々まで號令が響くと云ふことになつて來た。是より韓國の事大に見るべきものがあるであらうと思ふ、是れ第三に自分の滿足する所である。次に統監は此の如く渾沌たる形勢の中より比的に安全なる政府を造り、而して一視同仁、公平に彼等を指導教訓したる結果、朝鮮は政治の時代漸く去て産業の時代に入つて來た。今各地到る處に暴徒がある

と云ふことゝてはあつが、併し此暴徒たるや今日始つたものではなく、李氏の政府が起つて以來存在したこと、恰も臺灣の土匪は臺灣に支那の勢力の扶植せられた以來存在したるものであると云ふと同じく、歷史的の存在物てあつて、之に政體の變遷より來る所の政治的分子が加つたと云ふことてあつて、其勢力が稍膨脹したのではあるが、統監の恩威並施の政治は、着々と暴徒をジスアームして、今日に於ては政治的暴徒と云ふよりも寧ろ衣食に窮する草賊が時に出沒すると云ふだけに過ぎなくなつた。故に今後產業の發達に力を用ゐれば、韓國の事大に見るべきものがあるであらうと思ふ、是れ第四に自分の滿足する所である。一言にして謂はゞ、統監政治は漸く韓國人民をして生を了せしめ、統監を中心としたる新しき政治に向つて信賴するの端緒を開いたものと謂つて宜いので、韓國の事大に定まると謂つて宜からうと思ふ、是れ則ち近頃統監更迭問題などの風說せらるゝ本であらうと思ふが、併ながら今日統監の一身が重をなすので、未だ制度がありさへすれば誰でも治め得ると云ふ迄にはなつて居らぬ。所謂其人存すれば其政擧ると云ふことになつて居るから、其人亡ぶれば其政共に廢ると云ふことは免れぬので、統監一たび足を擧れば、韓國の事再び紛亂するであらうと云ふことは、自分の信じて疑はぬ所てある。故に統監は朝鮮の事を考へたならば、決して今日未だ其身を韓國より引揚げると云ふことにはなるまいと思ふのてある。

此の如くしく統監政治は其成功の曙色を見せたのであるが、事實に就て列擧すれば、第一韓國を開發し產業を起すの道は、道路を改修するに在る。世人の知るが如く朝鮮には殆と道路なるものなく、曾てありし道路も車馬を通することの出來ぬものであつた、明治二十七年、三十七八年の戰爭に、我が軍隊が造つた道路なきにあらずてあるが、是は軍事上必要なる部分に止つて、一般の交通の便否を考へたものではなかつた。然るに今回一百五十萬圓を投じて四つの道路を開鑿することになつた、則ち榮山江の流域を木浦に通ずる道

路、大邱より慶州を經て迎日灣に至る道路、鎭南浦より平壤を經て元山に至る道路、錦江の流域を群山に通ずる道路、是は產業の開發に就て前途大に望ある土地を、港灣又は鐵道に聯絡せしむる道路であつて、此道路は殆と理想的に立派なもので、是が出來た曉は物貨の運輸、人民の交通に非常の便利と刺戟を與へるてあらうと思ふ。のみならず此道路を造るに就ては、多數の土民を使用し、彼等に職業を與へ、同時に賃銀として彼等の間に流入する通貨の多きことに依て、此地方を中心とする暴徒の勢力は非常に衰へて行くといふ結果になるであらうと思ふ。勿論一百五十萬圓が費用の總てにあらず、之に伴ふ所の費用は地方々々をして負擔せしむる積りであるさうである。第二には韓國の都會は飲料水に乏いものが多い、有つても惡水であつて、流行病が一たび起ると云ふことになれば、燎原の勢を以て傳播するのである。故に水道を設けて良い水を飲ましめると云ふことが何よりの急務であるが、其中仁川は差向き此水道の必要を感ずるから、統監府は二百三十萬圓を投して仁川に水道を敷設することに決した。又平壤は北方に於ける大都會て、此地方一帶の產業中心であることは、邦人が想像する以外のものであるから、此地方にも亦百三十萬圓を投じて水道を布へることゝなつて居る。此等の事、緖に就いたならば、之を模範として各地に同一の事業が起き、且衞生の設備の良いことは、如何に人民の幸福に結果を來すかと云ふことを知らせる實物教育となるてあらうと思ふ。

第三に統監府以前に於て新しき教育を施す制度が無いてはないが、主として形式に止つて、統一もなければ實質もない、それに所謂寺小屋風のものと合せて教育機關となつて居るのであるが、明治二十八年小學校令が出て以來、已に十年經つけれども何等の成蹟がない、故に今回は總て實質から系統から改めて、組織のある教育を施すことゝなつて、多くの教育費を投ずることゝなつて來た。又京城に一大病院を建てゝ、建築費二十八萬圓、經常費十二萬三千圓といふ豫算て、已に工事に着手した、所謂佐藤博士のやつて居る大韓醫

院なるものは是れであるが、是れが出來た曉は實際の治療、醫者の敎育、衛生上の行政をやらしめる積りであつて、文明は多く醫者より入ると云ふことが事實とするならば、韓國開發に於て最も有力なる部分を働くものは此病院であらうと思ふ。

それから宮中の肅靜といふことが行はれたのであるが、元來朝鮮は宦官宮妾の跋扈する所であると云ふことは言ふまでもないが、大臣あれども纔に皇帝の意志を迎へて己の利益を謀るに過ぎない所に持つて來て、皇帝は此大臣を信任せずして自ら政治をせられ、其の手先となる者は宦官宮妾であるから、眞の政治を行はうと云ふ者には先づ宮中を肅清する必要がある。是に於てか統監は皇帝陛下に申上げて、第一皇宮を護る警察は、日本人に依つて組織せられて韓國の警察職務を行ふ其の顧問警察に擔任せしむることゝなつて、警察官をして門を護らしめると云ふことになり、それより委員を設けて、宮中肅清に關する種々なる事項を審議せしめて、宮禁令も出、門鑑の制も勵行せられ、雜輩を逐出し、宦官宮妾が陰謀を逞うする途が段々と狹くなつて來た。此事に就ては大に宮中に於て疑を懷く者が無かつたではないが、今日に於ては最早已を得ざることゝ皆思ふて來るやうになつた。それから又從來鮮朝の警察なるものは、唯事あつて後其事を料理すると云ふこと、即ち盜賊があつたら其盜賊を捕へると云ふに過ぎないで、豫め警戒し、治安を維持すると云ふことを主としなかつたのである。而已ならず其の警察官が往々にして盜賊以上の惡事をする者が無いでもない、誠に不穩千萬のものであつた。所が今回は統監府に警務總長一人、警視二人を置いて、警部は統監府及各理事廳を通じて五十人までを置き、五百人の巡査を之に附屬せしむることゝなつた。而して此補助機關として十三道の觀察府に警務顧問支部を置き、それに又警視一名、警部一名、巡査數名を配置し、此支部の下に分遣所二十六箇處を置き、其の分遣所を區劃して百二十二箇處の分派所を設け、之に巡査及韓國巡査を配置することゝなつたが、其結果は警視二十一名、警部

五十四名、通譯四十六名、巡查六百十三名となつて、而して韓國の警察は巡檢二千餘名之に附屬することゝなつて居る。近頃又更に二千の憲兵を朝鮮人より募集することゝなつて來て、是より各地の治安が更に完全に維持せらるゝ事となるであらうと思ふ。それから裁判制度、是は朝鮮に於て最も恐るべきものゝ一つで、裁判は則ち行政官の掌中にあるので、賄賂に依て生殺が定まると云ふやうなことで、最も恐るべき機關の一つであつたが、統監府は全力を盡して裁判制度を改善し、且法典を編纂すると云ふことに力を盡して居る、是は數年の後必ず善良の結果を來すであらうと思ふ。其次には財政の整理であるが、宮中を粛清し、宮中府中を別ち、豫算を作ると云ふ結果は、財政は整理せられた、是より經濟が開發せらるゝならば、大に見るべきものが有るであらうと思ふ。

それから朝鮮に於ける外國との關係、及種々なる評判を惹起すべき種は鑛山である、韓國は國貧と雖も鑛物は可なりあるので、此鑛山を開發することを許す許さぬと云ふやうな事が、外國との關係、及官吏人民の結托といふやうな事になるのであつたが、所が或は農商務大臣が鑛山採掘を許可するともあれば鑛山局長が許可することもあり、或は屬官が許可することがあり、或は宮內府の官吏が許可し、或は皇帝自ら之を許可すると云ふやうな事があり、或は同一の鑛區を前後二人に許すと云ふやうな事がないでもなかつた。而して統監府が其後を承けて前後二人に許してあるが、是は何方が確かであるかと云ふことを照會したらば、韓國政府は之に答へて、何れが正しきや世間の公論必ず歸する所あるべしと云ふやうな返辭をしたと云ふ滑稽な話も無いではなかつた。其間奸黠の徒が加つて賄賂を取る、若くは脅迫をすると云ふやうなことで、殆ど手の着けやうが無かつたのであるが、統監府は鑛業法を作り、それより此從來の紛糾したる懸案中に成て居つたものを總て處分し、且外國と懸案中になつて居つた問題も、總て公平に各國の出願者に許可することゝなつて一段落を告げた。あまり人は注目せぬが、此鑛

山を開發する爲に多くの坑夫を使ふ、其工夫は新に事業を得る、其事業は賃銀の分配となり、賃銀の分配は韓國の經濟社會を活動せしむると云ふことになるので、雲山の金鑛の如きは三千人の坑夫を集めて仕事をして居ると云ふことである。數年の後、是亦必ずや好結果を全體に來すであらうと思ふ。而して最後に全力を盡し殖産興業を奬勵するに努め或は農林學校を設け或は模範林を設け、殖林の事を勸むる、或は棉花栽培を奬勵するとか、綿繰工場を設けて其綿を使ふ途を設けてやる、又機織の術を敎える、陶器を造るの術を奬勵する爲に工業傳習所を設けるとか云ふやうな事で、着々と新政を施して居るが、是等の新政の精神は何てあるかと云ふに、統監の政略は日韓兩國の民を一視同仁に取扱ひ、韓國の政治は韓國人民の爲にするのであつて、決して日本の奴隷にするのではないと云ふことを大方針として居るのである。是れ即ち韓國人民が統監の新政を謳歌せんとする所以てある。

自分が京城を辭して歸る時、一觀察使と汽車を共にした、所が其觀察使は日本の或下等新聞を展げて自分に指して言ふには、此新聞を御覽下さい、統監は暗殺を恐れて、統監を辭して日本に歸ると云ふことを眞面目に報道してある、統監一たび足を擧れば韓國の事、最早爲すに足らぬ、無論統監は去られる氣遣ひはあるまいと思ふが、併し貴國の新聞が此の如き記事を書けば、朝鮮の人民は貴國の新聞を讀んで之を信ずる者がある、一人信ずれば十人に傳播せられ、十人に傳播すれば百人に傳播せられ、而して又是れが暴徒に知られる機會があるのである、て一般人民は統監の新政に信賴して來た時に統監が去ると云へば、最早統監は善をしても惡をしても迚も賴むに足らぬと思ふ、而して暴徒は統監の誠實と公平といふ武器を以て、寛やかな、併ながら手强き壓迫を蒙りつゝあるのに、統監去ると云ふことを聞けば大に勇氣を增して來るのである、どうか貴國の新聞ももう少し國家的に記事を書いて貰ひたいと云ふのであつて、余は如何にも耻入つたことであつたが、此一事に依ても如何に統監の個人的信用

が、新しい政治の中心となつて居るかと云ふことが分る。其の個人的信用は何である、即ち統監の誠實に、公平に、日韓人民を一視同仁に取扱ふと云ふ赤心が、彼等の腹中に置かれたからである。

故に日韓人民を一視同仁して、朝鮮人民の爲に朝鮮の政を行ふと云ふことは、統監政治の大方針であるが、多くの事に付ては統監に敬服し、新事業の利益を認め、統監の人物に服する人と雖も、此一視同仁の方針に對しては異議ある者が少くはない、否朝鮮在留の日本人民中、言論ある者は多くは反對者であると云ふことを自分は斷言しても宜いと思ふ。併ながら予は此點に就ては、朝鮮在留日本人の味方たる能はず、予は殖民政治の研究者として、統監が斷じて此方針を以て進まんことを希望して止まぬ者である。抑々我が國民は武力に於ては列國を嘆美せしめて居る、又種々なる新事業を經營するの才に於ても決して人後には落ちぬが、併ながら殖民地の所有者としては、實は十年以來の成上り者に過ぎぬのであつて、殖民地經營の經驗は僅に臺灣の蠢爾たる生蕃に對して得たと云ふことに過ぎぬ、稍々歷史あり、稍々國家の形を成した殖民地に對して手を着けるのは朝鮮が始めてゞある。予は誤解のない爲に一言せねばならぬが、朝鮮は日本の保護國である。併ながら大要殖民政治の點より論ずれば、苟も我が國家より見れば、我邦の宗主權の及ぶ本國以外の地は、總て廣き意味に於て殖民地と云ふのであつて琉球も殖民地であり、臺灣も殖民地であり、而して保護國たる朝鮮も亦廣い意味の殖民地てある、滿洲も亦然りてある。獨逸の如きは膠州灣を租借して、而して之を保護地と云つて居る、故に廣い意味に於ては宗主權の及ぶ本國以外の土地は總て殖民地といふことは毫も差支ないことゝて、便利上自分は斯く朝鮮を殖民地と呼ぶのである。決して朝鮮の社稷を合せて之を我邦のものにしやうなどゝ云ふ考ては毛頭ないのである。が、此殖民政治に於て極て經驗の少い日本人は、又極て殖民政治に於ては巧妙であるとは言へない。大要現今世界に行はれて居る殖民政治を分つて二派とするこ

とが出來る。一は英國流、一は佛蘭西流と云つて宜いと思ふ。英國流は能く其土地の狀態に適應して、治めざるを以て治めると云ふ方針であつて、佛蘭西は之を同化し、急激なる手段を以て壓服せんと掛かるのである。何方かと云へば日本は文明を及ぼすとか、同化するとか、或は軍隊の力を以てドシ／＼鎭壓するとか云ふことを好きな方で、稍々佛蘭西流の殖民政治を好きな人が多い。否殖民政治に就ては實は研究する人が少いから、極て單純なる議論が耳目に入り易い。此點に就ては世間の識者すらも、往々にして笑ふに堪えたる議論を唱へるのは、畢竟殖民政治の研究が足りないからてある。今朝鮮に就ても、統監の政治に就て不平を起す人々の議論を聽けば、手緩いとか、若くは朝鮮人などはドシ／＼と軍隊の力を以て壓迫せよとか、或は統監が日本人の利益を謀るに迂てあつて、朝鮮人の利益のみを謀つて居る、此の如きは朝鮮を保護國とした主意てないと云ふことを唱へる者が無いてもないが、予は是等の人々が少しく英國の殖民政治が如何にして成功し、佛蘭西の殖民政治が如何にして多くは失敗し、而して偶々成功したる佛蘭西の殖民政治は保護國政治てあると云ふのは何故であるかと云ふことを研究して貰ひたいと思ふ。所謂治めざるを以て治むるは、夷狄を御するの道であると云ふことは、支那の政治家が數千年來言つて居ることてある、支那の今日まで其大を致した本は此方針てある。此點に就ては我日本人は實は支那人にさへも及ばぬのである。極て性急て、極て短慮て、極て彈力のない政治が好きてある、所謂武術政治なるものを殖民上に就ては唱へる人々が多い。佛蘭西の安南總督てあつたルネサンスの語がある、軍隊政治は失敗した後てなければ其過失を覺ることが出來ない、何となれば軍隊政治には批評がない、故に失敗した後に非ずんば自分の失敗を認むることが出來ないと言つたが、朝鮮に對してドシ／＼やれとか、手緩いとか、朝鮮人の爲てなく日本人の爲に政治をせよと云ふことは、即ち所謂武斷政治を行へと云ふことてあつて、若し此政治を行つて、其政治自らが過失があると

云ふことを覺るの日は、即ち全然朝鮮を失つた後てなければ覺るまいと思ふ、此の如きは決して國家の慶事と云ふことが出來ぬのてある。

加之ならず朝鮮を保護國として我が宗主權を及ぼす以上は、一寸の土、一人の民と雖も亦我が皇上の恩澤に浴すべきものてあつて、此點に就ては南臺灣の民、北樺太の民と少しも區別はないものと謂はねばならぬ。然れば其一寸の土たりとも、一人の民たりとも、我が日本人が之を陵辱し、之を侵略して宜いと云ふ道理はない、皇上の目より見れば等しく是れ臣民てある。然れば其臣民に對して一視同仁の政を施すと云ふことは、統監として當然の義務てあると思ふ。所謂これが堂々たる王者の政てある。併ながら此堂々たる王者の政は、決して宋襄の仁てはない。列國の殖民政治の跡に就て考へて見れば、此王者の政は即ち最も經濟的、最も本國に利益ある政治てあると云ふことを證明して居る。英吉利が印度を所有して以來一百餘年、其間賢良の政治家少なからざるにも拘らず、賢良の政治家は何時も印度在留人民の反抗を招いて居る。而して印度在留人民の人氣を得るが如き政治を施す者は、いつも本國の爲には不利益てあつたのてある。印度の政治中最も困難てあつたのは所謂大叛亂、即ちミユーチニーてあつたが、此ミユーチニーを起した本は何てあるかと云へば、即ちラムセー卿の所謂高壓政治て、印度人信ず可らず、印度人はドシ〳〵鎭壓すべし、印度の事業は總て英吉利人が經營せねばならぬと云ふ、所謂武斷的政治を施して在留英吉利人の人氣を得た、此ラムセーの高壓政治が即ち印度人の叛亂を來した所以である。之が爲に英國は數千の兵士を失ひ、數千萬の費用を損じ、實に英吉利の統監政治の汚辱を來したのてあつたが、其本は何てあるかと云へば、ラムセーの所謂人氣取政治に起つたに外ならぬのてある。朝鮮在留の日本人は無論識者あり、經驗に富む人あり、有爲の才ある人多々ありと雖も、如何せん身其の境遇に居つて其事を考へれば、勢ひ居留民的の議論とならざるを得ない。居留民的の議論とは何ぞや、朝鮮人と親しく相

接するが爲に、人種的輕侮の念、利益權擴張の念、恩讐の念を言ふのである、故に此の如き人々の議論は、帝國的に考へ、帝國的に立てたる經綸と云ふことは出來ぬ。若し居留民の議論のみを顧みて居つたならば、西洋列國何事をか爲し得べき、日本が列國と條約を改正すると云ふ時に方つて、日本在留の列國臣民悉く之に反對であつた、併ながら列國の本國は皆居留民の反對を顧みずして日本と新しき條約を結んだ。若し結ばなかつた國があつたとしたならば如何であらう、此雄大にして希望ある國民の敵となるのであつた。若し居留人民の輿論を顧みて之に拘泥して居つたならば、英國政府は日本と同盟を結ぶことが出來なかつたのである、否日本反對の同盟に加つたかも知れないのである。併ながら本國に於ける聰明なる政治家は、居留人民の議論に耳を傾けず、斷じて日本と握手した。此握手が如何に重大の結果を生じ、如何に歐羅巴に於ける英國の地位を揚げたかと云ふことは、論ずるまでもない事である。居留人民勿論聰明の人なきにあらず、併ながら如何せん眼前の境遇、咫尺の變りに依つて其目を眩ます爲に、本國に於ける政治家が帝國的に考へ、帝國的に計畫する大經綸に想ひ到ることが出來ぬのである。朝鮮に於ける統監政治も亦此の如し、居留人民は勿論統監の一視同仁の方針を批難するには相違ない併ながら此批難は毫も顧るに足らぬのであるから、予は統監が帝國的に考へ、其經綸を斷々乎として進行するに就て、少しも躊躇する所なからんことを冀ふ者である。

予は世間に朝鮮を合併して日本の屬國たらしめよと云ふ議論のあつた事を知つて居る、予は何故に我政府が之を屬國とせざりしかを知らぬ。併ながら朝鮮が我邦の保護國となつた時は、國民が皆此保護國たることを滿足したことを知つて居る。抑々保護國と云ふことを歡迎した人民は、朝鮮に就てドシ／＼やれとか、高手的政治を施せとか云ふことを注文する權利の無い者である。保護國とは何である。佛蘭西人が發明した最近の殖民政治である、保護國とは其國の大體を掴ん

て、細目は之を土民に一任すると云ふことに外ならぬのである。佛蘭西人が保護國の利益を數へた中に斯う云ふ事を言つて居る、保護國は土臺のある其儘に繼足しをして普請をするのが保護國である、土臺を切平げたり、切繼いだりしないで、在來の儘に家を繼足して建築をして行く、是が最も經濟的な譯である。然るに之を同化するとか、之を造り直すとか云ふことゝなれば、非常の勞力と非常の金が要る、而して其結果甚だ下らぬものである。然るに保護政治は之に反して、其儘にして繼足して行くから、功多くして勞少ない、是が保護國の妙用であると。然れば朝鮮を保護國とすることを認識した日本人は、即ち普通に行はれる所の保護國の方針たる、治めざるを以て治めると云ふ方針をも歡迎したものと言はなければならぬ。然るに其保護國たることは承認して之を受入れて置きながら、其實に至つては依然として之を切平らげ、之を造り直し、之を同化し、直接政治の責任を取り、費用を掛け、怨みを招き、空想を實現せんとし、恰も奴隷の如く之を取扱はんとするに至ては、何ぞ前後矛盾の甚しきや。若し保護國と雖も猶此の如き注文を行ひ得るものとしたならば、是は保護國の何者たるを知らぬ連中てある、若し又今の事を是なりとするならば、則ち保護國を歡迎したことが間違てある。朝鮮に對して今日尙武斷政治を行ひ、侵略的に利益を壟斷せよと云ふことを注文するは、不明の譏りか、若くは歡迎したことが間違てあつたか、二者其一に居らねばならぬのである。況や朝鮮は佛蘭西のチユニーズに於けるが如きものではない、日本の臺灣に於けるが如きものではない、勿論英吉利の馬來半島に於けるが如きものではない、又英吉利の印度に於けるが如きものではない。兎に角數千年の歷史あり、數百年の王朝を有つて居り、制度もあり、多少の愛國心もあり、人種的の反感を有つて居る、此國民を取扱ふことと他の國の如くせよと云ふことは決して出來るものではない。他の國に於てすらも武斷主義は殖民地に行ふべきものでない、況や一國の存立を長く保つて居つた朝鮮に於ておや。若し人氣取の

政治家が出て、ラムセーの如く武斷主義を朝鮮に行ふ者があつたならば、其の結果甚だ高い代價を拂はねばならぬと云ふことを自分は豫言して憚らぬのである。朝鮮は國防の經綸よりすれば日本の爲めに存在するものではあるが、其民政は其臣民の爲めにするものであつて、決して日本人民の爲めのみを謀るべきものでないと云ふことは、我國民が造次にも忘れてはならぬ方針である。若し此一事を忘却したならば、其政は凶猛なる侵略者の政治であつて、王者の政治でない。王者の政治でない者は其傾覆、久しからずてある。予は此點に就て我が居留民が帝國的に考へ、殖民地に臨む本國の人民は極めて大人の位置に立たねばならぬものであると云ふことを考へて貰ひたいのである。

以上の如く予は統監政治に就ては、居留民が極て大人の態度を以て帝國的に考へんことを望む者であるが、少しく統監政治の批評家の種類を解剖せるの必要があると思ふ。其一部は居留民中の稍々議論のある人々て、長い間朝鮮と交際して、朝鮮人の弱點を知り、短處を知り、屢々彼等の爲に欺かれ、屢々彼等の爲に汚辱を受け、彼等を輕蔑するの念と怨讐の念に依て、朝鮮人は到底濟度すべからざる動物であると思ふて、此の如き動物に對しては殆と遠慮會釋は要らぬ、どし〳〵日本人の利益を謀るが宜しい、是れ則ち文明を彼等に及ぼすものであると云ふ考から來たもので、其考は誤謬と雖も、決して惡意から來たものでないと云ふことを言へる、是が第一種である。其次には朝鮮の位置が今日の如くならぬ前に、大國の威權を挾んて種々なる利益を受けて居つた階級がある、即ち我が法權の及ばざることを幸として、個人的の威力に依つて彼等を脅迫し、彼等を欺罔し、或は彼等と共同して種々なる利益を占有して居つた者が、今日は法令あり、政治あり、正義行はれることゝなつて來たが爲に、彼等の利益が極て制限せられて來た、之に依て統監政治を喜ばず、寧ろ前日の如く紊亂に乘じて私意を逞うする時代を回顧する者がある、是が第二種である。第三は伊藤統監は獨り文權のみならず、陛下の思召に依つて朝鮮

に於ける武權をも掌握して居るが爲に、制を統監に受けねばならぬ軍人があつて、往々心之に平ならず、我若し局に當れば此の如きことはせざるべしと云ふが如き口吻を以て事を論ずる軍人が、東京にも朝鮮にも無いとは限られぬ、是れ等が即ち居留民の議論と相投合して不平を起す第三の原因である。第四は朝鮮の事大に定まる爲に、統監をして此地を退かしめ、自家の勢力を朝鮮に及ぼさんと思ふ人々があつて、今二三年統監をして朝鮮に在らしめば、天下萬衆公然其の成功を認むるの日來らんことを恐れ、寧ろ今日に於て統監を退かしめて、其の難關は伊藤公をして之に當らしめ、其の結果は乃公之を收獲せんと思ふ人々が無いでもない、是等が或は機關新聞に依り、或は耳語に依て統監を批評し、統監をして鬱々として志を得ず其地を退かしめんとする者が無いでもない。是等が大要重なる原因と思ふが、人各々境遇あり、人各々利害あり、必しも予は之を批難することは出來ぬが、併しどうか是等の人々は、朝鮮が國際に於て如何に列國の視聽を集め

て居る所の大問題であるかと云ふことを考へて、帝國的に考慮せんことを冀ふのである。埃及は英國の手に入るもの既に久しと雖も、六七年前までは尚列國の間に機會もあれば埃及問題を惹起して、英吉利の手より埃及を奪ばんとする運動は存在したのである。英國が埃及を握るとは日本が朝鮮を握ると同じことである。列國は英國に對してすらも埃及問題を惹起さんとする者あるに方り、機會もあらば朝鮮を問題として列國會議の種とせんとする策士が歐洲大陸にあると云ふことは、考へて置かねばならぬ。而して日本が朝鮮に於て武斷政治を施すと云ふことは、而して其の結果として朝鮮が動搖すると云ふことは、列國の策士をして口實を得せしむる本である。固より如何なる國が來て朝鮮を爭ふも、我が力能く之を攘ふことは得べし、併ながら政治の妙は此の如き力を用ゐざる前に難を解き紛を解くに在るのである。日本は朝鮮を握つて決して安心すべきではない、機會さへあれば埃及問題を惹起さんとする者あるが如く、機會さへあれば朝鮮問題を起さ

んとする者があると云ふことを忘れてはならぬ。日本の外交問題なるものは殆と解決せられて、今殘つて居る所のものは朝鮮と滿洲のみて、是が日本の外交問題のフォーカスとなつて居る、列國の視聽は悉く玆に集つて居るのである。此二問題の料理方に依つて列國の同情を得ると得ぬとは、他日事のあつた時非常なる結果を來す者てあると云ふとを決して忘れてはなるまいと思ふ。ナポレオンは天縱の英武に依て歐洲を席卷した、乍併單に武力を恃み、單に自家の力量を恃み列國の同情を開拓しなかつたと云ふが爲に悉く列國を驅て敵としてしまつた。武力に依て得た土地をも失つた。列國の同情なるものは、平日に於ては何等の力なきが如くてあるが、いざ事のあつた時は列國の同情は則ち勢力にコンバルトするのてある。願くは我が國民が朝鮮滿洲を料理するに於ても、公平なる王道に依つて、列國をして朝鮮を有し滿州を有するレーゾンデートルは如何にも至當てあると感ぜしむるだけの政治をして貰ひたいと思ふのてある。伊藤統監の朝鮮に於ける政治、必ずや是等の事を眼中に措いて、帝國的に割出されたる經綸から來て居るに相違ないと思ふ。然れば本國に幷に朝鮮に於ける論客は、此博大なる經綸に對しては、深く同情を表するの必要があると思ふ。

或は印度若くは埃及に於ける英吉利の政治を以て、朝鮮に於ける日本の政治と比較する者があるが其の形跡に於て相似たることなきにあらず、然れども埃及より英國に至る相距る二千里、印度より英國に至る相距る五千里、此海は能く英吉利人の浮浪の徒をして、此二つの殖民地に入らしめることを防いで居る。然るに朝鮮は僅に八時間あれば日本より渡れると云ふこと、五圓か十圓の金があれば何人も到れると云ふことてあるが爲めに、生活上の不良の徒も多く、同時に政治上のアドベンチユラーも多く渡つて居る、是等が事を惹起し、種々なる面倒を惹起すと云ふことは、埃及印度にない事てある。是等の事を思へば、伊藤統監は實に埃及に於けるクローマー、若くは印度に於ける太守の政治よりも、最も困難なる局に當つて居ると云ふこと

を考へてやらねばならぬ。自分は思ふに伊藤公の歴史中、今日は最も彼の高尚なる心性を發揮したる時であると思ふ。彼の少年及び政權を得た後と雖も、決して一身功名の念無かつたとは言へまいと思ふ、併し今日は功名已に足り、富貴已に極り、復た求むる所あるなし。此身を提げて朝鮮の難局に當ると云ふことは、彼が蹇々として國家を思ひ、聖天子の付託に感ずると云ふ念より外はあるまい。昔ウヰリヤムテンプルは、國家の利害と、皇室の榮辱と、已の一身の利害と一本筋に行つた時でなければ身を起さぬと言つたが、伊藤公は今日己の一身と日本の國家とを殆とアイデンティフアイして居るのである。即ち今日は此老政治家の最も高尚なる心性を發揮した時であらうと思ふから、我が國民は彼の事業に對しては、滿腹の同情を以て見るべき時であらうと思ふ。

大磯雜感

芳賀矢一

子供等を携へて大磯に來た。淸凉な風は流石にこの地のものである。汽車は東から十二回、西からは十一回。都の友人も尋ねて來る。原稿の催促も相變らず來る。日中の暑さは東京と少しも違はぬ。友人との談話を書きつらねて、雜誌の責を塞ぐ。

大磯は日本海水浴の元祖、廿五年來建てつらねられた別莊の數は數百戶にも上らう。今年來て見れば、圓位堂の前も横も、すべて新しい別莊で埋められて仕舞つた。むかしから俳諧の俗宗匠の住家となつて居る上の仕方である。西行法師を再生せしめたならば、上の句だけはやはりむかしの樣に心なき身にも哀は知られけりと口ずさむに相違ない。

岩崎家の別莊は日本一の富豪だけに、町の中央の丘

陵を其儘に恰も城砦の樣な觀がある。滄浪閣附近の顯官、貴紳の別莊はいづれも數百步の松林を邸内に圍ひ込んで、大磯としての景勝はまづこれ等の別莊の中に收められて仕舞つて居る。

天下に隠ない大磯の海水浴、鎌倉以來の名勝の地。外人も來れば回遊列車に初見の田舍人も來る。來て見ても何も見るものは無い。娛樂を求める場處もなければ、知識を得る道はもとより無い。宏大な別莊は皆それ〴〵の城廓であつて近寄る事が出來ない。

この別莊の城廓内から每晚相競つて上げる花火の數は百本や二百本は上る。是を金に積れば尠くとも百圓は下るまいといふ。「千兩の花火間もなき光かな」の江戶の繁華は今はこゝに移されたのである。これらの富豪の城廓を綜合したものが大磯であつて、其外に大磯は無いのである。

富豪の豪奢はもとより當然である。けれども日本一の貴紳富豪のかく迄多く住居する場處としては、今少しく公共的設備は出來ぬものであらうか。公共的設備といふよりも上下打解けて親睦する樣な設備は出來ぬものであらうか。西洋では一寸した田舍にも、每日每夜奏樂の會が催される。神戶や橫濱の居留西人の仲間にも、夏の夜などは必ず音樂會があるのに、さりとては、こゝに音樂堂の一つ位はあつてもいゝぢやないかと一友人は慨歎した。日本人の性質はどこまでも貴族的で、籠城主義であるのか。

國民の性質は家族主義である。家族團欒の樂を專らにするのが主になつて、社交の方には疎かになるのかも知れぬ。けれども別莊といふものゝ中には如何はしい家族以外の人の住んで居る事も珍しくは無いのである。門塀嚴めしい城廓内へ賤しい婦人の出入することは更に最も珍しくないのである。一事が萬事、どこまでも内所的で衆とともに樂しむといふ風の無いのは今日の上流社會否一般國民の氣風ではあるまいか。これは單に別莊の問題では無いが、別莊を見て感じたからいふのである。花火を上げるのも衆人に見せる爲とはもとより受取れぬ。これは恐くは虛榮の表彰に外なら

ぬのである。

これだけの海水浴場には圖書館の一つ位はあつてもよろしい。旅行中に多くの書籍を携へるのは人々の難義てあるから、相當な圖書館があらば讀書家には何よりの福音てあらう。四方から集まつて來て居る男女學生の爲にもどの位の利益てあらう。新刊の書物は何か無いかと街上に散歩してみれば、繪葉書の外にはまづ博文館の文藝倶樂部、御伽草子、その外は小説類が少しあるばかりてある。貸本屋は調べても見ぬが、やはりそんな事てあらう。

今年始めて見たのは海岸に設置された新聞閲覧場で、これは狹い交番所然たる建物だが東京新聞はもとより全國樞要な都市の新聞も餘程澤山集めてある。雜誌も少しはあつた。誠によい思付て、至極贊成てある。今少しく雜誌などを取揃へ、ゆく／＼は新刊書なども集めたらよからう。

謠をうなるのも知合同志、碁をうつのも知人仲間、宿屋滯在の人の籠城主義は、別莊住居の籠城主義と少しも違つて居らぬ。天然の海そのものが一大共同浴場てある外は、何等社交の倶樂部といふものが無い。友人が尋ねて來ても一寸一緒に談話をする樣な場所が無い。西洋人の尋ねて來た時などは殊更困る。大富豪にはそれ／＼一家内にその設備があらうが、大磯そのものとしてはそれがどこにもないのてある。建築の大小精粗は問はぬが、何かかういふ建物があつて、會合でも出來る場所があらばと思ふのは余一人のみではあるまい。歐米の社交的國民ならばとくに出來て居る事とおもふ。

別莊以外には何もない大磯町民に向つてこの設備を迫るのは酷てある。さりとて貴族主義、籠城主義の貴紳、富豪から急に色々な設備をして貰ひたいといふのでもない。實は大磯だけの問題ては無い。平たくいへば、もう少し國民の氣風が開けて呉れなければ困るといふ所感を述べたのてある。西行法師には沒交渉の問題てあるが、或點までは法師も贊成するかも知れぬ。

家族主義に對する疑問

藤井健治郎

日露戰役以來我國の一部の人々の間に、家族主義は我國の精華であつて、此大戰役に於て光榮ある大捷を收めたのも、其主たる原因は家族主義である、故に將來益々我日本の國威を增し、國力の發展をなさんが爲めには、此主義をして益々發達助長せしめて行かなければならぬと云ふ意見が行はれて居るのであるが、其所謂家族主義とは如何なるものを指すのであるかと云ふと、之を主張する人々の間にも多少意見の相違があつて、一樣に明晰なる定義を下すと多少困難のやうである。或る一部の人の言ふ所と、他の一部の人の唱ふる所とは矛盾することもあるので、其統一した意見を纏めることは出來ないが、其些少の相違或は矛盾等を取除いて、一致して居る點を纏めて見ると、其所謂家族主義と言ふのは、家と云ふものが永久の生命を有つて居つて、其家に現はれる所の代々の個人と云ふものは、唯其家を祖先から承繼ぎ、又之を子孫に傳へると云ふことに於てのみ生存の意味を有つて居る。譬ふれば家は主權の活動體であつて、代々の人は唯其家の政を執る、其時其時の役人に過ぎない、之れが所謂家族本位の主義である。

偖て家族主義とは此の如きものと見て、是に就て二三の疑問を發して見たいと思ふ。併し其所謂家族主義乃至それに對する個人主義と云ふもの、哲學上、倫理學上の理論に屬する根本的の疑問は姑く別問題として、之を省き、今日日本に於て實際問題として考察したる時に起る所の疑問を述べ、それを說明して見やうと思ふ。

其疑問の要點は、前述の意味に於ける家族主義なるものは、今後果して我日本の社會の上に長く存續することが出來るかどうか、若し未來永劫に存續することが出來ないものとするならば、今後どれ位の生命を有するであらうか。家族主義を主張する人々は、此主義は是れ我が國體の精華なるが故に、未來永劫益々之を

發展助長せしめて行かなければならぬと云ふ意見を懐いて居られるけれど、現今の我が國情及び社會の進歩の有樣は、此主義を主張する人々の論に不利益なる事柄が澤山あるやうに思はれる、從つて一部の家族主義を主張する人々の意見あるにも拘はらず、之に對して疑問が起つて來た次第である、其不利益なる事柄と云ふのはどう云ふことかと云ふと

第一、**身分及職業**の世襲と云ふことが全くなくなつたと云ふことであり、又次第になくなりつゝあると云ふ事柄である、封建の時代に於て先づ之を士分の上に見ると、家老の家に生れたる者は、子々孫々家老となり、足輕の家に生れたる者は子々孫々、足輕となる。尤も中には足輕より立身して、一代の間に家老職に昇つたと云ふやうな人もなかつたのではないけれども、併しそれは極めて異數の出來事であつて、大體に於ては子々孫々身分を相續して行つたのである。又農、工、商の方面を見ても、之には素より士分程のものはないけれども、矢張り其家の格式、或は其部落々々に於ける地位と云ふやうなものは、自ら傳へられてあつたやうな有樣である。それから又職業に於ても、父の職業はやがて子の職業となり、子の職業はやがて孫の職業となるが如く、一の職業を多くの人が皆其子々孫々相傳へて居つたのである。斯かる條件の下には、其代々現はれて來る所の人々の家に對する觀念、及び之に伴ふ感情と云ふものは厚かつたに違ひない。何となれば其身分、其職業と云ふものは、自分自らが獲得したのではなくして、某々家と云ふ家其ものが有して居るのであるからである。然るに今日に於ては身分の相續及び職業の相續と云ふことが、漸次消滅せんとしつゝある。尤も爵と云ふものは、其家に附屬したもので、子々孫々之を繼承することが出來る制度になつて居るけれども、位階、勳等、功級と云ふやうなものは子孫相傳へて行くことが出來ず、一代に限られてある、又之を職業に就て見るも、官吏の子必ずしも官吏となるに及ばず、官吏の中に於ても武官の子孫必ずしも武官たらず、文官の子必ずしも文官となるのではない、又之

を農工商に就て見ても、農家の子弟必ずしも農業に從事し、商家の子弟必ずしも商業を營むに及ばず、己れの志す所に從つて己れの職業を定むるのは自由である。又立身出世と云ふことも封建の時代に比ぶれば極めて容易となつて、若し其人の技倆にしてそれに相當するに價あるものであつたなれば、車夫馬丁の子弟と雖も、高位榮爵の地位を得ることが出來る。之に反して幾ら名門に生れた者ても、其才能凡劣であつたならば、社會の下層に沈淪して居らなければならぬやうになつて居る。つまり今日に於ては自分の身分及び自分の職業は自分自分が獲得するものであつて、家に附屬して居るものでないと云ふ制度になつて居る。又其制度に伴ふて今日の社會はそれを信じて居る、斯かる條件の下に於ては、どうしても家と云ふものに對する情は薄く、又其觀念が暗くなる傾向が生ずる、之が即ち第一の不利なる點であると思ふ。

第二、移住の自由であると云ふこと。往時封建の代にあつては、甲の藩よりして乙の藩に移ると云ふことは極めて困難のことであつて、移住と云ふことは容易に出來なかつたのである。勿論當時に於ては諸侯の國替と云ふやうなことがあつて、大小名が其封を他に移さるゝやうなことはあつたけれども、斯かる場合に於ては其大小名は皆己れの一家一門は言ふに及ばず、其臣下までも悉く引連れて新領に移つたのであるからして、從つて其交際する人々の思想觀念は左までの變化を受けない。又其當時に於て餘り移住する必要のなかつたと思ふのは、經濟狀態が未だ幼稚であり、生活が簡單であると云ふやうなことからして、其地方に土着して居つても、彼等が生活の道を求めて行くことが出來た爲めであつたのであるし、又もう一つは縱し移住の必要があつても、交通の不便なるが爲めに、自然移住を躊躇する傾があつたのである。此の如く自由に移住が出來ずして土着が多いと云ふことは、やがて又家と云ふ觀念を厚からしむる條件となるであらうと思ふ。なぜなれば第一に自分の住つて居る有形上の家が自分の拵へたものでなく、祖先以來の家である、又自

分の耕して居る田畑は自分が收得したものでなくして、祖先傳來のものであると云ふやうなことであり、或は寺などへ行つて見ると、先祖からの石牌もあれば位牌もある。又其部落の間の交際は親密である、それらの人は祖先以來の知己である、從つて若い者でも古老の話に依つて自分の家と云ふものはどう云ふものであると云ふやうなことを聞かされる機會が多い。そこて自ら其家の觀念が明晰となり、それに對するの情も厚いと云ふやうなことが出て來るのである、然るに今日にあつては其移住が大に自由となり、或は東北地方の者が西南地方へ行つて住ふこともある、特に近頃では或は臺灣に、或は樺太に或は韓國に、或は南滿洲に移住すると同時に、一方に於ては移民と云ふことが盛んになつて、多くの移民會社と云ふやうなものが出來、或は伯拉爾に、或は智利に、或は濠洲に乃至は北米合衆國に、各種の勞働者を送りつゝある。此の如くなつたのは必ず相當の理由のあることである。それは日本の人口が年々殆ど千分の十二三と云ふ割合で增加しつゝあることである。此の如き增加と云ふものは、之を世界各國の上に見ても頗る優勝である。最近の統計に依るも、國民增殖の割合が日本の上に出て居るのは、文明國では獨逸一國位だけであつて、餘は同等の國が二三國、其他は日本の以下にあるのである。人口增殖の度が此の如く激しき勢を有するが故に、土着のみして居つては到底其生活を全うして行くことが出來ないから、そこでどうしても經濟上の低氣壓へ向つて、どし／＼流れ込まねばならぬ。加之交通が非常に便利となつて、未だ歐米の先進國の如き狀態には達して居らないけれども、陸には到る處に鐵道の便あり、海には汽船があつて、東洋は勿論、世界の主要なる港へは何處へでも日本の汽船で行けると云ふやうになつた。一方には經濟上の壓迫を加へらるゝと共に、他方には此の如く交通の便が開けたからして、自然移住と云ふことが頻繁になると云ふことは明白なる事實と云はなければならぬ。一々例を擧げるまでもなく、今日の市街生活、特に東京の如き大都會に生活する者を見

るに、其大多數は各地方からの集合である。昔は向三軒兩隣と言つて、向三軒と兩隣は互に相親しくする上に、互に其家の歴史や家柄を知つて居つたのである。然るに今日ではそれらのことは日本橋京橋と云ふやうな所に於て、江戸以來の土着の人の間に、稀に之を見ることはあるけれども、其多くは向三軒兩隣は如何なる人であるか全く相知らず、俗の言て謂ふと何處の馬の骨か分らぬと云ふ有樣てある。又勞働者の側から見ても、特に鑛業に從來して居る勞働者の如きは、殆ど日本國中の集合と云つても宜い位てある。手に鶴嘴を握つて、日夕膝を突き合はして仕事に從事して居る勞働者仲間は、自分の仲間は何處で生れ、何處で成長した者て、どう云ふ身分の者かと云ふやうなことは不關焉と云ふ有樣になつて居る。此の如き實狀より考へ、封建の時代に於て移住が自由に出來なかつた時と、今日とを比べると、今日に於て家と云ふものに對する觀念が弱くなり、其感情が薄くなると云ふことは寧ろ當然である。其理由は言ふまでもないことであるが、今自分の住つて居る有形上の家から、自分の家具、家什から、又自分の職業と云ふものは、總て自分自らが獲得したと云ふ觀念があり、祖先以來傳はつて來たものではないと云ふ考からして、自然家に對する觀念が弱くなつたと云ふことは、爭ふべからざることであると思ふ。是れ其不利なる所以の第二てある。

第三、養子相續、昔封建の時代に於ては、親の身分、職業及び其財產は總て長子が之を相續し、次男以下はそれに與ることは出來ぬ。然るに第一の場合に述べた如く、當時に於ては自ら己れの運命を開拓し事業をなすことが困難であつた、それ故に次男以下の者は、出來能ふ限り他家に行き、他姓を冐して其家を相續することに依つて、己れの身分を獲得し、自分の發展を圖ることになつたのである。即ち養子となつて己れの身分を獲得し、其運命を開拓するの利益を得たのである。是と共に、一方には其家運を繼承して、其家の運命を長からしめ、發展せしめて行くと云ふ義務を脊負つたのである。それてあるからして封建の時代

に於ては啻に長子が自分の生れた家と云ふものに對して厚き感情を有つて居るばかりでなく、次男以下も養家の家を繼承して行かうと云ふ傾向が餘計にあつたのである。然るに今日の趨勢はどうかと云ふと、成程祖先以來の家督相續、及び財産相續と云ふものは、之を長子がすると云ふことは從前と變らないけれども、次男以下の人が養子に行つて他家を相續することは、だん／＼少くなつて、自分で自ら一家を起す方が餘計になつた。さうすると次男以下の人々は、自分の興した家、自分の獲得した身分、自分の撰擇した職業と云ふ者があるからして、家と云ふ觀念は殆ど絶無と云つても宜い、少くとも其觀念は非常に弱くなつたと言へるのである。又之を實際の方面から見ますると、玆に三人の子供があると、長子は其家を相續し、殘る二人の者は新に家を起すのであるから、家を承繼いで行く方よりは、新に家を興す方が餘計である。それは前項に於て述べたる如く、人口の增殖に伴ふて益々增加して行くものと見なければならぬ。換言すれば新興の家は益々日本國中に殖えて來るのである。若し新興の家が益々殖えるとすれば、家と云ふものに對する考は段々一部少數者の間に止まつて、大多數は自分で自分の運命を開拓した者であるといふことから、自然家の觀念が薄弱になると云ふことは、寧ろ當然のことであらうと思ふ。是れ家族主義に對する不利なる事情の第三點である。

第四、別居、是も封建の時代に於ては、多くは若夫婦は父母と同じ屋根の下に住ひ、同じ食卓に着き、生活を共にして居ると云ふのが普通の有樣であつた。此同居の場合に於ては、老父母が若夫婦に對して所謂家風の教育をする。で昔は隨分此嫁は家風に合はぬから離別するとか云ふやうなことは珍らしくはない現象であつた。此家風に從はせると云ふことは、其家を代々繼承する者に家と云ふ觀念を與へることの一の有力なる事情になるのである。然るに近頃に至つては若夫婦が父母の家に同居する傾向が次第に薄くなつて、特に相當の教育を受けた者は、寧ろ父母の方よりも之を

望み、又若夫婦も初めよりそれを希望して居るといふ狀態でありますから、自然老父母と若夫婦とは別居することが行はれるやうになつたのである。此の如く別居と云ふことになると前に述へたる如く家風の授受と云ふことが頗る困難になつて來る。即ち新婦は、自分の理想で自分の家庭を作り、自分が一家の主婦として自分の家庭を治めて行く上に於て、自分が最高主權者であると考へ、祖先傳來の格式であるとか、家の習慣であるとか、諸種の儀式であるとか、親戚知己故舊の間の贈答訪問であるとか云ふやうなことも、一向古の例に則らず、皆自分の一存若くは自分と夫と相談の結果に依つて處理して行くやうな傾になつて居る。又此の別居と云ふことの原因について考へて見まするのに、これは別居しなければならぬ必要があつてする者ばかりではありますまい、實際は同居して居つても差支ないものでも、別居して居るやうなものもあるが、是も前第二條に述べた理由と同じく、自分の職業を求むる爲めに、自分の運命を開拓する爲めに、どうしても別居しなければならぬと云ふやうな必要は、寧ろ昔より餘計であると思ふ。それは畢竟昔の如く身分の繼承と云ふことがなく、又父子互に其趣味、其考が違ふから、職業の繼承が出來ないと云ふやうな譯から、どうしても老人と若夫婦とは別居しなければならぬと云ふやうな必要も一面に於て現はれて居る。此の如く別居と云ふことになつて、若夫婦が自分等の考で、乃至大きく言へば自分の理想で家政を料理して行くと云ふことになると、縱し其名目は自分は其家を相續した者であると云つても、それは單に空名に過ぎないので、實際は新に家を興したと同じやうになる。換言すれば家と云ふものを思ふの念が段々薄らいで來て、自分といふものを餘計に考へるやうになる。是れ則ち所謂家族主義に對する第四の不利なる事情である。

第五、法律及び制度、是は既に法律學者特に民法學者の方に於て議論せられつゝあることであるから、茲に詳しく述ぶる必要はないが、今日各種の法典に於ては、家と云ふものを土臺にせずして、人と云ふものを

基礎として出來てあることは爭ふべからざる事實である。其法律の下に制裁せられて居る人々は、自然人と云ふ方に傾いて、家を思ふの念は益々薄くなると云ふことは、是亦喋々を要せざることであらうと思ふ。而し之は近來法律家の間にも、明かに家は將來滅びて人之に代る者であるといふことを論じて居る人が澤山あるから、余は敢て茲に蛇足を添ゆるのではない。兎に角此の如きことも家族主義に對する第五の不利なる事情である。

第六　西洋文明　西洋文明は一言に之を評せば如何にしても個人的文明であるといふてよい。是と接觸せずんば則ちやむ。苟も接觸して居る以上は多少その影響を受けずに居ることは不可能である。現に我が新日本に此の個人思想が起りそれに副ふ所の個人的制度の出來たのも全く西洋文明に接觸した結果でないか。されば今後益々接觸の必要ある我邦に於いては、如何にしても彼邦の思想精神の影響を蒙らずには居られない。是れ不利なる第六の事情である。

以上の六點に分つて所謂家族主義と云ふものに對して、日本の文明の進歩の有樣が不利益に傾きつゝあると云ふことを述べて來たのである。是は今思ひ付いたことで尚ほ詳細に述べたならば此以外に幾つもの箇條があると思はれるが、兎に角家族主義を主張する人々は、斯かる不利なる事情のあるにも拘はらず、尚ほ我が家族制度は飽くまで持續して行くことが出來ると信じて居るかどうか。若しそれが出來るものとするならば、如何にして是等の不利なる事情を排除し、若しくは調和させて行くことが出來るであらうか。又若し果して是等の不利なる事情に抵抗して行くだけの方案なく、準備がないとするならば、その家族制度の變遷は自然の大勢である以上、寧ろ成るべく早く新制度に移して行く方が宜いものではなからうか。今日或は嫁と姑との爭であるとか或は家族の不和合であるとか或は老人と若い者との間の不和であるとか、或は結婚問題、離婚問題であるとか云ふやうのことの爲めに煩悶して居る所の青年及び、是が爲めに苦情を鳴らして居

る所の老人は、天下にどれ位あるか分らぬ。是等は畢竟此家族制度が新制度に移つて行くべき運命を有しながら、一は惰力の爲めに、一は人工の爲めに支へらるるより、茲に過度の狀態が何時までも長く持續し、其過度の惱み、過度の苦みとして、斯かる不祥なることが多くあるのではなからうか。冒頭に述べましたやうに、理論上の問題として見れば此所謂家族主義、所謂個人主義と云ふもの丶差別、關係と云ふものは、余の考ふる所では極めて明瞭の問題であると思ふが實際問題として見ても所謂家族主義を何處までも助長發達せしめなければ日本の國威を增し、國力を發展せしめて行くことが出來ないと云ふこともなからうと考へる。

さし當り實際問題として、我國の家族制度と云ふものを、どう處分すれば宜いか。餘程考察すべき問題である。若し所謂家族主義を主張せらる丶人は勿論、其他江湖大方の諸君が、之に向つて明晰なる回答を與へられるならば、开は啻に余一人のみの幸てはなからうと思ふ。（完）



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と密接の關係ある淸米露等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて紹導し以て江湖の參考に供せんと欲す

淸國の新敎育

中島半次郎

淸國は今や世界の大勢に觸れて、從來の敎育にては列國と競爭し得る新國民を作り得ざるを感じ、新敎育所謂新學を興すべき方針を取り、日本及西洋に向つて留學生を派遣し、又右等の諸國より敎師を聘して新學を興さんと勉め、外觀よりすれば新學勃興の氣運は淸帝國全體に亘りて高まり居るが如くに見ゆ、然れどもその從來の舊敎育、所謂舊學に對して新學か如何なる關係を持つべきか、又その新學を取入るゝ前途に橫は

る障害を如何にして排除し行くべきかに就きては、今日猶ほ模索の狀態に在りて、未だ驟かに新學勃興の氣運が十分に熟せりとは認むる能はざるが如くに感ぜらる。

所謂新學の意義を正せば、清國にありては之を西洋に發達せる理科實用の智識の意味に取れり、所謂物的(フイシカル)科學(サイエンス)の意に取れり、心的科學(メンタルサイエンス)たる倫理學、心理學、論理學、社會學の如きを、新學の中に加ふることなきにあらざるも、主としては右の物的科學(フイジカルサイエンス)の意に取れり、此物的科學は從來清國に餘り深く研究せられざりしもの日本及び西洋は之を應用して今日の開化に達し今日の富强を來せるにより、清國亦之を取らざるべからずといふ大體の方針だけは一定し居りて、北京の學部より全國の諸學校に向つて下せる教育宗旨の中にも明かに此旨を說示せり、その五大綱は忠君、愛國、尙公、尙武、尙實のそれにして、尙實に於ては理科實用の學を起すによりて成し遂げらるべきことを强く奬勵せり。

新學の中には倫理學、心理學、論理學、社會學の如き心的科學を含むとして、此等の學特に倫理學が清國從來の舊學に對し、如何なる關係を持つべきかは玆に暫く措き、その物理科學と舊學との關係に就いては、清國人は從來の經學文章を本とし、之に加ふるに理科實用の學を以てせば、教育の本末備はり、清國從來の教育の欠點を補ひて、玆に新しき完全なるもの成立することを得、偉大なる新國民を作ることを得べしと考ふるが如し、然れども一歩深く立ち入つて此關係を考ふれば、從來の經學文章を主とする東洋的の頭の練り方と實驗證明により精密なる知識を得んと企つる西洋的の頭の練り方とは、頗るその趣を異にするところあり、換言すれば道德教育を施し國民たる志操を練る舊教育と、正確の知識を得んとする新教育とは、一は主として感情、志操を練り、善を目的とし、他は主として知識を練り、眞を目的とする點に於てその方向を異にするところあり、更に又換言すれば國民的立脚地に立つ舊教育と、世界的立脚地に立つ新教育とはその趣を異にするところあり、之を如何にして調和を見るべきかは十分考へざる可からざる問題なり、舊學と新學とは木に竹を繼げるが如くに一體と爲り得ざる狀態に在りては、一個の人物を造ること能はず、之を大きくいへば一國の新文明を作ること能はず。

此二つの調和は清國の教育者によりて今後解決せら

るべきものとして、茲に轉じて新學を取り入るゝに當り、如何なる障害あるかに就きては、今日清國の識者の中に在りて、之に注意せる人割合に尠きが如し、西洋に於ける物的科學の發達するには、希臘羅馬の昔より中世を經、近世の初に至りて次第に盛に研究せられ、次に今日の如き發達を見るに至りたるものにて、その根本原理よりして理解せんとするには、非常に精密なる思想と刻苦勉勵宇宙の眞理を摑まずば止まずといふ熱心とを有せざるべからず、而してその非常に精密なる思想の本となるものは數學なるを以て、物的科學を研究せんとするには先づその準備として、明瞭なる數の觀念を有せざる可からず、之と共に暫く實用の實利的動機を離れ、眞理其のものを追究するといふ學術的興味と學術的良心とを有せざる可からず、此準備と此熱心とに欠くるところあらんか、新學なるもの遂に理解せらるべからず、物的科學を應用して、物質的文明を高むるが如きは、物的科學研究の餘澤と見るべきものにてその根本は熱心なる眞理追求の念の汪盛なるに存す、清國の新學に志すもの、此困難に打勝つ氣力を有するか、此氣力を有して學ぶにあらざれば、單に物的科學を學ぶに止まり、その科學の根本原理よりして理解し、或は新にその根本原理を發見するが如き境涯には達すべからず、而して此境涯に達するにあらずば、所謂物的科學の應用なるものは出來得べからず、此應用出來得ずば一國の物質的文明を高むるを得ず。

清國に在りて新教育を興さんには、前途に此の如き奮勵を要せざるべからざることあるに拘らず、一方には保守思想の蟠るありて、清國の教育は舊學に十分の力を注ぐべく、新學の如きは之を學ぶものゝ自由に任せて可なり、國民の教育は自國固有の材料を以てせざるべからずと主張する一部の論者ありと聞く、此意見は舊學を棄てゝ新學に走るべからずといふ戒としては大に聽くべき價値あるも、以て新學を排斥する論據となすにあらば、清國教育前途の發達を害し、世界の大勢に背く傾向を取るものと見ざるべからず、清國にありて新學を興さんには、先づ此等の保守思想をも破らざるべからず。

此く考へ來れば清國の教育に於て新學を採る方針は一定せるも、一方には此方針に達するに就きて幾多の解釋せざるべからざる問題を有し、而して他方に之を妨けんとする保守思想を破らざる可からざる狀態に在

りて、未だ俄に新學勃興の氣運高まれりとに賛すること能はず、予は清國前途の教育の爲に清國の教育者が此等の難關を切り拔け、東洋の天地に於て日本以外に一種の新文明を作り出し、一の强大なる新興國を見しめんことを切に祈るものなり。

列國近事一班

（最近一ヶ月間の海外一切の情勢を網羅し一目の下に其眞相を明ならしむ）

如楓庵

●英國海軍大演習と現下の政局　英國海軍省にては例年の演習を更に大なる者となし北海に於て之を行はんとの計畫を立てたりしが、愈々七月一日より七月二十二日に涉りて之を斷行せんことに決し此旨勅令を以て布告せられたり。一は侵入軍にして丁抹エスベルクの海上に本陣を据え、一は之に對する防禦軍として白耳義と倫敦との間に遊弋し丁抹の海上より攻め寄する敵艦隊を茲に待受けて之を擊退せんとするの一般方略なる由なるが、之に參加すべき戰艦は現役三百五十隻人員八万五千人、所謂英國海軍の粋を悉せる者、而して侵入艦隊の司令長官には彼の有名なるベレスフォード卿を以て之に充つると云ふ正に世界の耳目を聳動すべき大演習と云ふべきなり。英政府は何故か新聞記者の陪觀を許さず、吾人は其經過全體の成績等明かに之を知る事を得ざるを以て遺憾なりとす。されど歐洲の輿論は一般に之を以て普通の演習と見做ざるものの如く、殊に獨逸の新聞紙は此報に接して晴天霹靂を聞く程の思をなせり、彼等は英國が近來頻に海軍の主力を此海に集中するより見るも、今日獨逸丁抹兩國の國境を去る僅に三哩の點に侵入軍と遊弋せしむるは其裏面に於て政治的重大なる意義ありとなさゞるべからずと云ひ、正に英獨戰爭を假想し、之に對する準備をせん爲めなるに外ならずと論じ、ベレスフォード卿は必ず陸軍をエスベルクに上陸せしめて、此處を陸海軍の根據地とすべき下調をなさん、之れ表面通常演習の如くに見せかけて、實は獨逸に對する作戰上の實地演習をなさんとするなり而して何故にエスベルクを以て侵入艦隊の根據地即ち併せて陸軍の根據地となせしやと云ふに、斯の如き根據地を有せざれば英軍はエルベ、ウェサー、ピード、エムス等の如き獨逸の堅固なる要所々々に進擊する事を得ざるが故なりと斷定を下せり、是等は獨逸に於ける輿論の概要なるが、佛蘭西においては之と反對に大に英國の海軍大演習を賞揚せり。巴理の「自由新聞」は最新最良の英國艦隊が近く北海に於て空前の大演習を試みるは、吾人の共に祝賀する處なりと云ひ、英國は大仕掛なる演習の効果以外に、世界の見て以て虛心平氣なるを得べからざる種類の或る結果を得べしと暗に這般の天機を洩せり。今や英國は地中海に事なく兵を備ふるの必要な

きより自然北海一名獨逸海とも云ふべき北海に主力を注ぐに至るは當然の結果と云ふべし。之にて新三國同盟の意義も愈々明白となりたる譯なるが、之に對する獨逸今後の行動こそ見物なりと某通信員は語りたり

●米國民主黨候補當選　ブライアン氏の外に知事ジョンソン氏あり、判事グレイ氏あり、何れも民主黨候補として大に色氣ありしが、民主黨の大勢依然としてブライアン氏を仰ぎ居るを見、大會前に候補を辭退せるを以て十一日のデンバー大會は滿場一致を以てブ氏を民主黨の候補に推擧せり。ブ氏は席上會衆に感謝の意を述べ且つ大統領は一期にて足れり予は大統領に當選するとも決して第二期の大統領たるの意なし予の候補當選は或一部の贊同を得たるが爲にあらず、米國民衆より直接に推擧の榮を辱したるものなるを以て、予の責任は甚だ大なりと述べたり。民主黨今年の形勢は例年の如くならず、一方に於て例のハースト候補を斷念せるあり、殊にインヂャンクション問題等にて勞働黨の滿足を得たるを以て勢力なかなかに侮るべからざるものあり、猶は參考の爲め彼が發表せる政見を桑港電報によりて摘記すれば、彼は先づ行政費の膨脹を詰り、下院議長の專橫を攻め、大統領の官吏任用專斷を攻擊し、選擧費用の發表を法律にて强制せん事を望み、關税はトラストの橫暴を抑ゆるに足る程度に速に改定せざるべからずと云ひ、トラスト及鐵道の支配一層嚴重なるべしと說き、インヂャンクション禁示を唱へ最後に亞細亞人排斥に論及して曰く吾人は聯邦地方官憲共に米國内にある外國人の條約に定められたる權利を十分保護せん事を望む、然れども吾人は吾國民と融和する事能はざる者、又は彼等の存在するが爲に人種的爭亂を惹起し或は東洋の商業國と外交上の紛議を釀すべき亞細亞人の入國に反對すと、之れ主として日本人を意味する旨なるが、之に見るもブ氏が如何に勞働黨の御機嫌取りに苦心せるか察するに難からずと云ふべし。

●ブラジル國不審の軍艦　ブラジル政府はドレッドノート型三隻を英國に注文し竣工の上は之を日本政府に賣却すべしとの風說天の一方より出で來りしが、米國は之を聞いて俄に又例の黃禍論を唱ひ出せり。南米ブラジルは米國と親交なる關係を持續すべき譯となり居るに、日本の便宜となるべき軍艦の仲買をなすが如きは甚しく國交を傷くるものなりとて、之れを咎め、豫定通り一千九百十二年に完成し、其年に之を日本に引渡すに至らば、戰爭好きの日本は直に米國と事を構ふるに至るべく、一千八百十二年の英米戰爭を茲に再び現出せん、唯一千八百十二年戰役と異なる處は、一方の對手者が英國自身にあらずして英國の同盟國たる日本なる點にあり云々と「紐育ヘラルド」が仰山らしく騷ぎ立てしに反して、「桑港クロニクル」は眞面目に之を論じて曰く「日本は米國と戰爭せん事を喝望すと想像するは恰も日本の政治家は迂愚なりと想像すると同じかるべし、日本が亞細亞に大野心を有する事は達見の上にあらずとも克く之を了解し得べきも、米國は列國中最も日本と其針路に於て衝突せざる位置にあり」と而して軍艦賣却の風說を否定し「ブラヴル」の海軍擴張を至當なりとし、ブラヴルは南米の新興國なり。彼が戰艦建造を計畫せるは、世界に於

けるブラジルの位置の最も重大なる者なるを自覺したるが故なり、ブラジルが過般ヘーグの平和會議に使臣を出せるも亦其國の主權が如何なる強國の主權とも同等なるべきを信じたるが故なり、此二個の事實は何れもブラジルの夢の如き虚榮心より出でたるにあらずして、全く自己が新興國たるに恥ぢざらんとする眞勇士の鐵石心より出でたるものに外ならずと論じてブラジルを賞揚せり。「紐育サン」は又商業上の立脚地より日本へ戰艦賣却云々の風說を否定し、大海軍の流行せる今日の如き時代にありては、ブラジルの大艦二隻の注文は決して不當にあらず、有り得べき事なりと云ひ、ブラジルは建國以來米國と最も親善なる關係を持續せん事を努めつゝあり、ブラジル樞要の生産品はコーヒーなるが、若し米國の顧客がブラジルの珈琲に對してボイコットをなすとせば、ブラジルの經濟は非常の恐慌を來すや明かなり、如何なる迂愚の政治家と雖も、斯かる見易き道理を見誤るが如き事はあらざるべしと結論せり。

●土耳古の紛擾と憲政實施

世界有數の專制國たる土耳古も近來内政の紊亂に憤慨する者漸々多きを致し、遂に青年革命黨なる最も有力なる一團を起すに至りたり。憲法政治熱軍隊内に入り込みて流石のサルタンモ其危險に堪えず、八萬磅を借り入れて之をサロニカに送り兵士に分配し同時に五百五十名の將校を陞進せしめたり。されど青年黨の運動は益々激烈と爲り、モナスチルにては千八百七十六年の憲政公然實施せらるゝの有樣なるを以て、土耳古帝及び首相は此際大に讓歩せざるを得ざるの立場となり、遂に議會召集の事に決し七月二十日を以て議員撰出の詔勅を下すに至れり、該詔勅に依る憲法政治の内容は總て千八百七十六年の憲法と同じく責任内閣、上下兩院設置、新聞紙及公開言論の自由、終身裁判官小學校義務教育等なりと云ふ。之に對し倫敦タイムスは土耳古皇帝が青年黨の威嚇に遭ふて、遽かに憲法政治の實施に決したるは、機宜を得たる所置なりと雖も、之れ恐くはマセドニア問題を紛糾せしむるに止まらんと論じたり、茲に千八百七十六年の憲法とあるを見て讀者中には不審に思ふ者もあるべければ、序を以て之を說明せんに、今より三十年前土耳古の暴君アブダル、アジツ其豪奢暴戾の極に達せし時青年土耳古黨なる愛國黨出でゝ、國政の改革を唱道し、元老政治家又其國運の日に非なるを見て取り、青年黨に加はりて、ミツドハツト、バシヤーを首領に推し、皇帝を廢して新帝の下に憲法政治を布告せり。茲に於てか大回教國に議會を召集する事となり。從てコーランの教文に歐洲より輸入せる新思想を注入し「汝等は互に相談せざるべからず」との一句を以て、議會政治の基礎となしたり。此時の議會程趣味多かりし者は、世界に未だ嘗て有らず、土耳古人、アーニア人、希臘人、ボスニア人、アルバニアン人亞剌非亞人等各所より撰出せられて、一堂の下に集り、遠き過去より彼等の祖先が嘗て口にせし事なき國政を討議し、皇帝大臣の行動を批難し、最も大膽にして然かも最も健全なる國論を代表したりと云ふ

●クイベック祭と英國皇太子

クイベツク三百年祭は七月二十三日を以て加奈陀に開かれしが、佛米の兩國は遂に軍艦を出して之に

參列せしめ、英國よりは皇太子ウェールス親王臨席せられたり。英佛米の軍艦は滿艦飾をなして港外にあり、加奈陀各州よりの集合せる軍隊は盛裝してクイベック市を固めて偉觀克くクイベック古戰場を祭るに足る者あり、皇太子は數千の出迎人に接して加奈陀人の忠良なる歡迎に滿足の意を表し、米佛の同情ある參列に感謝し、特に佛人血統の加奈陀人等が極めて忠良なる臣民たる事を嘉みし、且つアブラハムの戰地、嘗て兩國民が干戈を交ひたる原野を長く國民的紀念物として保存する計畫及び佛米人加奈陀人英帝國臣民の手になりたる四万五千弗の保存費とに滿足なる意を表したり。

●波斯英國に謝罪す

波斯の暴動は固より依然として改まるべきにあらず革命黨の根據地たるダブリッツには官民兵常に血を流して良民其墻に安ぜず、國王は依然として頑強なる態度を取りつゝある有樣なるが、無謀の波斯兵は遂に英國公使館を包圍するに至りたり、英國は直に之に向て抗議を申込みたりしに、波斯王及政府は深く其罪を謝したりとテイラン通信は報じ來りたり。波斯兵は何故に斯く不規律に暴行を敢てしたるかと云ふに、元來波斯兵なる者は兵士にあらず、弊衣洗足、兵士と云はんよりは寧ろ乞食と云ふに庶幾し。波斯兵の戰鬪力の如き皆無と云ふも不可なし、兵數の如き固より明白に知られず、官制の規定通とせば十万五千五百人なりと雖も、實際の數は全國にて二万五千人に過ぎず。兵士は召集せられて六ヶ月間は無給なるを以て衣食の資に窮し、出てゝ食を乞ふ者多しと云ふ。勿論兵營なる者あるにあらず、兵士は其家族と共に家にありて内職をなしつゝあり。彼等は兵士としての訓練を經ざるが故に銃を持つ事すら知らざる者あり、其年齡の如きも一定せず、未成年者あり、六十有餘の老人あり、名簿等亂雜にして數年前死亡せる兵士猶現役名簿に列せられつゝある事あり。知事は赴任する毎に、老幼の兵士を改めて、州内の壯丁を召集すべしと布告し、人民が大狼狽にて其改革案の廢止運動をなすを見て、公然身代金を取上るを常とすと云ふ。

●佛國大統領の北歐行

七月二十六日發の伯林電報に佛國大統領はストックホルムに到着し、瑞典皇帝と會見す、又露國皇帝は皇后同列にて大統領出迎の爲めレヴアルに向け出發されたりとあり。之れ英國皇帝の訪露と同樣の性質を帶びたる者にして、固より新三國同盟を確實にせんが爲めなるに相違なけれど之に依りて瑞典那威等の中立が直接に確實に是認せられたる事實も亦明白なり。新三國同盟に關する英佛の輿論は、決して獨逸を孤立せしめんが爲にあらず、獨逸より孤立せしめられざらんが爲なり、瑞威等五小國の獨立を確實にせんが爲にして、敢て獨逸の獨立を威嚇せんが爲にあらずと云ふに一致するも、英佛露主權の握手及び默約は事實上獨逸を孤立せしめたるものに外ならず、伊墺二國ありと雖も、到底彼等を以てしては英佛露と權力の平均を保ち得べきにあらず、獨逸は五十年前の所謂ビスマーキアンシステムなる鐵血宰相の外交政策、即ち周圍の列國をして各々相孤立せしめ、己れ其間に處して全歐統一の野心を仕遂げんとする外交政策を新三國同盟に依りて全然根底より破壞し去られたりと云ふべく、獨帝の苦心も遂に水泡に歸する譯なれば、彼が之に關する大小の報道に接して常に狼狽しつゝあるは無理ならぬ事なりと中歐の某老政治家は語られたり。

現代人物評論（八）

小栗風葉論

△小栗風葉君

小杉天外

小栗君は兎に角文章が旨い。寧ろ少し旨過ぎる程旨い。だものだから時には文章の爲めに筋が變つたり、又は書かなくてもよい所を書いたりするやうな弊も出るやうに思はれる。其結果として、切れ〳〵に見れば文章に味ひがあるが長いものになると全體を通じて印象が弱い。此點は二葉亭君などもさうてある。僕等は昔から風葉君の手腕を認めて居るので、ずつと以前から紅葉以上だといつて居た。文章といひ、頭のこなし方といひ、確かに紅葉以上だといつてゐた。「下士官」などの出た頃は、あれを讀んで僕等の仲間は實にエライ腕だと話して居たのである。けれどもあの人の進歩主義といへばよいのか、動搖主義といへばよいのか、始終本城を明渡して遠征を試みる――あの態度は慊らなく思ふ。流行（はやり）といふものを全然度外に附することは無論出來ないとしても、流行に重きを置き過ぎるのはいけないと思ふ。

凡そ時勢といふものは二つの要素から出來て居るものである。一方に英雄とか天才とかいふものがあり他方にそれを崇拜するか若くは之を眞似る者があり、此二つがあつて初めて時勢といふ者が出來るのである。例へば那翁の時代には那翁といふ英雄があり、其れに那翁を崇拜し尊敬して彼の一言には涙を流して手足の如く働くか又は身命を抛つといふやうなものがあつて初めて那翁の事業といふものが出來るのである。然し後代になつて見れば其等の那翁の爲めに働いた人間は只一個の那翁といふものを飾る爲めに生きてゐたもの

のやうに思はれる。文藝上の事も亦是れと同一である。凡庸の人は時勢の外を見るの明がない。例へばロマンチックの全盛時代には、眞理に二なしといふやうな簡單な理屈からロマンチックは最上の藝術である。といふやうに思ふ。今日の人が今日の自然主義を見るの態度も亦それに似てゐまいかと思ふ。自然主義が流行れば其れを最上の藝術と信じてみんな其眞似をし出す。けれど後代の人が歴史的に見たならば自然主義といふ一世の流行語は只一二の作家の地位を築き上げるに過ぎないと思ふ。例へば○○君の如きは確かに天才である。一種の偏したものだが他人の眞似の出來ない天才を持て居る。○○君はあゝいふ性格で實際あゝいふ風に世の中を見て居るのだから其作物が面白いのだ。處が其性格が丸つきり○○君と違つたものも其眞似をする。然しそれは單に○○君を飾るに過ぎない。作者は固より時代思潮を忘れてはいけない。それは充分に見てゐなければならぬ。されど時代思潮といふものも一つの出來事である。釋迦が出ても基督が出ても其れが矢張り一個の出來事である。之れを充分に觀察して釋迦や基督が如何なる時代に如何なる性格を以て如何なる境遇に生れて、あゝいふ說敎をするかといふ事を研究することは必要である。然し之れを隨喜する必要も渇仰する必要もない。作者は或點に於ては時代の潮流といふものに迷はされない工夫をしなくてはいけない。呉服屋にした處で、今年は淺黄がゝつたものが流行するとか、オリーブが流行するとかいふやふに只管流行のみを追ふといふのは日本あたりの小さな呉服屋などのすることで巴里あたりの大きな呉服屋になると自ら流行を作り出して行くといふ話である。况んや藝術家に於ては我よりして流行をなすといふ位の覺悟があつて欲しい。小栗君の如き文藝に忠實でもあり又天才でもある人に向ては殊に此點に於て猛省せられんことを希望するのである。「讀賣」に出す新作で忙しいから、こんな大體論で御免を蒙りませう。

△風葉の性格と其作物

相馬御風

○風葉論と云つた所で、纒つた議論などはとてもチョックラ出來るわけがない。たゞ二つ三つ思ひついたままを書きつけて御免を蒙りたい。無論「風葉論」など云ふ立派な題目はぬきにして讀んでもらいたい。

○何時頃だつたか確と覺えて居ないが、何でも今年のまだ綿入を着て居た時節だ。一時風葉氏が非常に沈み込んで居られた時があつた。或日私が訪ねると、例の薄暗い茶室建の書齋で、いつになくシンミリとした語調で、作家としての自分の未來は……と云ふやうな至極眞面目な問題についていろ／＼と話された事がある。その時の話の末、氏と私との間にかう云ふ問答があつた。

『僕は元來何事に對してもその事一つに凝り固まつて底の底までも究める事の出來ない人間です。何事にも趣味は持ち得るが、何事にも唯一つそれに嚙りついて居り得ない。無論刹那的には熱して我を忘れて騷ぐやうな事はあるが、永くは續かない。深くは入れない、つまり眞劍になれない、執着が少ない。それは世の中を觀ると云ふ上にも、亦現實の處世上にも同じです。例へば人と交る上について云つて見ても、僕はまだこの人は一番嫌ひてあの人は一番好きだと云ふやうな事はない。要するに何でもよい、どうでも好いと云ふ方です。かうやつて小說も隨分永く書いては居るが、どうも僕にはチャンとした方針が立たないので、たゞその時々に應じて作をして居るだけです。今迄は別に何の氣もなしにやつて來たが、此頃どう云ふものか自分の過去の生活が人生の眞の味を味はう事が出來ずに、たゞほんの人生の上つ面だけ通つて來たやうな氣がして、妙に淋しい思が起つてならぬのです。で、どうかして新らしく生活狀態を變へて見たいやうに考へて居るのですが、さう思つて居る間にもどうせ今になつてからと云ふやうな氣にもなるし、殆んどもうどうしてよいか解らなくなつてしまつた。せめて作の上にでも

何とか態度を改めて、是非かうでなければならぬと云ふ所までも突き止めるやうにして見たいといろ〱煩悶して居るのですが、どうでせう。實際この頃僕は眞面目に考へて居るんです」

『さうですかなア。私なんか又貴方のさう云ふ態度が表はれるのが貴方の作の好い所だと思つて居ましたが』

○實際風葉氏の偉い所はそこだと思ふ。深くはない、しかし平らに廣くあらゆる方面の人生を觀察し得ると云ふ點、そこに風葉氏の風葉氏たる特有の境致があるのではなからうか。「我」を立てずして、あるがまゝに人生を觀且つ描くと云ふ風葉氏の作の態度が、時代にかぶれず、傾向にかぶれず、主義に動かされずして、ただ自らさうあり得たと云ふ點に於て、風葉氏はわが文壇に比類なく純なる經歷を有して居る。この意味て、小說作家としての氏が天賦の性格を羨やましいものに思ふ。

○風葉氏の作に寫實主義若くは自然主義的色調のあるのは、決して氏の意識的方寸に出たものではなくして、その根底は氏の性格に存する。これは他の自然主義派の作者と異る所で、やがて氏の作風を研究する上に缺くべからざる根本要件である。自覺され意識されたる自然派の作風と、自らなる自然主義的作風との區別は、どうしても明らかにして置かねばならぬ。而してもし最新小說界に於ける自然主義の青年作家の作品と、風葉氏の作品との間に感味の違ふ所がありとすれば、その所因の一面はたしかにその點に求めなければならぬと思ふ。

○風葉氏の性格は、一口に云へば消極的である。進んで物を攫むと云ふよりは、寧ろ來るがまゝに物を受け入れると云ふ方である。去るものは追はず來るものは拒まぬと云ふ方である。氏はあらゆるものに對してこの態度を持する。氏が日常の生活は明らかにそれを證明して居る。氏は積極的の情熱家ではない、又積極的の思索家でもない、あるがまゝの人である。氏の心は水の如くてある。

○水面の影――この比喩は風葉氏の作品に對してこそ眞に誤りなきものである。水面がその映る何物をも選ばない如く、風葉氏は書かうと思へば何でも書ける人である。主義、傾向、そんな事はどうあらうと、風葉氏はたゞ風葉氏である。現象の去來、時代の推移、それ等と積極的に動くのは風葉氏の出來ぬ所であるが、湛然たる水の如き氏の心は、いかなる變化をも映しとる、世間往々氏を以て時代と共に態度を變へて行く才子の如く云ひ做す者がある。しかし、それは氏の性格を知らない人達の云ひ草で、氏は決してそんな小細工の出來る人ではない。たゞ氏の湛然たる心は、いかなる變化をも映し容れるのである。氏自身は相變らず無頓着である、平氣である。

○個人としての風葉氏に對する時、吾々はその公平無私なのに敬服する。がそれと同時に積極的に熱して好いなり惡いなりをハキ／＼やられぬ態度が歯がゆくてならぬ。なぜあゝ平氣なんだらう、なぜあゝ取り澄まして居られるのだらう、なぜあゝ誰の云ふ事でも矛盾も何も構はずに聞き入れて平氣で居られるだらう――などゝは常に往來する吾々の時としては癪に觸る所である。なぜもつと積極的に熱して「あれはあゝ」「これはかう」と云はれもし行はれもされぬのか、なぜあゝ整理や解決が嫌ひなのか、とは又等しく不平に思ふ所である。氏には鷹揚なホンノリと暖かい所はあるが、鋭いとか烈しいとかピリヽとするとか、燃えるやうなとか云ふ所がない。そこが物足らぬ。

○そのやうな氏の人格に對して物足らぬ感は又氏の作品に對してもある。自然、人生の一點一劃が恰も水面の影の如くに、亂れず壞れずにキチンと描かれて居る。いかなる人生の部面を描いても、氏の作は描き誤る所がない。客觀的自然が聊かの手落ちもなく亂れもなく描かれ得ると云ふ點に於ては當代風葉氏を以て第一位に推すべきである。即ち客觀の描寫と云ふ事を技巧の方面から觀るならば、風葉氏の作品は天下一品である。風葉氏の自然、人生を描く技巧は、眞に水面が映るがまゝに物を映すに近い。

○かくの如く吾々は風葉氏が自然を寫し人生を描くアートの殆んど入神の妙あるを讃嘆する。又その作品に接しては、自然、人生のいかにもよく描き出されて居るのに感嘆する。而もなほ吾々は何か知ら風葉氏の作に對して物足らぬ所があるは何故か。

○それは委しく説明するまでもなく、前に述べた風葉氏その人に對して物足らなく思ふ點――それだけで盡きて居る。又吾々が水面の影に對して抱く物足らぬ感――それだけ云へばわかるであらう。又ずつと前の方に掲げた風葉氏自身の不滿――それだけでもわかるであらう。

○自然そのものゝ姿が、それ自ら充ち足りて居るが如く、風葉氏の描く自然は又それ自らて充ち足りて居る。明徹して居る。自然に映りたる自然と、人間の攫みたる自然――風葉氏の作にあらはるゝ自然は前者である、人間對自然の關係から見れば、風葉氏の作に描かるゝ自然は消極的の自然である。映りたるまゝの自然である、感受したるまゝの自然である。廣く大きい、しかし深く鋭くない。深く鋭くないのは、主觀のレンズを通らないからである。よし主觀のレンズを經たにしても、風葉氏の主觀が既に平面なレンズである以上、矢張り同じ事である。結極感受したまゝの自然と云ふ事と同じになる。

○吾人が風葉氏の作に對して物足らぬ所は、その描く所の自然が感受されたまゝの自然であると云ふ事に歸するのではなからうか。消極的の映象であるからと云ふ事に歸するのではなからうか。而してそのかくならざるを得ざる所因はたしかに風葉氏の性格にある。湛然たる水の如きその性格にある。

○風葉氏自身が誰をも容るゝ代りに誰れを特に深く好惡しないと等しく、風葉氏の作品は誰れにも感心されるが、誰からも特に熱烈な好惡を受けない。その技巧は自然のそれの如く大きく廣いが、その代り癖もなく特長もない。

○要するに風葉氏の作は、あらゆる方面の人からも尊まれ學ばるべき師表的作品である。小説界の人にとり

ては戀人でもなく、心友でもなく、師である。現代小説家の教科書として氏の小説は最も價値がある。

○最後に一言斷つて置きたいのは、以上述べて來た事はたゞほんの一面觀に過ぎぬと云ふ事である。私の風葉觀はなほ他の方面から述べねば、とても〳〵つくせない。だから、以上はたゞ私の風葉觀の一面であると云ふ事を充分承知してもらはねばならぬ。

△風葉氏

正宗白鳥

僕は嘗て鏡花天外氏等の作を愛讀したことがあつたが、風葉氏心醉時代は一度もなかつた。先日學校時代の日記を搜し出して引破つて反古籠に投込んだが、その際所々開けて見ると「戀慕流し」を上野の圖書館で讀んだことが書いてあつた。そして盛んに罵倒してあつた。紅葉や鏡花を引合ひに出して、風葉の筆は卑しい、哀れなる事を書いて、それが哀れにもシミ〳〵と身に染むやうに書けてゐないと云ふ意味の批評があつた。今は無論風葉氏の作に價値を置いて、眞に氏自身の作と思はれる者は大抵熟讀してゐる。或る部分の筆は今日の他の作家のとても企て及ばぬことをも認めてゐる。多年小説にのみ全力を注いでゐる人ほどあつて、人物の態度や言葉付きについて、隨分細い觀察をしてゐる。結構の整頓して、書くべき事以外にいろんな文句を入れて、餘裕を設けたり、讀者を喜ばせる敍述を味く喰付けたりしてゐる。若し小説術と云ふ者があらば、氏の如き最もその術に通達してゐるのであらう。しかし僕自身には氏の作は遊戲的作物と思はれ、全體の上に感動を與へられたことなく、如何にもこの人物はかうだらうと思はれることはない。氏自身も自然主義の作家だと明言され、世間からもそう云はれてゐるが、此迄の作は、藤村獨歩花袋氏等の作とは根底が違ふやうに思はれる「ぐうたら女」の如き、描敍が上手だと云はれ、僕も敢て反對はせぬが、あの中の人物は何だか霞に包まれて、さながらの姿で目の前に迫つて

來ない。「わき道」「女髮結」の如き、讀んで味いなと思ひながら、巻を掩ふと、「何だ馬鹿々々しい」、と思ふのが、僕の簡單にして正直なる感想である。氏は非常に努力してゐる。最も熱心に舊套を脫せんとしてゐる。「青春」にてルージンを學び、その一節を丸寫しにしたり、「獨」にてイプセン的議論をしたり、世間の思潮に注意を怠らないでゐる。この點に於て氏は他の作家とは全く異り、尚將來を期待せられる人だ。從つて僕等にも早晩風葉心醉時代が來るのだらう。終りに云ふ、氏の代作事件は風葉一代記の汚點であつて、今後は必ず止めて貰ひたい。

△小栗風葉

江東生

○作物は人格だとは誰でも云ふ、風葉氏の作物は其の人格らしい處もある、人格らしく無い處もある。

○風葉氏に遭つた第一印象は何となく壓されるやうな感じにある、小づくり乍らもがつしりした骨骼、額の廣い、肉の多い顏面、どうしたつて感情よりも意志の人らしい、分別理智に富んで居るらしい、たとへ感情を自由に放瀉して居る時でも、其底には、常に澱んだ幾分の醒めた理智が宿つて居る、さうすまいと云ふ、意志の力が、刹那々々に面を出すと云ふ側の人と思はれる。

○つまり聰明な人、醉ふことの出來ぬ人、欺むかれ難い人と云ふことになる。

○其の一面には、全く時所を絶し、空間を絶した。詩の領分、想像、空想の領分に頭を沒する事の來出ぬ質の人と思ふ、何でも好い、必ず現在の事實に、脚を懸けて居らねば安心されぬ人と思はれる。氏が如何にロンマンチックの戀愛を書いても、常に肉の影が離れぬは此の消息からではあるまいか。

○氏は聰明な人だ、聰明な人だから、常に時代思潮の潮先を見て、どうかして其の流に乘じやうとする、常に新らしい人の話を聞き、新らしい思潮を知るに、一

寸も後るまいと努力して居る。常に人の話に注意して、頭の新らしい作物を知らうとして居る、夫れと共にあらゆる雑誌小說、どんな物にても目を通して居る、或は藝術に對する、努力と云ふ人もあらう、自分は寧ろ、藝術と云ふよりも「時代思潮を知り之に先立たんとする努力」が、氏半生を通ずる事業と名づけたい。

○處が、新思潮を知るとは、さう六づかしい事てはない、現に現代の學者の中には、文士以上最新思潮を知つてる人が何程もあるが、何故か相變らず頭腦が古い、之は知る事は出來るけれども解せないのだ、感知されないのだ、況んや享受するをや、結局感知せぬから、其の最新思潮に對しても永遠に客觀の地位に立つてるのである。

○然るに氏は然らずだ氏には恐ろしい天稟の感受性がある、感ずると共に之を消化して、彼を變じて我とする包容力を持つて居る、理解力を有して居る、そして立派な我かものとしてレクリエートする創造力を有して居る、此點に於ては現代殆んと氏に及ぶ作家は無い。

○之が即ち新らしい思想の「青春」が出來、「天才」が出來る所以てある。

○然るに之を一面から見ると、どうも氏の作物は新らしい乍らに、之を補綴する思想の上にむらがある、稍もすると綴ぎ剝ぎした跡の明らかな事がある、例へば白紙にインキを塗つて日に透せば、薄い個所と、厚い個所があるやうな缺點がある、之は何故か。

○他なし、氏には感受性があり、溶和力はあるが、併て之れを溶和するに、我の青と、彼の紅とを混ぜて紫とするのでは無い、全く紅と青を彼から取る、我のはあるにしても、色と呼ぶには餘りに稀薄だ、打明けて云へば、氏には一定の主義、立て場及哲學、思想と云ふものが無いからだ。

○トルストイはショーペーハウエルに出てて、別箇のトルストイがある、モーパッサンはフローベルを師として、別個のモーパッサンを拓いた、然し風葉氏には

風葉氏が無い」

○もし文藝上の系統、主義理想など云ふもので、現代の作家を分類するならば、分類に左程難義を感ぜぬ、唯だ風葉氏に至つては困難だ、ばつとした寫實派の名には掩はれるが、其の作物を精密に辿つて來ると、其の傾向の相異つて居ること夥しいものがある。之は氏がいかに新傾向に努力せるかの統計表であると共に、他面氏の立て場が、いかに動搖して止まぬかを見るに足る答案である。

○氏が理智の人、意志の人であり乍ら、割合に深い作物の無いのは、一つは技巧の禍する所もあるが、其の重なる原因は、其の根底に宿る自己の哲學がなく、理想が無く、主義の無いのに依ると思ふ。

○秋聲氏を北國的の代表者としたならば、氏は南國派の代表者である、氏の作物は如何にも明るい、ぱつとしてる、之は氏が生理的、心理的に依る處がある、デカタンになり憂欝病に陷るには、氏は餘りに樂天的である。

○氏の之れまでの作物には、「人生の證劵」と云つたやうな、人間其のものを立體的に研究したやうなものは凉炎などを除いては餘り見えぬ、寧ろ時代の流れに漂ふ人間とか、斯の如き世相とか云ふ、後景付きのものを好んで書くやうだ。

○氏の技巧は流石に旨い、旨いけれども旨いのに囚はれ居る、もう少し拙くならなければならぬ、何處にか硯友社時代の臭味が付いて居て、旨いが兎角上辷り過ぎる、新時代の文章は、荒削りでも好い、もう少し料學的に、尖つた處がなければならぬ。一つは思想にも依り、又は華やか過ぎるにも依らう、どうも胸を刺すやうな感じが無い、何んな場合にも、皮一重で肉を擽むやうな齒痒さがある、露骨暴白を以て特色とする新時代の文章としては、餘りに生ぬるい感に堪へぬ。

○氏は又た人生を見るに、事實として見るよりも、興味を以て見る。

○氏を南歐的と云ふ人もある、氏の文章には匂ひはあるが乾いた匂ひだ、もう少し濕つた匂であつて欲しい。

總體にもう少し感覺的であつて欲いと思ふ。

○氏に又た官能を使ふが、尤も多いのは觸感、視覺で、嗅感、聽感は餘り用ゐられて無いやうだ。

○氏は女性の描寫に旨いと云ふ人もある、疑問だと思ふ、どうも類型を旨く書きこなして居るやうな感じがある。之は氏の出立點が、硯友社一派の寫實派から來て、所謂世相の客觀化を土臺とした歷史から來ることと思ふ。若し此の圈內から超脫したならば、餘程立派なものが出來ると思ふ、而して其日の來るのも遠くはあるまい。

○氏は物に醉ふことの出來ぬ人である。物に欺かれ難い人である、今は自然主義に醉ふて居るも、直ちに又醒めて、新たなるもの、新たなるものと求める人である、何時までも一つ金鑛に食ひ付いて居る人ては無い、唯だ一寸鶴嘴を當てゝ一つ金鑛を見出すや、又た他の金鑛を見出す爲に走る人である。だから今日の氏は明日の氏で無い、常に覺めて覺め易いのに苦しんで、又た駈け出す、到底氏は文壇の好奇者として終る人乎、或は諸系統を混合し、融和して、一大系統の創立者となる人か、之は今では斷言し難い。

○唯だ其の强健な肉體、旺盛な意志、忠實な努力、將來に於て明治文壇の最も老い難い一大作家たるべきことは斷言するに難くない。

△風葉氏

片上天絃

拜呈過日はわざ〳〵御來車被下失禮いたし候、表書の處へ遊びに參り居り、伴れの人も有之候爲め仲々落ちついて書く事などは出來申さず、極めて手短かに思ひつき候點だけ申上候

風葉氏の近作には一と口に申せば動搖のあと著るしく見受けられ候。已に豐麗なる作風を以て一家を成せりと許されたる作家が、その思想に於いて、その樣式に於いて、將た又その文學上の覺悟に於いて、左樣に動搖を示し來たりし一事は、殊に着目すべき一點に候

ふべし。斯の動搖あるが爲めに、近來の風葉氏は殊に吾等が眼に若々しく映じ來たる。所詮目下の問題は、謂はゆる動搖の深さ、廣さ、强さなど、すべてその質と度との上に繋りて存することと存ぜられ候

右大畧乍ら、旅中の事とて材料も何もなく、これにて御免被下たく願候　不一

△小栗風葉論

白雲子

○風葉君の作物は、「かつら下地」「戀慕流し」「青春」近くは「天才」に至るまで、生來讀書嫌ひの上に、繁劇と俗務に追はれて居る身にも、相應の時間をさき、充分の興味と鑑賞とを以つて讀むだ。作の善惡は兎に角として、過去に於いては、單に鏡花秋聲二君と相並んで、故紅葉門下の三星たる意味に於いて、近くは氏の作風其他に對する一種の研究的態度よりして、他の二葉亭獨步白鳥秋聲諸氏の作物に對すると同一の態度を以つて、氏の作を讀み且つ味はつた。

○鏡花は奇才、暫く之を措き、我風葉君と秋聲君とを比較研究することは、吾輩に非常な深い興味を覺えしめた。獨步と秋聲乃至は白鳥と青果、其等の對比以上に、全體の上より將た部分の上より、其の對照(コントラスト)の度の明瞭な丈けに、二家の人物、及び作品、人生に對する態度等に關する根本の相異が窺はれる、之に就いては多少研究した處あるが今は少しく問題外に走る嫌があるからお預りとして置く。

○風葉君の作物を讀んて先づ全體の上から感ずることは、如何にも作者が其時代々々の思潮、而して少なくとも、日本の現日代に於いて思潮の先頭に立つものは青年である、其の青年の胸奧に流るゝ思潮に觸れんと努力して居ること、而して其の努力の巧みに効を奏し得た事實である。

○嘗て風葉君は「金色夜叉」の續稿に就いて、「成程思想も文體も今とは大に異つて居るが、惜に自分にははやれると信じて居る」と云ふ意味の言葉を洩らされたこと

があるやうに記臆して居る。

○また秋聲君は、「風葉君の恐いところは、よく眼先に見えること、巧に時代の思潮に乘つて行くところだ」と云はれたこともある。

○更に氏の作物を見ると、論より證據明に其の傾向を窺ふことが出來る。手近ひ例は「青春」、と「天才」とである。青春の出た時代の文壇並びに一般青年の思想を支配し風靡して居た思潮を知るものは、其の全體が、當時の社會の警語たりし青年男女の學生の戀愛を舞臺として、其を通し其によつて如何に巧に顯されて居るかを肯くてあらう。更らに「天才」に於ては、輓近自然派が一般讀書界を風靡した、其の影響を如何なる程度まで文體の上に内容の上に受けたか、否、如何に勇猛なる努力と慧敏なる適應性とを以つて其の傾向に乘ぜんとしたかを知ることが出來るてあらう。猶其の時々公にする短篇に至つては、殆んど全く硯友社流の繁瑣を擺脫し得たるかの氣味がある。

○此の意味に於いて、吾人は風葉の才人なることを拒むことは出來ない。氏の云つた通り「金色夜叉」の續稿位、蓋し氏に取つては朝餐前の仕事たるに過ぎないかも知れぬ。氏の頭腦は撓揉性に富むで居る。如何なる傾向思潮にも、或る程度まで自由に轉化同化することが出來る。或る一思想一主張に固着して移ることの出來ない、進むことの出來ないのとは全く異つて居る。少くとも今までの處氏は停滯と跼蹐とを知らない。此れ氏が此の文壇と云はず思想界と云はず、變轉の劇甚なる間に在つて、今に至るまで盛名を保ち得た所以である。思ふに氏は或る意味に於いて永に「若き人」たるを誇る作家かも知れない。

○此の點は氏が秋聲君と先づ第一に其の傾向を異にする點である。無論秋聲君と雖も變化した。併し其の變化の程度、性質に至つては殆んど同日の比ては無い。「雲のゆくえ」「小華族」、近くは「焔」の如き「凋落」の如き、秋聲君の作には昔も今も變らない或る物が其の根底に潜むで居る。自然派の勃興は、或意味に於いて秋聲君の作風に幸したもので、餘り多くの轉化を試みず

して氏は、自然派の作者たり得べき素質を始めから持つて居たのである。――獨歩君と秋聲君の作物とは、世人が未だ二氏の名をだも口にしないうちから、吾が畏友井上君によつて紹介せられ、爾來久しく吾輩の眞の愛讀書であつた。――

○上に述べた通り風葉氏の才は殆んど往くところとして可ならざるの趣がある。併し氏は餘り多くの方面に興味と同情とを有し、轉輾として相移り、人生の觀方、描寫の形式に至るまで、殆んど根本より變化するやうな點がある。從つて觀じて徹せず描いて迫らざるの憾多少無いでもない。氏の作の多くが如何にも巧みに出來技巧の妙を盡したる如き觀あるにも係らず、讀者に與ふる感興に深酷痛切を缺き、一縷の間隙を存するが如き感じのするのは、或は此の邊から來たものではあるまいか。――多少の云ひ過ぎがあるかも知れん。

○更にまた氏は、前述の通り讀書界思想界の傾向に遲れない作家ではあるが、併し一代の傾向を作り一世の思潮を導く底の作家では斷じて無い。――無論這麼大作家が矢鱈に出る筈も無いが――只其の時代の思潮を代表する、代表しやうとする作家である。自分は此丈けを持つて吾が風葉君に滿足する。風葉君の作風の長所短所は此處に宿つて居る。如何なる意味に於いて代表し代表せんとして居るかは、前に云つた通りである。之によつて少くとも過去及び現在に於ける大體の價値は大部分定まると思ふ。未來はXである。自分は此の才人の未來にまで、正札を付ける丈けの勇氣と自信とを持つて居ない。

○肉慾描寫と自然派の關係に就いては、大分誤解もあるやうだが、其は暫く問題外として、風葉君の作物には、昔から肉の力が人性の半面として描かれて居た。例の「寢白粉」「紅薔薇」などの昔から「かつら下地」、近頃の作に至つても其傾向は明に窺はれる。此の傾向はたしかに自然派の主張の一角乃至一部に觸れたもので、風葉君をして自然派の作家たらしむる上には、此上もない便宜を與へたことゝ信ずる、少くとも此の一角よりして容易に彼我消息を通ずることを得た點もあ

るに相違ない。無論天稟の才其ものによる點のあつたことは疑はれないが。

○試みに風葉君の短篇と長篇とを比較すると、云ふまでもなく其の長所は長篇に在ると云はなければならぬ。其の長篇を遣るの才に至つては、之を小杉天外君に比して、或は天外君に一日の長があるかも知れんが、併し風葉君の傑れたるものに至つては、彼此一長一短、強いて甲乙を付し難い點もある。秋聲君に比すれば、少くとも其の全體の脚色配置、技巧の點に於いて一日の長がある。――秋聲君の長所は短篇にある。之を風葉君と比較すれば、其の優劣或は長篇の其に於ける以上のものがあると自分は確信する――氏の短篇は餘りに技巧の跡が見える。――無論其の才筆を以つて巧みに覆ひ隠されんとはして居るもの丶――感興が餘りに淡々しい、深酷なるべくして而も淡々しい。此は一つは餘りに技巧に重きを置き過ぎて、――氏の苦吟遅筆は眞に血を灑ぎ骨を刻むが如きものである――天眞の流露を妨げられるのと、一つは前に云つた、人生の觀方に何處か未だ徹底しないところがあるのと、兩々相待つて然うなつたのではあるまいか。兎に角自分は短篇を以つて、吾風葉君を代表させ度くない。自分は今後風葉君の才が遺憾なく發揮し盡された長篇に接するの榮を得んことを期待して已まない。恐らく風葉君自身にした處で、左迄得意らしくも無い――少くとも吾々から觀て……短篇に精力を分つよりも、畢世の心血を一大長篇の上に灑いだ方が、實際灑ぎ栄えがあるだらうと思はれる。

○其には無論金も要るだらう、併し其處が所謂自重の爲所だ。少々の貧乏位我慢して、得意のものに得意の筆を揮つた方が、自分は固より文壇も大に益する譯である。精力の切賣は出來ることなら止したが可い。貧乏は文壇の飯を食ふ以上免れないことだ。飢腸奇作を生むと云ふこともある。少しく自重して欲しい。

○長篇は短篇に比べると巧い。流石に才人風葉君ならではと肯かれる節が多い。併し此にも、前に大體の傾向に就いて云つた缺點が、或る程度まで煩をなして居

る。とは云ふもの丶、「青春」の如き「天才」の如き、いづれも一度は新聞社の爲めに書かれたものであるから、多少結構の上に將たまた描寫の上に、技巧の跡、斧鑿の痕を存するのは何とも仕方の無いことであらう。自分は此の點に就いては、寧ろ寛宏なる同情を以て待するを至當と思ふが、兎に角前に云つた大體の缺點丈けは、此の作者の天分に望を懸くることが大なる丈け其丈け、切に氏の反省と熟慮とを煩し度い。——敢えて云ふ、自分は鋭く衝込んだ作、往く處まで往つた作、徹底した作が好きだ。澁味の無い作、垢拔のしない作、煮え切らない作に對しては、到底興味を持つことが出來ないのだ。

○次に風葉君の文體に就いて云へば、先づ豊麗濃艶の語を以つて覆ひ盡すことが出來ると思ふ。無論天成の艷筆と云ふのでは無い。而し故紅葉山人のそれと同じく、殆んど人巧の限りを盡したと云つて可いまでに彫琢してある。其の文を美しうせんが爲めには、殆んど社會のあらゆる方面より、其に必要なる語句を引き來り取り入れて、而も渾然として無縫の天衣に近からんとする趣がある。特に其の助辭の使用に至つては實に巧妙を極めたものである。一面よりすれば過濃繁褥の嫌はあらう、而し兎に角文を作るの技に於いては、其の成るべく因襲的(コンヴエンシヨナル)の語を避けて、意味の切實に徹せんことを求め、而かも眼に見て氣持よく耳に聞いて心地よき語句を選ぶ點に於いて、當代有數と云ふも必ずしも過當ではあるまいと信ずる。

○内容に就いては前に云つた通りの缺點があるし、而して文章は今云つた通り濃艶豊麗である。此の兩者相待つて、氏の作物をして動もすれば深酷を逸せしめ底の底まで徹底させることを出來難からしめる原因となつたのであるが、而し青年の讀者をして氏の作に隨喜せしむる所以のものは、一つは此點に存すると云はねばならん。殊に時代の思潮に投ずることの巧みなこと、何處までも艶麗な筆付とは、青年讀者を魅し去らずんば已まざるの特徴を持つて居るのであるが、自然派が沒技巧を唱ふると共に、其の内容と共に其の得意

の文體にまでも多少の變化が來た。「青春」と「天才」とを並べ讀むものには、直ちに這般の消息が解せられるてあらう。無論此の變化は短篇の上に、內容外形ともに著しく顯はれて來た。眞に才人往く所として佳ならざるはなしてある。

◎從つて氏の作には、秋聲君の作に見る如きしんみりとして人の胸に迫るやうな味は見られない、無論獨歩君や白鳥君に見る如き特色は到底望まれない。從つて我畏友井上君の如き、謂はゞ惡ずれのした功の者には餘り多くの感興味を與へないのである。

◎猶ほ風葉君に就いて見落す可らざるは、氏の脚本である。自分の見たのは「豫備兵」と文藝の先月號に載つたのと二つてあるが、共に拙い作ては無い、むしろ佳作と云ふべきてあらう。無論普通の作家のそれよりは傑れて居る。併しまだ氏の小說に比しては同日に語られない。が、氏の脚色及び技巧的方面に於ける氏の特技を認める自分は、此の方面に於ける氏の成功と否とは、將來に於ける努力の如何によると思ふ。曾つて自分は小杉天外君に脚本家たらんことを勸めたが、此の際風葉君にも其と同じ意味に於いて勸める。氏は此れまで相應の經驗もあるし、近來種々斯界の先輩に就いて研究も試みて居られるし、例の凝り性のことだから、小說に於けると同等、否むしろ其以上の成功が收められるかも知れん。

◎多少の云ひ過ぎもあるだらうし、また言葉の穩當でない處もあらう。風葉君に對し讀者に對して深く其の罪を謝する。

△風葉先生

岡本靈華

▲先生の「凉炎」は忘られない作である、私が始めて先生の所へ入門した當時、丁度あれが新小說に出て、拜見したが、何所が面白いのかサッパリ分らなかつた、「何うだ」ど先生から聞かれる、私は何うも分りませんと答へた。「そこで、あの一篇の趣意を委しく說明されて、始めて私は小說とは恁ういふものかと思つた。些

つとした事だが、私には深い記臆になつて居る。

▲今日の自然派の主張を、先生はあの頃から最う感得して居られたのだ。當時の作で、梢の花、涼炎、親と子などを見ても分る。鼓吹者は矢張田山花袋氏などであつた。それから、沼の女の結末の犬の條、あれはシンボルで行つたのだとは、あの作の出來た時に私は聞いた。

▲先生は非常に鋭敏な感受性を持つて居られる。だから、何時の時にも一歩も時代に後れない。左に右く硯友社派の最も初期の文藝から入つて、今日劇かに勃興した自然主義の新運動にも、丁と先頭に立つて采配を振つて居られるのは先生である。

▲試みに今日迄十幾年間に出た先生の主な作物を擧げて見ると、第一が名物男、第二蠶下地、第三政黨、第四戀慕流、第五豫備兵及び五反歩、宇宙の目的等、第六青春、第七天才、第八戀ざめと云ふ順序だ。此れ等の一作毎に技巧にも内容にも驚く程根本的の變轉が見られる。明治文壇が經驗した總ての思潮を、先生は一つも殘さず味つて來られた。

▲中には此の餘り忙しい轉調を見て、進歩ぢや無い動搖だ、單なる珍しがりだとする者があるが、若し動搖だとすれば最も眞面目な動搖なのだ。先生の鋭い感受性は何んな新傾向でも新主義でも、容易に、そして確實に自家の物とする事が出來る。

▲先生の生命は此所にある。之れあるが爲めに先生は決して老いない。何所迄も新時代の大立物である。

▲先生は自ら評して「己は天才ぢや無い、能才だ」と言つて居られる。何らだか私は知らないが。暇に此語が當つて居るとしても、少くとも明治文壇に於て、先生の大才は他の群小天才を壓して居ると云つて可い。

▲妄評恐多い。恁んな大づかみな事を言つて責を塞げて置く。

△小栗風葉氏

徳田秋江

▲小栗風葉氏に就いて所感を記せよとの御下命ですけ

れど、暑氣に中てられたか、頭が鈍くなつて話のヒントが少も湧いて來ません。

▲何しろ小栗氏は賢い人です。厭なほど賢い人です。尤も自分でよく言てゐる通り此の人は或は小説——文學——以外には何も出來ぬ人でせう。私は酒も飲まないし、また氏とはそれほど深い交際もないから詳しい事は知りませんが、嘗て一度最も吾々の本性を暴露し易い酒席を共にしたことがありましたが、先生は談話の種類といふものが極めて乏しい。即ち文學の話てなければ肉慾の話である。斯う言へば氏を攻擊すると思ふ人があるかも知れぬが、自分は酒色の話をするといふくらいで、人を攻擊しやうと思ふほど其樣な道德論者ではない。文學の話でなければ女性の話。伊藤公爵は政治と女性とで出來てゐる。風葉氏は文學と女性とで出來てゐる。寧ろ風葉氏が如何に一種の詩骨を有た人であるかを證するものである。

▲風葉氏は酒色を好み、文學を好む人である。氏が思想家でないのは今更ら言ふを要せぬことである。私は文學者として故國木田獨歩氏の如き藝術の奥に尙ほ何物をか有つてゐる人をも尊敬するが風葉氏の如き純粹な藝術の人をも尊敬する。

▲て、氏は賢い人で、文壇の流行に何時までも長く調子を合せて行く聰明を持てゐる、今まで十年間それを遣つて來た。世間には氏の此の態度を非難するものもある。が、それは少し無理だ。其の調子を合せて行く潜勢力を持つてゐるのが偉い。それは何處までも偉いと思ふが、

▲氏は隨分、藝術といふ誠實を資本とすべきものに對しても方便の噓を言ふのではないかと思ふほど賢過ぎる所もあるやうである。確か六月の『文章世界』に話した氏の半世の經歷談の終に、自分……は一作每に煩悶してゐる。創作に對する自信がない。いよ〳〵自信がなくなつて了へば斷然故鄉に隱退する……と言つてゐる。之れは面白い覺悟と思ふ。が氏は斯樣なことにまでも隨分人氣取りを言ふ人である。それほど賢い人であるから乍失禮ウツカリ信じられないが假し其の言葉

が本當てなくつても、あつても、兎に角それくらいまて當世向きの態度を示し得る才人てある。何うも體の鹽梅が惡いものてすから、これて御免蒙ります。

（八月廿日）

△小栗風葉論

守田有秋

『一』

風葉論は、生田長江氏と眞山青果氏とに依り既に盡されて居る。是に對して自分が今更蛇足を添ゆるの必要を見ない。けれども是等の評論が、純然たる自然派作家たる以前の風葉氏に關する者なりとせば、未だ自然派作家としての風葉氏は論じられて居ない筈である、是れ吾等が互に風葉氏を新に論ぜざるを得ない所以てある。同氏が『浮木丸』の卷末に其の處女作を公にして以來晩近の大作『青春』を完成する迄には幾何の著作があるか測り知らぬが兎に角蒐集し來れば實に浩瀚なる一大文集に成るに相違ない、然し自分は此の中、世評に上つた或一部よりは讀んで居らぬ、其の貧弱な、風葉氏に關する智識を以て、潜越にも文壇の此の巨人を評せんとするのは無禮かも知れない、若し無禮ならば、切に許しを願ひ度い。

自分が、風葉氏の前半生の作物を讀んだ時は、唯だ面白いと云ふ一念に驅かれて讀んだ許りてある。其の『政黨』の出た時は、大分批難が在た樣に覺える、無責任な評家は、曩に政治小説を要求して置きながら、一度其が表はるゝや、『政治小說は矢張鐵腸居士などに及ぶ者は無い』と云ふ樣な口吻を漏して、此の新進作家にケチを附けた。けれども自分は、末廣鐵腸などの二面雜報的な、演譯澤山な小說よりも此の『政黨』に表はれた盲政治家の晩年を讀んで、深く感じ、深く敎えられた。『寢白粉』を讀んだ時は流石に自分も驚いた、十七や十八の軟い自分の胸には、人生の一大警報に接したやうな一種の感があつた。然し人生の暗黑面には、斯くの如き一大事實が伏在せる事を、實例まで示されて、友人から敎えられた時には、自分は、『寢白粉』の

作家の如何に深く人生の暗黒面に、深痛なる洞察を逞ふせるかを更に驚いた。其から『十七八』や『色餓鬼』や一作毎に自分は、驚嘆の眼を仰げて讀んだのである。

『戀慕流』が、文壇の世評に上つた時、自分は、再び三度、此の作家が、人間の獸性を描寫するの大膽なるに驚いた。爾來自分は、風葉氏の小説を耽讀する一人となつた、御蔭て、近年に至つては代作まて、馬鹿馬鹿しく拜讀して感服するまでに至つた。かの愚劣な『女學生』なども、出版された當時は眞物かと思つた、『女塑像師』も代作てはないかと、今ても疑つて居る。愈々代作物が多いと云ふので、一時自分は同氏の作物を讀むのを中止した。

が、要するに『寢白粉』より『青春』に至るまで、風葉氏が、主として人生暗面の描寫を試みんとした事は、他の何れの作家にも類を見ざる處である、是れ長江氏の言はるゝ如く、風葉氏を喜ぶものと、難ずるものとに別無く、等しく認むる處であつて、氏の作品全體を通して貫流せる一の特質とも云ふ可きであらう。唯だ『麗子夫人』のみは、一種の光明小説として、稍々在來のものと趣を異にすれども、然も尚ほ此の光明小説の中にも姦通の罪惡が一篇の骨子と成つて居る。

自分は在來の作品より飛んて、『大阪毎日』に連載されつゝあつた此の『麗子夫人』を讀んだ時には、餘程風葉氏の作風に變化の來て居る樣に思つた、けれども是れは確に長江氏が指摘せし如く氏が批評家に動されて流行を追ふた結果家庭小説に筆を染めたものと思はれる、(一つは新聞社の注文もあつたろうけれど)。然し自分は其の當時毎日新聞を待ち兼ねて此の小説を愛讀した、一人てある。否な寧ろ耽讀した、一人てある。

『青春』は、全部纏つて昨春公にされたが、當時評家の口に上つた如く、此の作は確に時代青年の精神を描出したものと云ふ可きてある、作風は硯友社一派の寫實張りより、愈々自然派作家たらんとする過渡を示したもので、是を小杉天外氏の作品に比すれば、『コブシ』と同じ場合の作品てあるし、川上眉山氏の作品に比すれば『新家庭』に相當するものである。是れ等の三

個の作品は其の價値の高下こそあれ、等しく三大作家が、自然派に傾かんとする過渡の産物で、其の熱烈なる創作的努力に至つては、何れも一樣に認める事が出來る。若し後世、明治文學史を編する人があつて、明治文學が、世界の潮流に動されて、大陸的、世界的色彩を帶びて、愈々新時代の新文學に轉機する、其の過渡の作品を求めるとするならば、彼れは此の三個の作品を何うしても看過する事は出來まい。而して彼れは此の三個の中、何れか最も能く時代精神に觸れたりやと校覈するならば、彼れは、風葉氏の『青春』を推さざるを得ないであらう。斯くの如き意味に於て『青春』は後世の日本文學研究者に取りて、一個の經典に成るかも知れない。

『二』

『天才』は、『青春』に次いで表はた大作であるが、自分は、是れを在來の作品と別にして自然派の作品として認める。若し人ありて、『青春』と『天才』と、何れだけの相違があるかと問ふならば、自分は是々の相違があると言つて、具體的には言い表はし得ないが、其の相違せる點は無論量よりも質である、と明言をする。自分は、篇中に表はれた自我の强い原健太郎よりも、寧ろ間宮眞一こそ、輓近日本の代表的大人物であらうと思ふ。自然派作家としての氏は、間宮を捉へ來つて人生に何等かの暗示を與えんとしたものであらう。かの粗懶な、嫉妬深い、ウヰークな、無理想、無目的な、英斷の方乏しい、而して、目前の事に滿足し且つ煩悶する時代的人生觀が、作家を通じて、玆に間宮眞一なる、インカーネーションと成て現はれたのである。是に比して見ると、原健太郎の方は、一個の理想を有するだけに、眞一と稍々異る人生觀を有するとは云ひながら、双方共に自己を中心とし、自己を本意とせる點に於ては、能く似て居る。つまり『食ふ意い育てるなら、子よりか豚を飼ふが好い』と云ふ健太郎も、『何が當てに是れまでお前達を修業さしたとい』と云ふ父の嘉十郎も情婦の世話に成(なろ)うとする眞一も男の體(からだ)のきまらぬ中に結婚するの不安を感じて居る菊野も、皆な自己を

中心にして居ると云ふ點に於ては一つて、教育のあるものと教育なきものとの相違こそあれ、概べて、如何にせば生て居られるか如何にせば「自己」を安全にし得るかと云ふ、人類自然の、一種の本能主義に依て活躍して居るのが篇中の人物である。即ち『天才』の一篇も亦忌憚なく、裏面の、赤裸な、汚い、醜い然も眞實なる人生を暴露したものである。

『天才』に次て公にされた『おと娑』は、風葉氏が自然派作家中の錚々たる作家なる事を文壇に認めしめた作品である、又た『戀ざめ』は中年の戀を描きて最も自然派的作風を示した大作であつた相だが、不幸にして發賣禁止の危に遇つた。

四十年より四十一年に亘る、氏の最も努力ある作品は『風葉集』に蒐集されたる、『くうたら女』外八篇で、『勇者』外一二篇を除いては、何れを何れとも言い難い佳作である。『くうたら女』『草分の家』『わき道』『歪力』など、何れも作家自身の經驗を材料として書いたものと思はれるが、『生の母』と『女髮結』等は以上のものに次いての佳作である、此の外本年一月の『新思潮』に收められた、『七人目』や『一人一話』(青春)や、先月の文藝倶樂部に收められた脚本『獨』など、何れも見る可きの作物である。

「三」

『風葉集』に收められた自然派の作品と、其以前の小篇雑篇を比較して見るに、殆と隔世の感がある。けれども人生の暗面を把羅剔抉し、人心の隱微を暴露せんとするの傾向は、前述の如く、既に風葉氏の青年時代よりの作品に見る事が出來る、即ち氏の自然派的の傾向は、何れの作家よりも早く表はれて居たのである。然し唯だ、不幸にして氏が紅葉先生門下の人であつたが爲めに、久しく紅葉氏の作風を踏襲して、因循姑息の裡に在つた。是れが爲めに氏は、純然たる自然派の作品を早くより表はす事が出來なかつた、自分は思ふ紅葉氏は氏の先蹤であり、文壇の恩人であり、明治文學前期の一大文豪であるかは知らぬが、風葉氏を眞の世界的文學者たらしむる爲めには、數年間遲らしめた。

見給へ、先輩とか、先生とか云ふ人の門に居なかつた國木田獨歩氏や田山花袋氏は、自然派の作家として數年前に、其の立派な作品を公にして居るではないか。自分は思ふ、風葉氏にして、紅葉先生の門下に在らざりしならば、恐らく、更により以上の發展をして居たかも知れないと。

然し、自分は氏の若々しい、熱烈な。努力に對して心より敬意を致すのである、彼の鏡花氏が保守退嬰の地位に在るに拘らず、氏が後進の青果氏などと轡を並べて、敢えて耻づるなく、文壇を馳騁せんとする意氣には、推服せざるを得ない。此の點に於て見るも氏が如何に長く文學的生命を有する人なるかを豫想する事が出來る。彼の長江氏が、鏡花氏を以て過去と現在に滿足せりとなし、風葉氏を以て、將來を生命とし、將來に活んとせる作家なりと言へるは、確に一家の卓見と云ふ可きである。

『四』

劇作家（ドラマチスト）として。風葉氏は、言ふ迄もなく小說作家としての風葉氏よりは技倆が落ちる。けれども三十七年に出た『豫備兵』や、一二年前公にされた『金色夜叉』は成功の作であつた、先月の『文藝倶樂部』に出た『獨』はイプセン張りの作物で、篇中の主人公雄作は、『天才』健太郎と同型の人物の樣に思はれる。けれども本篇が上梓して成功するや否やは疑問だ、恐らく一種のレーゼ、ドラマであらう。同じレーゼドラマならば後進の青果氏の方が餘程巧い樣に思ふ。然し脚本『獨』の裡中に表はれたる思想は、人心の隱微を暴露し、激しいエゴーの力が、僅に人と人との關係を結び付けて居ると云ふ、新らしい、而して舊い眞理を最も能く表はして居る。

自分は、風葉氏がドラマチストとしての伎倆は、今日では未だ充分に發揮されて居ないと思ふ。唯だ自分は本篇に於て、氏が努力の痕を認め得たるを以て滿足する。然し、大なるドラマチストとしての風葉氏は、お互に是を將來に望まねばならぬ。

思ふにバーナード、ショウが、大戲曲家であると同時

に大小說家なるが如く、自分は、大小說作家としての風葉氏が、他日大ドラスマチストとして文壇の視聽を聳てしめる事を疑はぬ。

『五』

今や文壇の覇は殆ど花袋氏と風葉氏とに依り把握されて居るかの觀がある、二氏共に努力精進の人にして二氏共に氣の若い人である、『從て共に文學的生命の長い事を豫知する事が出來る。あゝ努力！　努力！　此の絕えざる努力の涸れざる限り、風葉氏の文學的生命は長えに盡きないであらう。自分は氏が何時までも若々しく青年の氣を以て、長く後進者の善き指導者たらん事を希望する、妄言多謝。

△小栗君の作物について

田山花袋

△小栗君の長所は物を客觀的に――何といふてよいか言葉は一寸見附からぬが、つまり職人は職人らしく世話女房は世話女房らしく、周圍のいろ／＼なものをよく了解もし又其れに同化して書いて行かるゝ處にあると思ふ。僕等は學校敎育などを受けた爲めか、どうも物を見るに主觀的になり易いので困るが、小栗君などは初めから作者としていろ／＼な物に接した爲めもあらうし、又一つには其性格からでもあらうし、主觀といふものを沒して物を書くことが巧みである。其の代り深さに於ては足らないやうにも思はれるが、感受力が非常に強くて物を客觀的に書くことの出來るのは其長所と思ふ。

△小栗君が「新潮」に於て作者は一定のアイデアを持て書かなければいけぬといふ議論は大反對である。僕は作者は全然アイデアを拋つべきものと思ふ。然し小栗君は前にもいふ通り客觀的描寫の勝れた人であるからアイデア說を唱へても案外客觀的になり、僕等のやうな主觀の强いものは客觀的を唱ても存外主觀的にならぬとも限らない、つまり作者は批評家と違て其の藝術觀などは自分の作風から出て來る者が多いから其の說を見るには其の人其の作物と併せ見なくてはならぬ。

△小栗君の「天才」は讀まぬから知らぬが。「靑春」と「戀ざめ」では無論「靑春」の方がよい。短篇では「女髮結」などがよいと思ふ。

△小栗君についてはいろ〳〵な場合に意見を述べた事があるから今度はこんなお話で御免を蒙る。

△風葉先生

靑果生

小栗風葉を論ずべく、余は素よりその人にあらざる如し。余の見たる先生、世間の云ふ風葉、それが可也違つて居るやうなればなり。餘りに昵近せるだけ却つて見えないのかも知れず。

余思ふに先生はあれだけの人なり。奥も底も何も無き人なり。世間には、「まア、あの人がそんな事を爲ますかね。」と隨分驚く事のある者なれども、先生にはそれが無し。四年來斯う接近して居れど、先生の爲せる事に一度だつて驚かされたる例なし。風葉にしてやらざる可らざるを遣つて居るだけの事なり。されば先生常に曰く、「僕は未だ他に尻を割られて赤面した事がない。」と。余等より見てもその然かるを信ず。

先生は無頓着の人なり。これ一つは酒のおかげなる可きが、あゝまで物に頓着せぬ人も少なかる可し。五六年前までは幾らか世間氣もあり、見得もありて、隨分才子視されたる時代ありと聞けど、幸ひに余はその頃を知らず。余が知れる後の風葉先生はあの通りな無頓着ものなり。尤も、今でも些い〳〵見得張つて見るやうな事はあれども、ホンの附け刄、長く續いた例なし。

先生も可也怠け者なり。一日書齋へ座り込んで居れど何をするともなくボンヤリ時をうつす事が多し。濫讀家なれば新刊書や雜誌類など机邊にあれば、トテモ仕事は出來ぬ。書かう〳〵と思ひながら怠けて居るのなり、好く〳〵讀み物につきれば自作のふるいものなぞ出してポツ〳〵讀耽る癖あり。

酒は強き方にはあらず、先づ好きな方なり。大抵今はいけないと云ふ時なきが如し。ビイル日本酒何んで

もよし。肴もさして注文なし。菜ビタン一品ても結構飲める人なり。

家に居れば煙草は大抵刻みなり。時々巻煙草もやれど何と定まれるものなし、口付きの軟かなものなら何んでも好し。

着物なども全く無頓着極まる。何時も薄汚れた浴衣を一枚、寝ても起きても着て居る。甚しくなるとそれを着たまゝ平氣で何所までも押出す。

この通り無頓着ゆゑ、サゾまたヅボラならんと思はるれど、必らずしも然うでもなし。根はキチンときまれる方を喜ぶらし。書齋の掃除なぞでも何時もキチンとせざれば氣に喰はず。痰吐きの掃除を怠れる大嫌ひ一所に酒を飲む時、余等が無遠慮に巻煙草の吹半しを火鉢に突込むのを先生は酷くきらつて、時々自ら火箸を取つてはその片付かたなり。

包圍されたる伊藤公（中）

黑頭巾

其一

◉公伊藤は包圍せられたり。公伊藤は、己れに甘言、諛言を呈する者のみに包圍せられたり。公伊藤は、既に十數年來、耳に優しきことと音樂の如く、口に甘きこと蜜の如き、言ばかりを樂しみつゝある也。

◉公伊藤の左右には、更に一箇の忠言を呈するの士無し。故に公は、嘗て自己の過失を聞かず、其の短處を指摘されず。

◉極端なる辭を以て、之を言へば、公は恰も、名鏡を見ざる女が、洗はず、飾らず、而して自ら以て麗無比なりと、思へる者にも似たる哉。

◉公伊藤は、博辯宏辭、舶來書を引證し、或は歐洲語を交へ、以て盛んに新智識を發揮す。故に諸元老、口舌を以てしては、到底公伊藤を凌駕するを得る者あ

る無し。

◉されば、諸元老、或は、公の爲に、竊かに首を傾くるの事ありとも、大抵の事は、公に忠言を呈せず。逆襲的に、博辯宏辭の談義を聞かさるゝことを嫌へばなり。

◉蓋し今日に在りては、公山縣は、公伊藤が、心中に憚かる唯一の人たらずんばあらず。其餘は、强項令、侯井上の頑强を以てしても、以て公伊藤に加ふるあること能はず。

◉近年、故伯黑田淸隆、侯西鄕從道二人者の存生中は、公の爲に良友にして、公の過を裨補したること少からざるのみならず、公も亦た近來の如く、唯我獨尊を極め込みはせざりし也。

◉公大山は智者也。而して公伊藤と因緣淺からず。必らずや、公の行動に對し慊らざるの感を爲すものあらん。

◉公大山の明を以てして、何事も氣に付かずといふ事ある可らず。蓋し公は、極めて圓滿寬洪の長者なるが故に、恐らくは默過しつゝあるならん。

◉恐らくは、公山縣は心に謂はん、『伊藤には、實にコマル。』、而して公大山は謂はん、『伊藤サンは、不相變、若いノー』、此の如くして、二老は、共に言はざる也。

◉二老が、容易に言はざるは、公伊藤が、自ら得たりとして、他の言を容るゝこと少ければ也。公に謙恭、虛心の態度無ければ也。

◉惜哉公伊藤は、一の畏友を有せず。公の爲に、つねに忠言を惜まざるの大人物を有せず。悲しまざる可んや。

◉如上の諸元老を除いては、誰か又た公伊藤の面前に發言權を有する者ぞ。

◉吾輩、屢、政友會の代議士が、公伊藤に謁するを見るに、恰も士族が、舊藩主に拜謁する位の態度を爲す。誰か、公の顏を犯して、意見を立つることを望み得可んや。

◉而して高等官一等、乃至、親近の伴食大臣位に至り

ては、其の敬屈の態度、更に之より以上にありといふを妨げず。彼等は。公の面前に、七重の膝を八重に折りて、一拜する毎に、首、地に低る。

●子伊東巳代治は、公伊藤の唯一の智嚢たりき。伊東を失へる公は、河虎(カッパ)の頭上の皿に水の乾けるが如く、其の活動頓に、精采を減却せり。

●公伊藤が伊東を失へるは、恰も蟹が、右腕を失へるが如く、舊に依て、横行はすれども、又た敵手に怖れられず。

●子伊東は、内閣組織の器にあらず、固より方面の將たるに過ぎざれども、其の智、其の手腕、現代政事家に匹似すべき者を見ず。伊東巳後、公は未だ參謀長の適材を得ず。恐らくは、遂に得ずして終るならん。

●男後藤蠻鐵以て、智嚢とするには足らずと雖も、才發餘りあり、以て公が幕僚の一たるべき也。況んや彼は、公が之れを醫界に拔きて、臺灣に推選したる關係あるをや。然るに、今や彼も亦た、公を去つて桂に謳歌しつゝあり。

●公伊藤は、一の畏友無く、一の幕僚無く、而して却て、諛言者、敬屈者、崇拜者、射利者等ばかりに由つて、包圍されつゝあり。

●吾輩は、切に公が壯時の元氣を皷して、此の包圍軍を擊退せんことを祈待せずんばあらざる也。

其二

●公伊藤は極めて缺陷の多き人也。其の人格には多くの弱處あり。其の缺陷を狙ひ、其の弱處を刺す者、交々起つて、公伊藤を包圍しつゝあり。

●公が、然かく數多の缺陷と弱處とを有するは、專ら公か、虛榮心の豐富なると、克己力の薄弱なるとの二點に歸着せずんばあらず。

●公伊藤が、餘りに虛榮心に富めるが故に、之に對して、公大山は、大人物なるかの如く見え、公伊藤克己力の甚だ弱きが爲に、公山縣の人格は一段の光彩を加ふ。

●畢竟、公伊藤は身を以て、公山縣公大山の引立役たるかの如き觀を爲す。而して是、豈公の本意ならんや。

◉昔しビスマルクは、露國のゴルチャコフを評して、彼や虚榮心の爲めに、露國を犧牲に供するもの也といへり。蓋し適評也。

◉虚榮心の強き者は、其の行事、往々、其の本心に反することあり。公伊藤が最近十年來の態度の如き、時ありて、虚榮心の爲に、萬事を犧牲に供するの感無き能はず。識者、公に慊らざるの志を抱くもの、職として之に由らずんばあらず。

◉公は少壯時よりして、頗る虚榮心に富めることは事實也。善く言はゞ功名心也。然れども、公のは、功名心といふよりも虚榮心たり。

◉公の壯時は、才華爛熳、而して其の行動頗るハイカラッたる趣ありしを疑はず。故大久保公は身、內閣の首班に列するに、途中、故毛利元德公に出會せしとき、馬より飛下りて敬禮せり。然るに、公伊藤は、馬上ながら、敬意を表して去れり。

◉其の中年ごろは、其の虚榮心も益々發達せしかども、有爲の氣力旺盛にして、一代の俊秀眼中に無きの概ありしが、近年、ひとり虚榮心の盛んなるのみなるを見れば、公は老ゐたる也。

◉統監としての公が、成蹟は、頗ぶる振はざるは、公に同情厚き者と雖も、辯護の辭に窮せざるを得ざる處也。蓋し公の虚榮心は、萬事を犧牲にせる也。

◉近時巧みに、公を掌中に弄殺するかの趣あるもの、民間に杉山茂丸あり。彼、一代の偉物にあらずと雖も、又た一箇の妖物たるを失はず。

◉彼は、男後藤に由りて、遂に公に取入り、巧みに公の缺陷を狙ひ得て、全く公を擒にし得たり。

◉公の聰明なる、容易に杉山に魅せらるゝ者に非ず。而して全く擒殺せられて、切斷すべからざる惡因緣を結び成せるは、虚榮心の缺陷、其の禍根を爲せる也。

◉杉山は元老諸公に出入して、到處、其の歡心を得ると雖も、公伊藤の如きは、全然捕獲されたる也。

◉吾輩、嘗て公伊藤に謁するのとき、公は、文中子の語を引きて、阿諛讒間を引受けざるに至つて、始めて大宰相たるを得可しといへることあり。其の意、蓋し

自ら任ずるところあるに似たりき。

●之を以て見れば、公伊藤は深く自ら大宰相の器度を以て自ら期して、其の覺悟も亦た見る可きもの無くんばあらさる也。然るに、阿諛者佞辯者の爭ひ進むは、其の虚榮心の缺陷に乘ずる也。是一事、公の爲めに痛惜せずんばあらざる也。

●公の虚榮心頗る强きものあるが爲に、難關を排して突進すること能はず。未だ嘗て、大に勇猛心を揮つて、自己の内閣を固持すること能はず。失敗を恐るゝが故に、失敗は、其の名譽を抹殺するあらんことを恐るゝが故に、主義を堅持して、快心の行動に出る能はず。

●恰も成年者が、或は投げ出さるゝあらんことを恐れて、少年者と角力するを憚かるが如きものは、公伊藤が、第二流政事家に對するの態度也。

●而して公は、自ら日本第一の大政事家と見せんが爲めに、世界的大政事家と見せんが爲めに、すべてのものを犧牲に供す。

●公の中年時、京童は、早く既に、公が、ビスマルクを以て自ら任ずることを傳へき。蓋し公が、憲法取調の爲め、獨逸に出張し、頻りに獨逸流にかぶれたる時の事なるべし。

●公は、縱令ビスマルクを以て自ら任ずとも、其は一場の夢のみ。公は、些のビスマルクに似たる點を見ず。却てゴルチヤコフに酷似するもの無くんばあらず。

●而して公は、公をビスマルクに似りなど〻、阿諛する、敬屈者、崇拜者の爲に包圍されつ〻ある也。

其　三

●公伊藤韓國元老招待會を統監官邸に開く。來客中の最年長者は、李容源にして七十六歳、之に順ぐ者は金允植、徐正淳にして共に七十四歳。其餘、六十五歳までの諸元老及び前大臣等十六名と、番外飛入りに、趙重應(法部大臣)最年少にして四十九歳。

●午後三時より階下の大食堂を開き、日韓の美妓、其間に周旋して、嬌舌滑かに、一坐の觀興湧くが如く、午後九時に至るまで、恰も六時間の長さに亘りて、或

は詩を賦し、或は文を論じ、頗る盛會を極む。公の得意、蓋し想見す可き也。

●此日、五月雨の蕭々として、倭城臺邊、松翠殊に洗ふが如し。酒酣にして、公伊藤詩を賦して、韓國諸元老に似す。

舊邦政事有維新。聖德不孤便有隣。濟々儒林幾多士、衰衣補闕豈無人。

春畝老人。

●韓國諸元老、奉讀一過、謹んで其の韻に次するの頗る多し。今其の二三を錄す。

謹次

春畝太師殿下韻

雨餘百草一時新。耒耜紛々出四隣。醉臥山樓歌聖德、西疇自有勸耕人。

右、金允植、

治化烝々願日新。秦箕舊國接芳隣。當今最切知時勢、俊傑何須屬別人。

成岐運。

黃梅雨若景猶新。綠樹淸遊修好隣。天工適意如相得。更過東洋濟揖人、

李載克

吾東治化頌維新。地隔滄溟若比隣。話到開心無畛域。兩邦今是一家人。

徐正淳

客子入門雨色新。歡聲初動萬家隣。三農慰滿雖難望。但願甦回殿屎人。

申箕善

●流石に公の詩、之を半島の諸元老に比するに自ら出色を覺ゆ。太師の詩として誇稱するとを得べし。

●而して彼の諸元老、詩の甚だ巧ならざるにも關せず、爭ふて頌贊の辭を呈して倦まず。自ら公伊藤をして、得意を增さしむるのみ也。

●昔年、嘗て一漢學者あり。公の筵に侍して一詩を奉ず。曰く、

憲章任手突磋成。大筆淋漓天下驚。硯底猶剩餘滴在。詞壇遊戲掣鯨鯢。

驚き入つたる愚詩といふの外ある可らず。

●吾輩は、公伊藤が、此の漢學者を叱責することを敢て爲さゞりし雅量に驚かざるを得ず。憲章とは憲法なる可し。憲章任レ手突嗟成。豈、言語同斷の申分にあらずや

●何んぞ况んや、硯底の餘滴を揮つて、公伊藤が詞壇に鯨鯢を擧することある可んや。かゝる突飛なる諛言を呈する者、公の前に滿つ。不知不識の間、公の自尊心を培養す。

●公伊藤は、諸元老中に在て、尤も能く外國語に通じ、外國的智識を多く有する者也。然れども、若し公が學術の造詣を秤量せば、漢學を以て、公の長處と推さゞる可らず。而して公の趣味も、亦た漢學的に、發達せることは事實也。

●世上、短見者、動もすれば、公を以て歐洲式なりと思へる者あれど、其は深く公を知らざるの謬也。漫に、公の政事演説等より歸納し來れる誤也。

●成程、公の政事思想は、所謂東洋流を脱して、頗る進歩せる、所謂歐洲式なる、世界的なるものありといへども、公の趣味は、何處までも漢學的ならずんばあらず。

●日清戰役前、嘗て公の內閣が、議會と衝突せるとき、恰も歲晩に際し、公が感慨の詩あり。其の中に、『不レ用二漢高三尺劍一。惟聞蘇張策縱横』といへるもの、蓋し公の趣味を表現せるもの也。

●世上、青年劍舞者が、傳唱せる、『豪氣堂々橫二太空一。日東誰使二帝威隆一』の詩の如きは、果して公の手に出るや否を知らず。

●若し、公の自作なりとするも、そは頗る公が青年客氣の詩也。必ずしも之を以て公を律す可らず。

●此詩は、彼の大西鄕の作と稱する、『孤軍奮闘破レ圍還、一百里程壘壁間、吾劍已折吾馬斃、秋風埋骨故鄕山』と同じく、相對して、明治の二僞作となすべきものならん。

●假令、僞作ならしむるとも、案外に能く公の面影を寫し出せるものたるを疑はず。此詩は僞作としても成

功せるもの也。

●公は老年以後に至りても、尙ほ這般の趣味を失はず。公は實に一面より見れば、老漢學生たるを失はざる者也。

●公の政治思想は、勿論、古の東洋政事家と同じからず。然れども、公の態度公の氣取り振りは、依然として東洋式の政治家也。

●先年の事也。公伊藤と、公山縣と、同時に大磯に在りし時、滄浪閣の庭前の、寒梅の蕾を破るあり。公即ち一枝を折り、七絕一首を即吟し、短册に認め、梅花に付して、公山縣に贈る。

●其の詩の結句に、『雙手忽開天下春』の句あり。其の意、蓋し公自ら以て任ずるに在り、其の趣味の、眞に漢詩的なるのみならず、推敲の未だ熟するを待つに及ばずして、逸早く特使をして、公山縣に送致する如き、其の態度を見るに餘あり。

●公の虛榮心に加味するに、漢詩的趣味を以てす。これ公の態度に、風流的分子を帶びしむる要因たるべしと雖も、同時に、公の行動が、大政事家として、沈著と確實とを缺き、虛榮心の爲めに、萬事を犧牲に供するの評を受るに至る所以ならずんばあらず。

●虛榮心は、公の天賦たるべしと雖も、又た漢學の趣味が與つて之を皷吹したること少からざるを疑はず。

●或人は言はん、公が漢學に於ける因緣如此深きものありやと。蓋し此疑や、有理也。

●然れども公が青年時より漢學に盡したる勉强は非常也。隨つて其修業の短かりし割合に、上達せしは事實也。而して今に至つても、つねに孜々として唐本を手にせり。

●公、青年時、利助といふ。既にして理輔と改む。一轉して俊介となる。當時、自ら舜輔の字を用ゐしことあり。公の趣味は、昔しも今も變はること無し。博文の名、崇重典麗の字、蓋し公、苦心の餘に出るものならん。

●兎も角も、吾輩は、公が漢學的、漢詩的の趣味が、頗る公を誤らしむるものなることを疑はず。

●此の趣味深きが故に、公は淸韓政事家一人も眼中に無きにも係らず、文字の交際上より、不知、不識、釣込まんとして、却て釣込まるゝことある也。

●公は、文字の交を以て、淸韓政事家に對する交際の一方也と辯解すれども、實は、往々、敵に逆用さるゝことあり。而して公、未だ自覺せず。

●此の一事、公が淸韓政事家に對する長處にして實は短處也。

●公は此の一癖あるが故に、韓半島に在ても、畢竟、日本に在ると同じく、幇間的老學者、老詩人に依て包圍せられつゝあり。

●公は本來極めて單純の人也。故に、朴泳孝の如き、公の短處を洞見せる者、韓に歸りて公に泣き付くときは、一旦、公は之を叱ると雖も遂に其の情願を聽き入れざる能はざる也。

●此の如くして、朴泳孝を始め、愈吉濬、趙義淵の徒、皆な韓國に歸るを得たり。而して、其の歸國の際、公は一々、嚴に之に訓誡すと雖、實際には、公は、之を手嚴しく取締ること能はず。

●亡命客が、歸國して、公を德とせざる可らざるは、人情也。而して公が餘りに得意になり過ぐるの觀あるは公の病也。

●公は、此病あるが故に、柔便にして巧妙なる半島政治家に依つて包圍されつゝある也。

其四

●公伊藤は、つねに、幇間若くは幇間者流に由つて包圍されつゝあり。

●宮中、府中、嚴に相分つべき事は、公の到處、淸韓帝國に敎へつゝある處也。而して公の身に徵すれば殆んど此種の區別ある無く、幇間者流の裏門より進むは、人の知る處也。

●公は、頗る幇間者を喜ぶの風あり。此點より見れば公は純然、殿樣に化したる也。

●公が、幇間を好み、藝妓を喜ぶは、公が克己節制力の弱き、缺陷を暴露せるものたらずんばあらず。

●公此缺陷あるが故に長田秋濤一輩と惡因緣を結ぶこ

とあることは免れず。

●公が帝國座の發起に關係するは、公が虚榮心の副產物なるべしと雖も、亦た川上音二郎の懇請に因ること、頗る多き也。

●音二郎といふよりも、其の婦、貞奴は、更に能く公の氣質趣味の長短處を呑み込めるもの丶如し。

●公が川上夫婦を從へて、箱根の環翠樓あたりに、優遊するや、音二郎は取次を乞ふて、然後ち拜謁するも、貞奴は、自由に公の坐敷に出入す。

●公の書を請はんとするは、此の如き時に若く無し。試みに、貞奴に、賴んで、公の揮毫を得んとせよ、必らず成功すべし

●而して貞奴なる者、亦た虚榮心の凝塊物也。故に自箇か、公伊藤に、如何ばかり信用あるかを見せんが爲に、隨分、骨折つて幾枚にても、安請合すべし。而して、それが又た妙に出來上る也。

●統監府に、某警察官あり。其の閲歷、より見れば、統監府にあること如何にも不思議なれば、人あり、其由を問ひしに、川上音二郎の周旋に由ると答ふ。

●下關の幇間某の女、公の寵を得て、渡韓す。父亦隨つて渡韓し、公の保護を得て、旅館を開業し、得々として、左團扇の境涯にあり。

●此の如き一小人、勿論、士君子の口に上る可らず。唯だ彼や、統監の御袖に隱れて、物資を本國より輸入し、以て利を營むこと、惡む可きにあらずや。

●此の如きは、公が直接の罪過にあらずと雖も、結局、公の責任に歸着せざる可らず。

●蓋し公が、幇間藝妓の徒を愛玩するに過ぎて、知らず／＼の間に、遂に公私の分別を混交するに至れるにあらずや。

●現代の政事家、其の大に時めく者、則ち築地の待合に、非常に多くの時間を費さゞるもの無し。然れども七十前後の老翁にして、第二流者同樣、時ならず待合に出入して、幇間、主婦、藝妓に取卷かれて、自ら喜ぶ者、公伊藤の外にある可らず。

●公と雖も、十年前に比すれば、其の燕遊度無きの態

度は頗る減却せるや論莫き也。

●然りと雖も、統監として、韓國に往來するの途次、つねに、待合の主婦、藝妓、幇間を多數引率して、大阪に、宮島に、下關に、悠々、日を渉りて、練りあるくこと、大政事家として、寧ろ滑稽といふよりも、不都合の態度也。

●世の人の、色事を爲すや、四十歳五十歳の分別盛りの者は、概ね內々に之を爲して、其の醜態を世間に暴露せず。

●然るに、老翁の色事に至つては、自他共に之を寬假するの風あるを以て、公々然として、之を演じて怪まず。恬として、更に他人に遠慮すること無し。

●公伊藤の態度は、まさに此の如き歟。觀じ來れば、却つて是れ、色氣も艶も醒め果てたる話なる也。

●然りと雖も、公伊藤が、老後に到るまて、多年、花柳界に健闘したるは、男後藤新平などの、待合政略の御祖師たるを失はざる者也。

●公は、既に幇間に中毒し、幇間、藝妓、主婦に非ずんば寢食を安んぜず。公の動く處、止まる處、幇間の包圍軍、つねに隨ふ。

●吾輩は、公伊藤が、帝國を代表するの大政事家としての態度に、頗る慊らざるの感を抱く者也。

●一代の大政事家にして、つねに幇間藝妓の包圍軍に取捲かるゝこと、公伊藤の如き者、世界、何れの國にか有之りや。

●ビスマルク此事ありや。サリスベリイ此事ありや。ウヰッテにありや。バンナーマンにありや。將たローズヴェルトにありや。尙ほ又た李鴻章にさへも此事ありや。

●吾輩は、公伊藤の晩節の爲に、痛惜せずんばあらざる也。

其五。

●韓國に於ける統監の威信又大に揚らざるものは、事實也。吾輩、公の爲に辯護せんと欲すれども、其の材料無きを悲む。

●暫らく一例を擧ぐ。韓國駐劄軍の兵士の演習に、多

少、韓人の畑を踏み荒らすことありとせよ。

●彼等士人は、陸軍に到つて賠償を求めて、其の意に滿たず。此時、歐米の宣教師ありて統監府に忠告するや、忽ち統監の命令は、駐箚軍に下りて、士人に滿足を得せしむべき也。

●此の如きは、事實にあらず。暫らく、統監の政事を假想して之を言ふに、恐らくは此の如くなるべし。

●此に於て、韓半島の士人謂へらく、統監の赫々の威も、一宣教師に如かずと。

●此の如くにして推しゆかば、彼等が、統監を輕んじ、歐米人を重んずるの觀念は、遂に脫却さるゝの期ある可らず。

●公は、內に擴がりて外に萎むは其の癖也。而して韓國に在りても、亦た此氣風を發揮しつゝある也。

●蓋し公や氣力衰へたり。精力も亦頗る饑ゆるの觀無くんばあらず。

●公の頭腦は、精明博大眞に不世出の才と謂ふ可し。而して、過度の酒色は、近年頗る其の能力を害し、併せて精力を害せり。

●而して公は、悲哉、公に鴆毒を勸めて已まざる幇間者、崇拜者、敬服者流に依て、つねに包圍されつゝ日々に、短氣になり、尊大になり、以て益其の聰明を減じつゝあり。

●公は絕代の讀書癖ある者といふ可かりしに、最近、十年間、讀書力は頗る減じ而して年々益減却しつゝあり。

●公の議論が、漸く新見に缺乏し、識者を敬服せしむるに足らざるものあるは、此が爲也。

●此の如きは、一に、公が年來極端の不節制、無檢束、過度の酒食に起因すといふを妨げず。

●公の先師、吉田松陰先生は曰く、醇酒、腸を腐らし美人、精を耗するの人、何の氣魄光焰あらんと。

●今や、松陰先生、歿後、恰も五十年の忌辰に値

知らず、公伊藤は、何の辭を以て、先師の靈に對せんとするや、

（次回完結）

メレヂコウスキイの イブセン論

安成貞雄

本書は今春、少プリニイ、モンテイヌ、カルデロン論と共に、英譯されたものである。原文出版の年代は不明であるが、其死亡に言及してゐないに徴し、議論の要に見て、かの三部小說以前と推定して大過がないらしい。アセネアムの批評に從へば、カルデロン論が尤も卓れてゐると云ふ。フォルスカップ八折七十二頁の小冊子であるが、メ氏の卓見を見るに足ると思ふ。總論、評傳、幽靈(ゴースト)論、ヘッダ・カブラー論の四章に分れてゐる、其順序に從つて、左に大要を紹介する。章の分け方はすべて原書に從つた。

イブセン　イブセンの名聲は國境を越て歐洲的と成つた。彼は其祖先のノルアンの如く徐々に、歩一歩歐洲を征服した。彼に關する論議は早晩文學上の闘爭と成り、公平なる觀察者は或は彼の敵と成り、或は讃歎者と成るに相違ない。然し、忘るべからざる一事は、彼を愛すると憎むとに拘らず、彼の命は吾等と吾等の判斷よりも長いとである。彼の名聲は日を以て加つて來る。吾等をして、謹愼に、彼の何人であるか、彼が大膽にも無慈悲なる判斷を下した世紀の子である吾等に彼が與へた印象の如何なる者なるかを覺らしめよ。

（一）

彼は一八二八年三月二十日ノルウエー國スキエンの寒村に生れた。八歳ならざるに父が家產を蕩盡して、一家極貧の生を送つた。彼の詩に、「人生の華美なる饗宴に於いて斥けられた客」として自身を描いて居る。十五繪畫に志して成らず、十六にして夙く奮闘の生涯に入り、グリムステド町の一藥店に入つた。偏狹な田舍町の人々は、此の「尤も大膽なる自由の夢に耽る」青年を疾視した。彼等は養鷄者が鷹を憎むが如くに彼を憎んだ。幸ひ、町は海を扣へてゐた。彼は其海岸を彷徨して際涯なき水平線を望み、北海の波に耳を傾けて自ら慰めた。バイロン、ゲーテ、シエークスピーアを

讀み、近世の「偉大、陰鬱なる詩歌」に無意識ながら心を寄せたのも此の時である。處女作カテリヌを出して失敗し、一八五〇年大學に入る目的てクリスチナに上つた。短い一劇曲が上場されたので、彼は文學に獻身せんと決心し、大學に入るとを斷念した。こゝでも極貧の生活を送つたが、ベルゲンの一劇場に雇はれ、「劇場事務の實際的智識を得んが爲めに」三月間國外に遊んだ。其後十年間は彼の全發展中のロマンチックな時代て、「ヘリゴランドの海豪」は昔頂點に達したものである。其間彼は國民主義の運動に從事した。すてに國民傳說の主題を盡して、彼は近世生活の劇、戀の喜劇」を作つた。イブセンは此劇に依つて、一般に受け入られたる、ポジテギズムの最中に在つて、プラトーダンテの理想主義の再生を試みた。此の劇は、當時社會の劇しき反抗排斥を買つた。一八六二年ベルゲンの劇場が破產してのち、彼は國王より年金を得て「足から塵を拂つて」一八六四年四月伊太利に遊んだ。そこて彼は愛國心の憎惡に滿ちた劇詩「ブランド、民主主義と衆愚の憎惡に滿ちた「靑年結死」を草した。二作は特に當時の社會の反感を買つた。一八七四年の夏彼は故國に歸つた。靑年結死の上場に當つて舞臺へ挨拶に出たが、靑年は彼の爲めに旗を揚げ列を作つて其の熱心を現はした。然し、詩の心の反抗の惡魔が久しからずして醒めたので、啻に故國のみならず、歐洲全體を敵とするに至つた。「人形の家は」全歐洲から不道德と云ふ呪咀を受けた。「幽靈」が出るに及んでは、親友も亦彼に反いた。野鴨は更に大なる「憤怒の暴風」を呼んだ。一八八五年再び故國に歸つた時、彼は故友も亦敵なるを知つた。ノルウェーは二百萬の犬と猫て滿ちて居る」と云つたのは此時てある。此以後詩人の見地は陰鬱に陰鬱を加へた。彼は喧嘩好みのプルシアの戰捷を見て人心の解放の夢を遠ざかるを知つた。彼の力は之れが爲めに却つて加はり、其奮鬪をして狂氣の如くならしめた。而して終に極端なる個人主義と變じ、「尤も强きものは孤立する者なり」と叫むだ。彼はすてに「無意識なる世界的解放の近づくを信ぜず、同

代の人間が其れを能くするを信ぜざるに至つて、グッムステドに於ける如く、衆と離れて海岸を彷徨した。人間に對する反感憎惡は劇中尤も詩的なる「海の夫人」に現はれた。彼は自身に忠實であつた。孤獨にして變化なきノルウエーの海の美は彼にとつて、一生涯、彼が人間の間に空しく探し求めた無限の自由の表象であつた。彼の傳記を編んだ人は、獨逸、伊太利に於て「幸福」なる生涯を送つたと云ふ。此の一語は幽靈の作者の如き人物にはやゝ妙である。彼は人間が幸福と云ふ所の外界の事情をば悉く具備してゐた。然し「幸福」と云ふ眞意義を洞觀せんが爲めには「ヘッダカブラー」と特に「大建築師」とを讀まなければならぬ。彼は他の強者とひとしく、内心の動搖に反比例となす所の悠々たる態度を有してゐた。かゝる人間にとつては疲勞中庸と云ふ感情は緣遠(アンフワルリアー)いものである。吾等は年を逐ふて彼の周圍の憎惡と彼の反撥性とが相俟つて激增するを見た、彼の鄕里スキエンより始まつて、終には全歐洲が彼を容るゝには餘りに狹く成つた。

(二)

「幽靈」はイブセンの作中尤も陰鬱にして、尤も力あ(パワフル)るものゝ一であつて、「人形の家」の大詰、自由の爲めに子を捨てるとを非難したものに對する應答である。方正なる上流階級の代表者としては、尊敬すべく、主義を有する、小供らしきまでに無邪氣なる牧師マレデルスがある。彼は待從て大尉であつたアルギングの夫人ヘレンが自由と、道德上の純潔とを保つが爲めに家を捨てたのを、訓誡して夫の家に歸らしめ、其の間に出來た一人息子のオスワルドを鞠育せしめ、夫の歿役の半生を慈善事業に獻げしめた。而も、彼は、故待從が、其家婢と通じたとがヘレンをして其夫と家とを捨てしめたとを知らない。ヘンレがそれを打ち明けても、それを信じない、否世の中にそう云ふとがあるとを知らないのである。此白頭の小兒は「―がそれは――私にはわからない。有るべからざるとだ」と叫ぶのみである。而して近く伊太利から歸つたオスワルドは、既に陰鬱な氣候に倦み、伊太利の日光にあこがれ、鬱々として

日を送つて居るが、酒を被り、自制力を失ふ等、其父の遺傳を現はし始める。遂に、故待從と家婢との私生子レギナと戀に陷るに及んで、ヘレンは全く失望した、オスワルドは遂に精神全く錯亂して「私は貴女に產んで呉れと賴みはしない。貴女が呉れた命と云ふのはこんなものだ。欲しくは無い。取つて下さい」と云ふに至つた。そして、病が募つて來たらば、殺して呉れと云ふ、ヘレンは其言に從ふの外無かつた。長き夜が明けて、氷山の間から太陽が上る頃、オスワルドは「御母さん、太陽を下さい」と云ふ。ヘレンは目的なく、醜惡なる苦惱から、自分が生命を與へた子を免れさせんとする誘惑に驅られ、おののきながら、毒藥を手にしてオスワルドの前に立つた。オスワルドは、「太陽、太陽」と呻き續ける。是れ實に家庭の神聖を盾としてノラが其子を捨てたとを非難するものに對する最上の應答である。ヘレンはノラに反して、讓歩して其家庭に歸つた。オスワルドは、現代社會の中心をなして居る虛僞、墮落の子である。慈善的にして卑屈な人生觀の子である。彼は亡ぶべき運命を有する此の世界の第一犧牲の一人として死んだのである。

此作に現はれたるイブセンは、神秘家にして同時に自然主義者である。彼は人生の反抗力――天才の力――が如何にして罪惡と、痴愚との爲めに引き下され、遺傳の方則が如何にしてメンデルズ輩の、方正にして慈悲ある虛僞に復讐したかを示した。メンデルズこそは正しく不知不識の間にオスワルドを亡ぼした原因である。此の不知不識と云ふ見地から見れば、誰人も非難を受くべきては無い。イブセンは吾人の前に生存の悲劇的實在を展開した。オスワルドの惱んだ所は、他の不幸にして生れ來た人間、生れたが故に死ぬべき運命を有する人間の惱む所と同じてある。「戀の喜劇」のフワルウとスヷンギルダとは、古曲詩人がヘートと呼び、デスチニーと呼ぶ、此の人生の悲劇を經驗した。ノラは實際の目的あるに非ず、實際生活以上のもの、爲めに、得べからざる自由の爲めに其家を捨てた。此の悲劇は最高の美と連なつて居る。イブセンは人生の

絕望と拷問とを現はした。吾等は此の爲めに亡ぼされるが。また亡ぼされる値がある。

イブセンは隨所に人間の生活は地上に限定せられずして、人間は最高理想と云ふ一瞬の美の爲めに生存し努力することを示した。

彼は有ゆる美學の形式に屈從するを肯じなかつた詩人である其作物の組織に於ては古曲的其詩的感情の深さに於てはロマンチック、其近代社會の表現に於ては自然主義的であつた然し、若し一層深く詩人の人と爲りを觀察すれば、イブンセは種々の形式を假るにも係らず、自然主義者にも、ロマンチストにも古曲作者にも非ざることを見るであらう。イブセンの詩に於ては、社會と哲學的理想主義に對する反抗が、十九世紀初期の詩人――ゲーテの初期の作物、バイロン等を鼓吹したものと同一の自由主義理想主義と、理論的、遺傳的に結合せることを發見せられる。

密に結合せる二力は、相剋し合つて居るが、また離るべからざるものである、即ち智識と信仰とは相互に交讓しつゝ、步一步其勢力を擴げるものである。しかも、二者は曾て他を屈し得ない、寫實主義の一時の勝利は、やがて理想主義の未來の爲めに舖石を敷くものである。潮が一方に高まるに從つて、一方には深さを增す。智識が信仰の要求を增すこと、破壞が建設の必要を加ふるに等しい、寫實主義は理想主義に渴して居るのである。イブセンは、古き神々に反抗し、排拒するにも拘らず、實は、破壞性の理論を去つて、吾等が現今經驗しつゝある建設性哲學的、藝術的勞作に導く、かの大智力的反動の最初の尤も熱心なる首謀者の一人である。

（三）

「ヘッダ・カブレル」は「幽靈」の如く、廣い歷史的、社會的基礎を有してゐないが、然し作者は圓熟した筆力を以て近代の人間の內部的戯曲を描いた。全戯曲はヘッダ・カブレル一人に集中して居る。此の廣い哲學(フイロソヒ)的通觀(カルゼテラリゼーシヨン)は、現代の道德的生活を掩ふと共に個人的性格をも具へて居る。自餘の人物は中心の人物を明か

にする爲めに集まつて居る。詩人は其想像力を動かした女として明瞭に、情を籠めて描いた。初幕で、顏、皮膚、髮の色までも詳しいと書きを附したのはその爲めである。其中の、冷か(コールド)な、はつきり(クレアー)した不感無覺(インペッサビリチー)でそはヘッダに貴族的な魅力を與へたものである。夫の大學敎授ヨルゲン・テスマンは上流的凡物(ブルヂョアーペチナチ)の權化である。ヘッダは理由なしに、無意識に不可抗的に輕蔑して居る。結婚したのは、初め買ひ被り、後には五月蠅いのと、無頓着と、テスマンが自分を崇拜するが故に、他人に比すれば自由であらうと云ふ考へからであつた。テスマンは御人好の良夫賢父である。彼は物慣れない樣な所があるが、それは理想主義の爲めでなく、智識の缺亡から來たものである。然し物質的な利益の問題が生ずると、狡猾、敏捷、奸惡に變ずる。然し彼は敎授の職を單に金錢の出所と見るに止まらない、彼は本の爲めに本を愛する男である。彼はヘッダの姙娠を知つて制し難き喜びと、馬鹿々しい自足とを覺ゆる男である。彼はヘッダが自分を嫌厭して居るとを感じない男である。テスマンと敎授の椅子を爭はんとするレーフボルグは曾てヘッダを熱愛したとがあつて、天分の豐かな、テスマンとは全然相反した男である。ヘッダが結婚しなかつたのは、彼の性格の一部が、美しきものを愛するヘッダの本能と扞格した爲めである。天才を伸ばすによし無く、酒と女に隱れたのが、ヘッダには不自然で醜惡に思はれた。美しくないとは、ヘッダが死よりも恐れた所である。且つ、ヘッダの天性には、レーフボルグの性情と似た所があつて、ヘッダをしてレーフボルグに手を與ふるとを許さなかつた。ヘッダは是れと抗する力を有するとは信じなかつた。故に愛を殺し、輕蔑したテスマンに身を任せた。彼女の高尙なる心事は、信仰を奪はるる時は自滅して憎惡心と變じ、人生に反抗し、其最終の情熱たる「最高の美に對する効果なき愛」をも反撥する。ヘッダは美を愛して、しかも地上に存在し得るとを信じなかつた。彼女(かれ)はすでに情がこわくなつて、他人の苦惱を見て多少の喜びを感じたが、自ら制して色に現はさなかつ

た。彼女はまた精神上の貴族たる最高の性情――眞誠、沈着の性情を具へ、是れが爲めに其全性格は一層の魅力を加へた。自尊もまた其性格中の力ある一部であつた。レーフボルグの情人テヤが自分よりも強き力を有して居ると云ふとは忍び難き打擊であつた。彼は苦悶した。人生に對する反抗、人間に對する憎惡は、今や制縛を破つて一變して破壞力と成り、如何に神聖なる物と雖も道に當るものを碎かんとするに至つた。結果に望む所はない、たゞ惡の爲めに惡を成し就げた、他人の淪落を目擊する樂しみの爲めに罪を犯した。其美しさは形容し難き恐しさを加へ、更に魅力を增した。テヤはヘッダを恐れたが、其美に打たれて其魅力に抗する意志力を失ひ、自分とレーフボルグとの關係を打ち明けた。心のまゝにテヤを翻弄したヘッダはレーフボルグに向つた。昔の事を思ひ出させ、レーフボルグが今もなほ自分を愛すと告白するや、更に大膽なる手段を採つた。自分自力が不充力てあるとを知つて、獨身者の會合に趣くとを斥けたレーフボルグに酒を飲ませたのである。一滴も餘さずそれを飮んだレーフボルグは、テヤの勸告に背いた。弱くして他人の力に繋がれるを耻辱と感じたのである。かくして二杯三杯と重ねたレーフボルグは、デスマン等と共に獨身者の會合に趣いて、積年の自制に依つて恢復した名譽と、テヤと共に著述した文明史論の草稿とを、一夜にして失つた。ヘッダは其望みを遂げた。彼女は其力が人間の運命を支配するとを知つた。テヤは少しも是れを知らない。翌朝レーフボルグが悄然として訪ねて來て、テヤと二人の間の子、草稿は自ら裂いて捨てたと云ひ、万事休したと云ふと、ヘッダは彼とテヤとに對する侮蔑の念を包まんともせず「あの人の好い可愛い馬鹿が、男の運命を握るなんぞは」と云ふ。ヘッダは夫テスマンが拾つた草稿を抑へて居る、其子を殺さなければレーフボルグを生かし得る事を知つたが、却つて逆に出た。レーフボルグは、再び生活を續くるに堪えないとを知つて、自殺せんとする。別れを告げるとヘッダは紀念として短銃を與へた。其瞬間にも「美」と云ふ考へがあつ

た。即ち繰り返して、「見事に」やれと云ひ、レーフボルグに、「見事に」と誓はせた。出て行くあとを見送つて、ヘッダは、草稿を煖爐で焚いた。吾等は、この一場で實際生活を遮ざかり、北方の傳説を見る感を抱く。吾等は其罪の恐ろしさ――恐ろしさの爲かも知れない――にも拘らず、吾等の心が解析し難き美感に依つてヘッダに引き着けられるを覺える。テスマンが草稿の事を尋ねると、冷然として焚いたと云ひ、テスマンが驚くのを、「貴夫の爲めに焚いたのだ」と押つ被せ且つ、自分が姙娠したといふ。こゝに於て、衆人の尊敬をあつめたテスマンは、一つは未來の競爭者たる親友の淪落、一つは父と成ると云ふ喜悦に驅られて、其心底を暴露する。吾等は一時に人間の家庭的本能に隱れたる動物的利己心が現代の上流階級の道德の信仰と主義とを壓するのを知ることが出來る。テスマンは一家の長として、將に父となる人間として心の底から喜ぶ。世界には他人の子が無く、自分の子のみが生くべき運命がある樣に喜ぶ。この喜びは、生存競爭に勝利を博した雄の喜びである。テスマンは、喜悦を制し得ず、自分で家婢のブルタに告げ樣に云ふに至つて、ヘッダは其屑々たる性格に惡感を催し、寧ろ死ぬ方がいいと云ふ。其會話の終りに當つて、漸くテスマンは自分の擧動のはしたなきを覺り、且つ不意に始めて友人の不幸に同情する。判事ブラックが、レーフボルグの死を報ずると、ヘッダは其傷の後頭部でないのに失望するが、胸部も亦「見事」であると云ふ。然し、ブラックと二人に成つて、其傷が腹部であつて、且つ自殺か他殺かは不明であると知るや、ヘッダは不快に堪えずして、「何故妾が關係したとには、一から十まで、呪咀の樣に、嘲弄と野卑とが被さるのだらう」と叫むだ。更にブラックが、ヘッダもまたレーフボルグに與へた短銃の爲めに法廷に立つを免れないと云ひ、是れを知るものを自分のみであると云ふや、ヘッダは自分が全くこの狡猾にして好色なる老人の手中に陷つたとを覺つた。ヘッダの自尊心もこゝに至つて、將に碎けんとする。これヘッダの堪え難き所である。覺悟して、

ヘッダは、悔悟の念に驅られて、テヤと共に草稿の原本に就いてレーフボルグの遺稿を再造せんとしつゝある夫に微笑を示し、自分の部屋に入つて、物狂ほしくピアノを亂打し、夫が咎めると、「二度と御邪魔は致しません」と答へた。不意に爆聲がした。ヘッダは頭顳部を射つたのである。

ヘッダは、他人を蔑視し、自ら飽きて、冷然として自殺した。自分では勇氣がないと云ひ、此の故に死んだ。然し、彼女は意思と力とを有してゐた。たゞ支柱を有しなかつたが故に輕微な支障にも打ち勝ち得なかつた。逃路を得なかつた力は彈ね戻つて自分を亡ぼした。ヘッダの精神は信仰なくしては生き得ざる類のものだ。而してヘッダの信仰は亡びてゐた。若し彼女が神を發見したならば、彼は女傑、殉難者と成り得たら彼女は信仰の要を斥け得ず、無信仰の苦惱に堪えず、上流階級の見地に屈するを得なかつた。女は男よりも執念深い、內部の力は、活動に向はなければ、罪に轉ずる。ヘッダは理論的虛無主義——人間を憎み、存在を厭ひ、冷やかに意識せる自滅に達した。吾等はヘッダの殘酷なるに對し、道德上の虛無主義に對して判斷を下さんとはしない、吾等はこの狀態では最早生存するの不可能なるを知り、光明の最後の一線が消え、新星は未だ輝き出でざる時代、古き神々が死んで新しきは未だ生れざる時代の暗黑裡に、死ぬ爲めに生れたる人間の悲劇的運命を見るのみである。



自然主義論の餘波

自然主義の波濤滃渤として寄せたるも、議論の波濤なるものは毎に此の如し、寄せ去れる今も寄せざりし昔も際立てる相違は無く兎角は渺茫たる無際の青海原、渾沌として次第に安らけき元の眠に入んとはす唯大波濤の後には小餘波あり、此處彼處に小やかなる音を立てゝ僅に磯回の寂寥を破るものあり、天溪氏皷を鳴らし、天弦氏鏖を進め、花袋氏時に遊弋を試み、宙外氏其衝を受けて、大禿になりて大車輪の武者振を見する、最後には抱月氏の隊伍整々動かざること山のにごとく靜かなる事林の如き陣立を以て現はるゝなど、目覺ましかりし論壇も、誰が勝ち誰が負けしか、落着は孰れともなく重なる戰手の多くは今や倦みたるけはひあり、天溪氏の太陽に於て僅に斷片的にそれに論及せるも淋しく、宙外氏の新小說に於て之も一寸した處に向腹癒を並ぶるに止めたるも物足らず、早稻田文學にもその消息本月は途絶えたるあり、されど、諸方面を見渡せば、猶ほ自然主義の論全く杳として氣息を絕つには至らず、いでや進んで其小餘波なるものに如何ばかりの響あるかを聞かん、天溪氏は『多數々と小數の論客』の項に於て次の如く、今の批評家の時には多數を標準とし、時には小數を標準とするの勝手自在なるを責む。

●善美の關係論にはこれが最も好く現れて居る、自然派に向つて美は善の支配を受くべしと論ずる場合には其標準が多數說である、然るにその所謂善を說く場合には小數の倫理說を本とするではないか、蓋し斯樣に豹變しなければ自說は常識に流れ、普通一般の考と並行して論家たるの名を汚すことに成るから已むを得ず、曖昧の標準を利用するのであろう。

と皮肉な揣摩を試み更に。

一例を擧くれば戀愛だ、現實に立脚した自然派が戀を描寫すれば、必ず善といふ標準を揭げて非難する然らば戀を描寫した一切の文寫を否定しなければなるまいに、左樣ではなく、一方には或る條件の下に戀

を是認する、日本の現況から見れば戀を否定するものが多數である、其多數に對して戀是說の小數說を標準とするかと見れば、自然派的描寫に對しては戀否說の多數說を本位とする。

と詰る、之は反對者側には左迄に應へず、審美說上より十分に辯あるべき事ならんも、その審美說なるものが天溪氏には常に難過難透なる關門たるが如き觀あれば此處暫くは長く鴻溝の穿たれ居ることとなるべし。

次に宙外氏は自作の「曇天」の評を氣にして早稻田文學社の評家に當り、觀念小說を作りはせぬがさればとて自然を描くなどいふ出來ない相談には乘らぬといふ、その口吻には相も變らず自然派と云へば、認識論にていふが如き嚴密なる意味にて、人間の感官の寸毫も觸れざる自然なるものを描寫すといふが如くに解し居るらし、出來ない相談なる語意には十分之を洩すにあらずや、更に「自然派の立脚地よりいへば現實以外に標準がないのだから現實界の智識を今少し豐富にして貰いたい」と評論の又評論に於て大に揚足取を演じて溜飲を下げぬ。

同誌に孤島氏は「白鳥と青果」と題し、如何に自然主義が客觀の描寫を唱ふるも如何に無理想無解決と主張するも、個人を離れては文學なし、今の自然派の作家としても免るべからずとし、さて可愛相に中毒した頭に人間の姿は有るがまゝに映らず、或は野獸に見え或は惡魔に見え、つまり毒にて歪みたる個人性が現る、なりといひて、花袋白鳥青果の三氏を捉へ、花袋氏を以て野獸主義、自餘二氏を以て惡魔主義となし、その二氏には多少の贊辭を拂ひたるながらも、その歪みなりに愛受し得たる儘反應し居るに過ぎずとして、潛に理想派小說により深き意味あり生命あるを匂はしぬ、一篇の文中その主意の最も昭明なるものを擧ぐれば左の如し。

つまり創作の味は個人性の味なんだ、創作に動かされるのは作者の個人性の光に打たれるからだ、
其答ではないが、此世は人間の世界だ、人間の世界でやる事が人間臭くなるのに不思議はない筈だ、

と、理路極めて明瞭なりといひたればとて贊辭にはあらず、抱月氏の『自然主義の價値』なる篇中、その一二、三、四段境の解を再び辿りたらば如何、所謂三段境の心的狀態にあるものが、その事實の方面に重を置きて筆を下す云々の處、此幺微の部分の一解たるに力あらんか、自餘の論者は暫く擱く、少くも抱月氏に於ては、同一カメラに映る同一の姿の寫眞の如く、凡ての

作物盡く寸毫の消長なく符合するものとはせざるべしと信ずるなり、

次にいふべきは猶も同誌に於ける竹風氏の自然主義者なる小說體感想錄なり、氏は石崎紅葉なる主人公を借り氏の頭腦に解する自然主義なるものをおめず臆せずさらけ出して曰く、

余は余が懷抱して居つた人生觀、文藝觀を抱住して文壇に立ち得る才能識見財力を有せざるものであらうか、必ずしも然うてはないのである、然うてはないのであるが、中々文壇に立ち難き運命に飜弄せられて居るに過ぎん、飜つて世間に跋扈して居る文士乃至詩人藝術家を見ると、彼等は第一人物に於て感服が出來ん、酒は時と處とを厭はず飮む、醉うては狂態醜態の極を盡す徒輩だ、女にはといへば殆んど玩弄的に接して居るのだ、愛の戀のといふ分子は微塵もない、唯もう肉慾一點張だ、彼等の接する女子に純潔な高尙なものは一人も無い、彼等は得意になつて中州蠣殼町の伏魔殿を語る手合である、斯かる人物が自然である、否なかゝる人物でなければ詩人には成れないのが今の世の中だ、何が故ぞ、噫、果して何が故ぞ、彼等は異口同音に呼ばつて別に仔細はない、吾黨は近代人なるが故に近代的思想の近代的行動を肆にするのみだ、と慾う云ふ、近代的!!! 近代人!!! 諾!? 果して然らば余は事實に於て年齡に於て、閱歷に於て、彼等よりも近代人てある、彼等の生ける現實が近代人の實相たらざるべからずんば、余が十年の苦學は畢竟無用の業てあつた、しかも主觀理想を貫くは難く、近代人なるは容易てある、墮落腐敗はこゝに於て墮落腐敗てはない、近代人の貴ぶべき一面の屬性てある、猶ほ郭に靈黃あるが如きもの、なかるべからざるの如きものだ、余は寧ろ近代人たるが故に近代人に與し、彼等と共に墮落腐敗の現實的人生を味ひ、現實の人生に觸れやう!!!

と以下尙ほ詞を重ねてあるが、要するに氏の解する自然主義なるものは、文藝上のそれを離るゝ一種の主義とのみ見るへく、從つて當年氏等の唱說したる本能滿足主義との干涉如何消長如何と一問を提起したき心地す。

如上の數氏の見に比しては東亞の光に現はれてる樋口龍峽氏の議論こそ頗るその肯綮に當りたるものなれ氏の抱月氏の主張に對する見解は七月の新小說に現れたれば知るものは知らん、氏は大凡そには抱月氏の所說を許容しながら、而かもその餘りに包括に過ぎたるところ却て自然主義なるものをして一主義の名を立せしむるの價値を危するものなりとて、其處に不滿を感じたるものらしかりき、此篇は廣く凡ての自然主義者の所說に注意して說けるものだけ、前者よりは理路に徃來あり、錯綜あれど、末段は專ら天溪氏等の一派を後眼に掛けたるものと見て大謬なからん、氏は自然主義の二大要素として、曰く技巧排斥、曰く理想排斥の二條目となし、その技巧排斥を解しては技巧に二あり、

一は脚色上の技巧にして他は文章上の技巧なり、自然主義者の排斥するは前者にして必ずしも後者にあらざるが如し唯後者に於ては事實と過不及なき一種の新技巧を唱道するもの之が自然主義者に取つては誇張的に技巧排斥の聲として現はれしものなりと解したるは極めて私見なき穩健の解とすべし、更に理想排斥を語つては、彼等自然主義者等は小なる人間の小なる思考力にて立てたる理想なるものに信を置かるべからずとすれど二元を立てゝ物に判斷を下す以上は、それの善惡美醜なるにせよ、將た僞眞なるにせよ、等くその間に何等か別個の標準あるによらずんばあらず、標準これ即ち一種の理想なり、彼れの小なる人間業には企つへからざるものならば、此も亦等しく小なる人間業には企てらるべきにあらずとなし、更に飜てその彼等に理想々々として排斥せらるゝものと、亦これ由來を尋ぬれば等しく現實に初程を起したるもののみ、彼を推して此を斥くるの理由あらずとの意を示し、要するに彼等は排技巧といふと同一論法を以て排理想と揚言したるに止まる、その眞意は唯現實を尊ぶといふ一新理想を追及するもののみとなし、扨てその現實を尊ぶといふからには彼等の作品には歷史小說の存在を許さゞることその一、又現實なるもの盡く自然に非ず、畸形見、精神病者も現實の中にあれど、同時に自然なり、之が眞なりとは云ふべからざることその二、此二ヶの缺點を數ひて本誌に於ける本篇は未完のまゝに結ばれぬ。こは現代の作者並に或る一流の評家には敵意を排して聽くべきの價値あらん。左れど龍峽氏は抱月氏の自然主義を評して餘りに包括的に過ぐとはいふものから、吾人はその包括的の何が故に不可なるかを曉得せず、今抱月氏の所論によつて此如上の二問に向はゞ如何、左まで難透のものとしも思はれざるなり。長ければ玆に縷述を止めん、

最後に向軍治氏によつて解せられたる自然主義は如何、氏は劈頭先づ『自然主義寧ろ歡迎すべし』、吾人は敬遠主義を取つて此の如き語を放ち先づその厭ふべきものの自滅を速ならしめんと起し、扨て此の如き自然主義なるものは元と哲學上の自然主義と關連するの、而して後者は常に思想の紊亂期に於て生ずるの、換言すれば新舊兩思想の過渡期に現はるるものとし、斯くて少しく氣を轉じて此方面より見れば自然主義にも消極的効力あるを論じ、何者も此世に不朽なるべからず、主義將た兇るべからざるなり舊主義は新主

義の爲に倒れざるべからず、其處には活氣あり、活氣に驅られて性急に其間に現れ騷ぐもの遂に自然主義の如きもの丶生ずることを已むべからずとの口吻あり、是れも未完なりとはいへ、軍治氏の解釋する自義主義なるものはそれ知るべきのみ、決して單なる文藝上の義を有するものにはあらず（松逕）



次號說苑欄豫告

那須野　大町桂月

題未定　島村抱月

包圍されたる伊藤公　黑頭巾

平田東助論（現代人物評論第九）　諸名家

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限内ニ死亡セバ)の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角 (電話 七貳貳番) 京都本店
東京市京橋區南植町壹番地 (電話本局五壹八番) 東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角 (電話東壹貳五參番) 大阪出張所
長崎市榎津町六十五番地 (電話 七貳六番) 長崎出張所
廣島市紙屋町(秦 忠兵衞方) (電話 六〇八番) 廣島出張所

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

小說

後進

小栗風葉

絕交と云ふほどては無いが、些つとした感情の行違ひから、僕がA氏と暫く往來を絕つて居た時の事。

A氏と同鄕の者て吉川と云ふ男があつた。今年二十二か三て、去年音樂學校が志願で上京したのだが、入學試驗には落第する、少しばかり用意して來た學資も無くなして了ふ、食ふにも困るやうになつて、去年の十一月霙の降る日、綿入布子一枚て顫へながらA氏の所へ轉げ込んだものだ。世話好きのA氏は那方這方紹介して、色々食ふ道も圖つてやつたが、やれ那麼俗務は厭だの、やれ這麼無趣味な仕事には堪へられぬのと、擇好みをして始末に行けなかつた。

僕もA氏からの依賴があるし、果して間に合ふか合はぬか覺束無く思ひながらも、本人の望みて或る文學雜誌の編輯へ周旋してやつた。學問と云つては小學校を卒業したばかりて、音樂學校の入學試驗さへ滿足に出來ぬのであるから、雜誌社ても事務の手傳ひぐらゐより使道は無い。けれど、本人は何所ま

ても記者に使つてくれと云ふので、此節流行の訪問筆記を取りに廻つた。早速何々雜誌記者と肩書の入つた名刺を刷らせて、其れを得意になつて振廻したが、編輯主任の話では、其筆記なるものが甚だ困つたものださうだ。折角面白い話も吉川の手に懸ると行らぬものになつて了つて、而して誤字や當字は未だしも、天で話の主意の通らぬ事も稀しく無い。甚しいのになると、全きり先方の話した事とは反對の意味など書いて、談話者の劇しい詰問の正誤を受けたりする。

這麽風で雜誌社の方でも餘り好い顏はしない。始めは月給で入つたのが、後には原稿で一枚幾ら——と云つても、元々談話の筆記であるから極めて稿料は廉い——と拂ふ事になつて、其原稿も內容が行らぬからと言つて撥付けられる事も屢々だ。然し然うして大家や名家を訪問して廻る中に、耳學問やら聞學問やらで、高々二三箇月の中に悉皆文學通になり濟した。やれ自然主義が何うの象徴主義が何だの、やれイプセンの人生觀だ事のトルストイの藝術論だ事のと、盛んに外國文學の通を振廻して、自分では脚本家になるのだと言つてゐる。

「是からの文學は何うしても劇ですよ。イプセンは言ふまでも無い事、ズーデルマン、ハウプトマン、ビヨルンソン、メーテルリンク、それからダヌンチオでもゴルキーでも、世界の天才は皆劇に赴いてるですからな。」と這麽事を臆面も無く並べる。

それで近頃は愈々脚本の創作に懸つて居る。一幕物の社會劇で、デカダン風のモダーンを主人公にした自信のある作だと言つて居る——爰に些つと言つて置くが、吉川は何事にも必ず自信と云ふ事を公言

する。何時かも恁ういふ事を言つた。

「僕は電車に乘つて、女學生や令孃や若い細君や多勢乘合して居ると、其等の婦人は何れでも皆口說け・ば僕に應ずるものと自信して居るから、乘つて居ても非常に趣味があるです。」

此趣味と云ふ二字も、好んで渠の口にする辭だ。

て、僕がA氏と遠ざかると、吉川は那方へ行つては僕の事を言ひ、這方へ來てはA氏の事を云ふと云つた風で、煩はしくてならなかつた。敢て兩者の仲を此上離間しようの、中傷しようのと云ふ深い惡肚でも無いのだが、唯忠義振つて喜ばれようとするのだ。誰しも陰では色々な事を言ふ、それを一々本人に告口した日には、言つた方の迷惑は固より、聞く方でも餘計な腹を立てねばならぬ。僕は其事を云つて、

「吉川君、君は僕の所へ出入する意りなら、斷然最うA君の所へ行くのを舍し給へ。それとも從來の交誼上、A君と遠ざかる譯に行かないと言ふなら、爲方が無いから當分僕の所へは來給ふな。君は那樣意りぢや無いか知らないが、何だか那方へベッタリ這方へベッタリ內股主義のやうで、僕は甚だ其態度を飽足らなく思ふ。君も男なら、男らしく去就を明かにし給へ。」

すると、暫く考へて居たが、旋て然も大決心でも爲たらしく肩を聳かして、

「可いです。僕は最初A君に救はれた恩義があるから、A君も貴方と絕交して寂しからうと思つて其れで慰めに行くんですが、僕だつてA君の爲めには隨分迷惑を受けてるんです。可いです、貴方に然う思

はれるのは心外ですから、斷然A君とは絶交します。」と言發つた。

けれども、相變らずA氏の所へは出入して居るらしい。然し僕の所へ來ては、最うA氏の事は一口も言はなくなつたので、其上干渉がましい事を言ふても無いと思つて、僕は知らない顏をして居た。

其中に例の脚本が出來たと云つて持つて來た。口癖の自信を振廻して、其意りて讀んで見てくれとの事であつた。而して何所へか賣つて貰ひたいやうな事を匂はしてゐた。

それから、來る度びに讀んでくれたかと言つて催促する。僕は始めの方の二三枚を讀んで見て、何うしても後を讀む氣になれなかつたが、それでも努めて尾ひまで讀み通して見た。無論物にはなつて居ない。

僕はA氏と違つて、餘り面と向つてツケ〳〵言ふ事の出來ない方であるから、何うも舞臺上の用意が足らないやうに思はれるぐらゐの事を言つて、原稿を返してやつた。然し僕は脚本の智識に乏しいから、一應A氏にも見て貰つたら可からうと言ひ添へた。すると、其足で直ぐA氏の所へ持つて行つたさうて、それは後で聞いた。

A氏は毎もの調子で、這麼物は駄目だとばかり撥付けた。其實A氏は頭から高を括つて居て、一枚も讀んでは見なかつたのださうだ。

所て、吉川の友人に黒瀨と云ふ男がある。此男は吉川と違つて、最う十年の餘も文學志願で苦しんで居るのだ。元は浮世繪師の弟子だつたのが、途中から目的を違へて、一時は中國邊の可也な新聞の小說記者として其地方の人氣を博したものだ。其時が何でも未だ二十になるか成らずで、左に右く器用な、一種の才筆だつたに違無い。丁度A氏と同年輩で、黒瀨が小說記者で鳴らして居る頃、A氏も同じ新聞へ短篇小說など書かして貰つて居た。其中にA氏は上京して、一躍中央文壇に名を成す、それに勵まされて、黒瀨も東京へ出て來たのが今から五年前。それまで內々關係して居た女を一緒に連れて、夫婦二人て暫くA氏の家にも厄介になつて居た。

黒瀨は東京の生れて、地方新聞に居る頃は盛んに江戶子を振廻したものだ。所が、今ては東京生れを耻として、江戶子は小器用て、薄片で、執着心に乏しく、到底大藝術大文學を成すの素では無い。自分は江戶子から脫却するのだと言つて居る。けれども、矢張江戶子肌は拔けない、些つとした例が、朝湯の歸りに魚屋へ廻つて何か異な物でも目に付く、細君に直く其れを買はせにやつて、朝端から小鍋立して赤い顏でもして居ようと云つた風――江戶子も餘り上品の方では無いのだ。

一體黒瀨は十五六の頃から親の手元を放れて、全て職人肌と違ひの無いやうな舊派の繪書仲間に立交つて、其所へ人間は小器用だし、早くから錢取りをして、早くから惡い遊びなど覺えたものだ。中國の新聞に居た頃も、飲む遊ぶ、隨分如何はしい行爲もあつたが、東京へ來てからは細君も附いて居るし、それに眞面目な藝術家生活に入らうと云ふのであるから、人格とか品性とか云ふやうな事も口にするやうに

なつた。然し永年浸込んだ肌合は拭け切る譯には行かない、此男の癖て直ぎ自暴酒を飲む、那樣時の言ふ事から爲る事、何うしても破落戸に近い。而して酒の醒めた後の言草が、自暴酒でも飲んで僅に自意識を忘れるのだ——吉川の自信と趣味に於ける如く、黒瀨は自意識と煩悶と、此の二つの辭が口癖だ。

口の惡いA氏なぞは、毎も黒瀨を捉まへては、

「君も是まで隨分道樂もして來たし、吉川なぞのやうな融通の利かない人間でも無いし、煩悶も最う可い加減にしろよ。煩悶を見えや賣物にするには最少し若くなければ似合はない、其間に田舍新聞の續物でも書いて、偶には細君に芝居の一つも見せてやれ。」と然う言ふ。

吉川なぞとは違つて、最う年も年だし、然う言はれて眞氣になるほど黒瀨も坊ちやんでは無い。唯和や〱と笑つて濟して居るが、然し酒でも飮んで醉つた時には、大いに反抗する。而してA氏なぞは無論の事、今の文界の有らゆる作家と作品とを片端から排斥して、何れも文學の眞意義を誤まれるものだと言ふ。それなら君の言ふ其眞意義の文學とは甚麼物かと問返すと、それは僕にも分らぬ、分らぬから煩悶もして居るのだ。けれど朧氣には自覺して居る所もあるから、何れ其れは作品として發表すると言つて居る——黒瀨の煩悶々々と言ふのは、詰り藝術上の煩悶なのだ。

些つと一例を擧げると、某氏の新作て相應に評判の物が出たとする。黒瀨は早速其中の或る一個所を拔き出して、爰は怎ういふものでは無い、人間の眞相を誤つて居る、虚僞だと言つて全篇を排斥して了ふ。其拔き出す一箇所と云ふのが、多くは男女の情交の問題に限られて居る。渠は未だ肩揚も取れぬ十六七の

頃から、有らゆる下等の女に關係して、有らゆる卑しい情事に精通した其汚い經驗を根據にして、婦人の節操とか、純潔な戀愛とか云ふやうな事は、人間界に無いものと信じてても居るやうだ。

て、黒瀨は然う云つた人生觀——寧ろ婦人觀に由つて、例の躬ら文學の眞意義を自覺したと云ふ其試作に取懸つて居る。吉川の話に由ると、何でも男女の性慾とか云ふやうな事を主としたもので、野合、避妊、姦通、墮胎、其上に又花柳病だの色情狂だのと、有らゆる異性間の汚い事を露骨に並べたものださうだ。而して非常な抱負を以て最初の一節を二三の雑誌社へ賣り歩いて見たが、何所でも其內容に驚いて體好く斷つた。黒瀨は時代が惡いのだと言つて失望は爲なかつたが、然し其當座は自暴酒ばかり飮んで居た。

這麼風であるから、生活は無論苦しい。始めの中は細君も何の彼のと訴したさうだが、慣れゝば慣れられるもので、此節では貧乏も餘り苦にはしない、寧ろ平氣と云つても可いくらゐだ。始終夫から聞かされる文學論に養はれるとも無く頭を養はれて、自分等夫婦の逆境は誤まれる文界の罪だ、時代が惡いのだと信じて了つて居る。で、夫の友人のA氏などが羽振りの好いのを見ても、心では冷笑して居るらしい。而して自分等の貧苦を得意とは思はないまでも、決して耻だなぞとは思つても見ない。質草にも盡き、賣食ひの材料にも盡きて困つて來ると、黒瀨は友人へ宛てゝ長い〳〵無心狀を書く。色々な長文句が原稿紙に四五枚も書き潰されて、而して五十錢貸せとか、御都合が惡ければ三十錢でも十錢でも可いとか、浸垂れた無心が言つてある。それを細君は友人の所へ持つて行つて、何が書いてあるか自分は關知しないやうな顏をして濟して出す。すると、人の惡い友人なぞは面憎がつて、故と二十錢三十錢の小錢を露出しに手渡

しする。

「おや、私は何の使ひかと思つたら、這麼事をお願ひ申したんですか。どうも誠に濟みません。」と空々しい事を言つて細君は歸る。

歸りには其錢で、先づ米を二食分とか一日分とか小買をして、冬ならば鮪の切身を一片に葱を何本それで葱鮪でもして、甞物や鹽辛や香物や、色々ゴチャ／＼並べた食台の差向ひて、三合ばかりの酒を小ぴ／＼と夫婦して飲む。食意地の汚いのは東京人の癖だが、黒瀬は殊に小鍋立が好きで、甚麼に困つた時にも五勺づゝの牛乳を絶やさず取つて居る。敢て滋養に飲むのでは無い、それで粥を焚いたり洋食紛ひの物を拵へたりするのだ。以前A氏の家に厄介になつて居た頃、ライスカレーを拵へるのに種が無くて、黒瀬の案じて鰮の蹴出しを肉の代りに使つて細君に拵へさせた事がある。其れをA氏が苦々しがつて、

「那樣陋しい工夫してまで何も故々ライスカレーなぞ拵へて食ふ必要は無い。菜が無ければ澤庵でも生味噌でも澤山だ。餘り貧乏慣れた眞似はして貰ひたく無い。」と言つて呶鳴つたと言ふ話だ。

で、段々友人間にも不義理が嵩むし、それに藝術上にも生活上にも眞面目のやうて不眞面目な其態度に友人の方でも愛相を盡かして、今はA氏なぞとも餘り親しくは往來をしない。僅に吉川のやうな若い者對手にしては、毎もの文學論など繰返して居る。而して年下の然ういふ連中に向ふと、決つて中國の新聞社に居た頃の自慢話を始めて、其頃の達筆だつた事や、人氣のあつた事を煩く吹聽する。一つは傍に居る細君に聞かせる爲めかも知れない。

「黒瀬君は何時でも自分の過去ばかり誇つて居る。今から最う過去を語るやうぢや、略ぼ那人の前途も察せられますな。」と吉川などまでが馬鹿にして、僕の所へ來ては那樣陰口を言ふ。

或時這麽事があつた。

僕は一日、友人の所を遊び廻つて、夜の八時頃に家へ歸ると、今日夕方黒瀬の細君が用ありげに訪ねて來て、僕が留守なら家内に會いたいとの事だつたさうだが、生憎其家内も用足しに出て留守だつた。細君は非常に困つた氣色だつたが、それでは爲方が無いから、二時間ばかり經つたら又來ると下女に言遺いて歸たさうだ。而して薄暗くはあつたが、細君は古い單物の上に細帶一つ緊めて、其れを隠す爲めか、此暑いのに綿入半纏を端被つて、口上を言ふ間も汗ばかり拭いて居たと、下女は笑つて話した。僕は何が可笑しいと言つて下女を追ひやつたが、笑ふのも無理は無い、七月の今は盆にも間は無いのだ。

僕は夕飯前で腹は耗つたが、先づ汗になつた體を一風呂流して、それから漸と膳に向つて箸を取揚げやうとする所へ、黒瀬の細君は再び遣つて來た。直ぐ會つて見ると、下女の言ふやうな綿入半纏も端被つては居ない。着物は成程洗曝しの紺絽だが、帶は紋博多か何かの立派な單帶だ。僕は變だと思つたが、後で聞くと、A氏の細君から着物と一緒に借りて來たばかりのを其時直ぐ最う帶だけ緊更へて來たのであつた。

細君は一通の封書を出して是をまあ御覧下さいと言ふ。受取つて見ると、黒瀬春子どのと云ふ細君の名宛て、夫の黒瀬が何所か途中から出した郵書である。封は切つてあるので、取敢へず中を披いて讀むと、略と恁う云つた文句だ。

其方の困つて居る事は重々察して居る、が、小生も家を出てから今まで所々方々と奔走して見たが、一つとして功を奏しない。今は絶體絶命の場合であるから、豫て其方にも言聞かせてある通り、小生は斷然たる處置を取つて、孤獨放浪の生活に入るべく決心した。其方は淺草の叔父へ行くか、さも無ければA氏及びT氏（僕の事）の兩君に一身の振方を相談なさるべく、此際細々しい事は故と省いて爰には述べない、と云ふ意味の文句で、最後に、又逢ふ時節もあるべし、自愛あれ！と筆を留めてある。

僕は讀んで見て呆れた、何と云ふ滅茶な男だらう。放浪生活も可い、夫婦別れも強ち惡いとは思はぬがそれなら其れで丁と細君の身の處置を付けて置いて、それから自分の好自由を取るが可い。出先から郵便一本送付けて置いて、一身の振方を相談なさるべくも無いものだと僕は思つた。然かも聞けば細君は身重ださうだ。

「何うも突然で、僕も何ともお話のしようが有りませんね。A君へも御相談なすつたのですか。」

「只今參つて見ましたのですが、お留守で御座いまして。奥樣にだけ些つとお目に懸つて參りました。」

「A君の細君は何と言つて居ました。」

「いゝえ奥樣には何ともお話せずに外に少しお願ひして參りましたので。」

「A君にお會ひなすつたつて、此お手紙ではA君も御返事に困るでせう。それで黒瀬君は何時家を出られたのです。」

「昨日の朝で御座います。丁度吉川さんがお來でになりまして、今日は淺草の四萬六千日だと云ふやうな

お話から、それは行つて見たいものだ、丁度何所やらで三圓ばかり原稿料の受取るのがあるから、吉川君行つて見ようぢや無いかつて、宅のが申して居りましたが……實はお辱しい話ですが、宅では最う四五日前から店立を食つてるやうな始末ではありますし、豈か那樣暢氣な事も致すまいと思つて、私も別段氣にも留めずに出してやりました所が昨晩歸らないものですから、今日吉川さんの下宿へ聞きに行つて見ますと、吉川さんも昨日出たつきり未だ歸らないと云ふ事で……其中に此手紙が屆いたので御座います。」

「ぢや吉川と一緒に出たんですね、淺草の四萬六千日へ行くつて。」

僕も這麼手紙を寄來した黑瀨の眞意を疑ひ出した。で、左に右く此文面中にある淺草の叔父——本當の叔父では無いが、幾らか黑瀨と血が續いて居るのださうだ——とかへ相談をし、且つ黑瀨の行先きの心當りも搜して、愈よ夫婦別れをするにしても、最う一度黑瀨に會ひ、僕等も其上で何とか御相談に乘らうと言つてやつた。而して餘計な事ではあつたが、黑瀨君も今のやうでは爲方があるまいから、何とか少し目の出るまで、暫く夫婦別れをなさるのも得策だらうと辭を添へた。

「御深切に有難う御座います。私も常の體では御座いませんし、恁うして餘り心配致すのも何うかと思ひますから、今度は能く一つ勘考して見ますで御座います。」と口では言つたが、餘り勘考しさうな樣子にも見えなかつた。

子まで出來た仲で、夫婦別れをしようの、何時か又會ふ時節が有らうのと云ふのにも拘はらず、細君の樣子は案外平氣なものだ。躍起となつて黑瀨の爲打を攻擊したり、眞面目になつて細君の處置に當惑した

りした僕の方が、却て照れ臭くなつた。

「それて、今も申上げます通り、大家からは然うして店立を食つて居ますし、宅ては何時歸るか分りませず、誠に私も困りまして御座いますが、今夜あの、少々ばかり……」と言出した細君の辭を、僕は遮るやうに、

「それは、お困りのほどはお察しします。けれど、今夜に今夜と云つては僕の方ても困りますから、何れ明日ても——手紙にも二人にとしてありますから、A君とも能く一つ相談して見ませう。それに手紙にも信うあるのてすから、貴方も一應其の淺草の叔父さんとかへ行つて見ては何うてす。」

「はい、私も然う思ひまして、今夜にも參つて見ようと思ふので御座いますが、何分にも遠方て御座いますから、少々あの、お錢を拜借したいと存じまして——」

「何うも今、僕も餘り都合が好くないのてすが……然し何のくらゐてす。」

「二十錢ばかりも、電車賃に。」

何の事だ、見せに來た手紙の文句が文句だし、それに細君の前口上が多いので、僕は甚麼補助を要求されるかと心密に恐れたのだ。僕は素直に五十錢持たして歸した。

それ限り細君も來ず、黑瀨の消息も分らぬので、二三日過ぎてから、僕は家の者に樣子を見にやつた。すると、今までの家は引拂つて了つて、つい二三町先の道具屋の二階とかへ、夫婦て間借りをして居たさうだ。那麼人騷がせの手紙を持ち廻らせて置きながら、黑瀨はA氏の所へも僕の所へも顏出し一とつしな

唯細君が那の晩淺草へ行くのに着る物が無くて、A氏の細君に單物と帯とを借りた、其れを返しに行つたが、其又着物が火熨一つ懸けては無く、クチャ〳〵にして持つて行つたとか云ふので、A氏の細君は慍つて居た。

て、僕の所から歸つた細君は、其夜直ぐにも淺草へ行くやうな口振だつたが、實は翌日の午過ぎに出掛けたのらしい。而して叔父の家へ行つて見ると、夫の黒瀬は一杯機嫌か何かでグー〳〵午寐をして居たさうだ。矢張吉川と二人で淺草の四萬六千日へ出掛けて、それから何所へか崩れた擧句が、金が足らなくて歸れなかつたのだ。

て、話は元へ還つて、例の吉川の脚本である。僕の所から持ち返つて、更にA氏の所へ見せに行つた所が、頭貶しに罵倒されて、而して文學など格に無いから諦めろとまで言はれたらしい。渠は能く〳〵心外だつたと見えて、歸りに冠つて居た帽子を賣つて、其れで酒を買つて、古道具屋の二階の黒瀬の所で盛んに飲んだものだ。二人の氣焔は然ぞ凄じかつたらうと思ひ遣られる。冷奴が何かを下物に午後の二時頃から夕方まで飲み續けて、ベロ〳〵に醉つた吉川は、何と思つたか、それから又僕の所へ廻つた。顔は眞赤で、面と向つて話をするのも堪へられないほど酒臭い。其癖醉つた振を見せまいと思つて、惡く固くなつて畏つて居る。

「何うも實に口惜しくつて、僕は今日のやうな恥辱を受けた事は有りません。僕は成程無名の一書生です、Aさんは立派な大家です、けれど、僕も多少の自信は持つて居ます、Aさんだけの年月を與へれば、僕だつて誓つてAさんだけの手腕と名勢とを贏ち得て見せます。文學なんか格に無い、電車の車掌になれとたる無禮な言てせう。僕も文學で身を立てようと思へばこそ、那樣言も恕して措くのですが、然も無かつは何たら打倒してやる所なんです。」と拳を固めて躍起となる。

「それほど腹が立つなら、何故其場で無禮を責めなかつたのだね。何も打倒すには當らないから、A君に謝罪させたら可かつたらうに。今になつて、蔭で慍つたつて爲方が無い。」

「けれど、面と向つてAさんと爭つた日には、僕は文學を捨てなけりや成りませんから――實に文學者間の交友と云ふものはコセ〳〵と神經質的て、實に厭なものですなあ。」と嘆息をする。僕も少し癪に障つて

「那樣思ひをさしてまて、君は何も厭な文學者と交友する必要は無いぢや無いか。君はA君と爭ふと文學を捨てなけりや成らんと言ふが、何故だらう。A君だけの年月を與へれば、僕だつて誓つて那れだけの名勢を贏ち得て見せると言つた、其通り君自ら信ずるだけの天分が有るなら、何も恥辱を忍んてまてA君に屈從して居る必要はあるまい。」

「ですが、Aさんは色々食ふ道を與へてくれますから。貴方などは我々後進に對しても、始終附かず放れずの態度を取つて居られるが、其所へ行くとAさんは機嫌買ひだけに、縦んば明日排斥されるか分らんまても、現在の今日は左に右く熱心に世話をしてくれます。」

「それなら爲方が無いぢや無いか。今日は排斥されても、明日は又A君の氣紛れな世話にならうと云ふ意りなら、多少の恥辱も忍ばねばなるまいし、又忍ぶ以上は、僕の所なぞへ來て那樣不平を言ふのは男らしく無い。」

吉川は默つて了つた。

「然し、餘計な忠告か知らないが、君も本當に文學で身を立てようと思ふなら、最つと眞面目に修養をして懸からなければ駄目だよ。此間の脚本なんか正直に評すると、全て物になつて居ないと云つて可い。那麼物を書いて好い氣になつて居ちや、到底も駄目だ。黑瀬なぞとデレ／＼遊び歩いて居る間に、些と本でも讀んで勉强したら可からう。」

今まで默つて俯いて居た渠は、此時ムクリと頭を擧げて、

「有難う、僕も勉强したい、修養は大事だと云ふ事も充分知つて居るので、誠に御尤もな御忠告て僕も感謝します、が現在の僕は餓えてるのです、勉强しろ、修養しろ、何をデレ／＼遊び歩いてるのだと言つて忠告して戴く間に、日に十錢でも二十錢でも、食ふ道を授けて戴いた方が、今の僕には一層有難いです。あゝ僕は活きたい、活きねばならない……」と言つて、出抜けに泣き出した。

酒を飮んだり、卑しい遊びをしたりして居ながら、さも生活の苦痛の骨身に徹してでも居るやうな言草だ。

「それぢや矢張格相應に、電車の車掌にでもなつたら可からう。」と僕は餘程言つてやらうかと思つたが、

醉つて居るからと思つて歇めた。

吉川は稍暫くの間手放してオイ／＼泣いて居たが、僕は馬鹿／＼しくて對手にもならなかつた。好い加減に泣きやんだ所で、下女を呼んで床を取らせて、玄關の脇に寐させてやつたが、倒れると直ぐ最う大鼾だ。

翌朝誰よりも眞先に起き出て、下女が朝飯を薦めたのも斷り、僕の目の覺めぬ中にコソ／＼と歸つて行つた。

それからパツタリ吉川は足踏みもしなかつたが、十日ばかり經つて國へ歸つたと云ふ噂を聞いた。國へ歸る二三日前、自分の雜誌社へ例の脚本を持つて行つて、A君やT君は面白く無いと言ふけれども、自分には慥に自信もあり、且つは處女作でもあるから、他日の紀念としても印刷にだけは附して置たい。六號活字でも可いから雜誌に載せてくれとの頼みだつたが、雜誌には餘り長過ぎるから斷つたと云ふ話を、後に編輯記者から聞いた。

河名のお半

眞山青果

私はこの二三年、七八の極暑時を房州内海の河名濱に避ける事として居る。宿は上總屋と云ふ、先づここらでの旅人宿。那古觀音の眞裏の邊にあたる。

河名は那古と船形の間の字である。多くは五十集屋だ、船大工も二三軒はある。蠅の多いと醬油の苦いのには閉口するけれど、長い馴染甲斐に無理も利くし、第一は諸色の廉いのに釣られて、今年もまたこゝへ來る事にした。

端書て振れて置いたゆゑ、部屋は矢張り去年の裏二階に取つた。木口の堅い、襖辷の好い、落付いた、昔建の家である。開前は直ぐ觀音山の懸崖、押覆さる青葉の根ッこから岩清水がタチ〳〵と滴つて居る。東を全るて塞がれて朝明は晩いが、その代り涼しさは無類、夕方などは浴衣に寒い位である。

女中は來るたび變つて居る。今年も來て見ると三人が三人新しい顏である。夏場は大抵四五人から居るのに、今年は女が拂底だと云ふて、宿の小さな娘どもまで客の座敷に出て居た。

客の種は八分まで學生である。

デップリ肥つたお神は、その肥り切つた軀を重さうに搬んで臺所番を一人で受持つて居る。朝起きるから諸肌拔て、始終ガブ〳〵と水ばかり飲つて居る。

今年も孕んで居るやうだ。去年も今頃腹が重かつた。

十三になるお市を頭に七人の母である。

去年の女中を聞くと、一人は千倉、一人は柏崎、中ではまア見られる方なる一人のお芳は、海を渡つて横須賀邊の茶屋奉公に流れたと云ふ。

「何うして然う變るんだらう、情夫でも拵へるのかな。」とお神に尋ると、

「なアにさ、男より何より、一ッ所に居たんでは金になんねえもン。親々も動くだけ動かして前借金伸す工夫するだアよ。」と云ふ。

「そんなにして居ては、最後には動けなくなるだらう。」

「そこは御方便なもンさ、何うにか振方が付いて行くもンだわてよ。」と別に何うも思つては居ない。

前借金と云つた所で高々二十か二十五、五十とまとまる女はまア少ないとの事である。

「然う〳〵、武田さんは家に居たお半知つて居たッぺ。」とお神は思出して云ふ。

「お半ッて、あの山猿だらう。」

「そのお半だアよ。那古の井筒屋に奉公してるから行つて見さッせい。そらア可笑しいとよ。」

「まだ小兒だぜ、十四か十五か、そんな位のもんだ。」

「まア行つて見さッせい。井筒屋の旦キも碁打つだから、碁打ちながら行つて見さッせいよさ。何んても餘程面白いッて評判だかアよ。」と齦を出して笑つて居る。

「俺だアも今日寺町の前でお半に逢つたよ。白粉付けてな、漁師の娘さんに負つて歩いて居たとアよ。」と傍に居たお市がぽうづき鳴らしながらこましやくれた口を出す。

「あれに錢出す客もあるかな。」一私も噴出したくなつた。

「井筒屋でも持餘して居ッとさ。何んぼ漁師だちだッてあの山猿ぢやなア些いと客があんめえよ。」

お半は去年までこゝの風呂炊して居た。外房州鴨川邊の潜水漁師の娘だ。自分も海女には馴れて居るさうだ。背のヅングリ低い、頸の無い、海豚のやうに目の飛んだ小女である。髮の毛は玉蜀黍のやうに赤く短く、傍へ寄るとプンと油腐つた臭がする。頰ッぺたが赤いのと好く他を引掻くので、皆が山猿〳〵と呼んで居た。

こゝへ來た當座、お半は顏も洗はないで朝の膳に坐つたものだと云ふ。お半の國では朔日十五日の外顏は洗はないんだとさなぞと、始終女中どもにからかはれて居た。初めは子守女に雇つたのだが、危なくて目が離せないとあつて、後では外廻りの荒仕事ばかりさせて置いた。當人も結句その方を喜んで居た。

お半は七圓幾らかの前借で雇れた。五月雨のビショ〳〵降る或る日、親父の漁師はこれに小風呂敷を背負せて、燒杉の下駄を穿かせて、仲立も無くぶッつけこゝの上總屋へ連れて來た。娘を雨落の軒に待たせて置いて、帳場の亭主へ前借の相談を持込んだ。こゝ一軒を見當に七里も歩いて來たのだと云ふ。親父は流網の受金十圓借りたいと云ふ、亭主は又お半を見て五圓より出せないと云ふ、二時間もかゝつて漸くそ

の七圓何がしかに折合つたのだ。お半はその間薄暗い板の間にコクリ〳〵の坐睡して居た。

朝の暗い中から、お半は裾をクルリと捲り上げて、一日徒足の儘て外ヶ掃いて居た。水を汲んだり、薪を砕いたり、皿小鉢の下洗ひ、風呂番、掃き掃除、些つとの閑も無く追使はれる。それでも當人は平氣、膝小僧まて皹裂を切らして働いて居る。

「お半、家へ歸りたいだらう。」と女中どもが聞いて見ても、

「厭だァよ、こゝに居る方好い。どさも行かねえ。」

「何が好いんだ、そんなにして居て。」

「お飯に不自由する事無えから、こゝに居た方が好い。」と云つた。

閑があると、好く物置前の日當りへ蓆を敷いて、足を投出し、聞覺えの流行唄を唄ひながら、皹の療治てある。烟草の吹殻を續飯に伸したのを貼り付ける。お半の踵には夏ても皹があつた。

何んとやらして、ヨイトサ、フイトサと云ふ唄を好く唄つた。

このお半が、白粉して客を呼ぶ井筒屋に奉公してると云ふ。是非一度は見たいと思つた。

土地駐在所は笠間と云ふ巡査てある。私とは鯊釣りの仲間て去年以來の知合てある。この男にそゝのかされて、一晩一所にその井筒屋へ出掛けた。

妙に書生振る事が好きな巡査て、何うかするとよく法律學生時代の話を持出す。怪しい俳句を作つたり

名刺にローマ字を刷込んだりして喜んで居る。夕方なぞは糊の強い白地の浴衣に天笠木綿の兵兒帶を結び、ハンチング帽に細身のステッキ、騎馬時計を脈所に卷付けて、小犬に口笛吹きながら長い田舍町をブラ〳〵するのが、當人にはこの上も無い見得でも伊達でゝあるのだ。

「お半、お前の惚れた人を連れて來た。」と笠間は臺所まで出かけ引張りかけたが、お半は何うしても縮んで出ない。

「厭だアよ、厭だアてば。」と云ふ聲がこゝまで聞える。お半の聲である。

「何故出て來ないんだ。」と丁度酒を搬んで來た、盤台面の髮の毛の薄すい女に聞くと、

「まだ酌婦の鑑札が下らないから、それて大方出ないんでせうよ。」とベタリと座つて酒の世話である。

「鑑札の心配なら笠間君だもの大丈夫ぢやないか。」

「では體裁が惡るいんでせうよ。だッて未だ年が行かないんですもの。」

「僕にかい。」と腹も立たない。

「ほ、垂れます〳〵。」女はバタ〳〵と椽を駈出して行つた。

「駄目だよ、君、何うしても出て來やがらない。」と笠間巡査はあぐね切つて戻つて來た。

「あれでも矢張り耻かしい位は知つて居ると見えますね。」

僕は餘り友達附合の口を利かれるのが厭さに、此方からは故と幾らか隔を置いて話す事にして居た。

隣室あたりでバタ〳〵と逃出す足音が聞える。追駈けて呼ぶのは今の前來て居た女である。

エヘ〳〵笑ひながら入つて來て、「さア武田さん、何か奢つて下さいな。半ちやんが目尻を下げてそこから貴方を窺見して居るぢやありませんか。よウ色男様」と頓狂な聲を出して僕を困らせた。

何時の間にか僕の名を覺えたものだ。

「お半がかい。」と笠間は先づ盃を女にくれた。

グッと飮んで返して、「好い人が見えて餘程嬉しいと見えて、半ちやん大夢中よ。皆に冷かされて眞赤になつて居るわ。」

「よし來た。」と笠間飛上つて外に駈出した。

女は僕を捉へて、あれのこれのと冷かす。お半が何か勘違えして居るに決つた。僕は腹が立つより寧そ氣持が惡るくなつて、何んと云はれても返事もしない。

「まア貴方、武田さん、半ちやんが居ないたッて何も然う氣を落すものぢやありませんよ。そのまたウブが身上なんてすッてさ。」なぞと未だやつて居る。

「馬鹿も大概にしろ。」

「あら私へトパッチリ、耐らないわねえ。」と何とも始末に行けぬ。

「剛情な女だ、駄目だ。」と笠間は幾らか憤り氣味で戻つて來た。

最少し〳〵と地揑る笠間を無理にすゝめて、僕等は勘定を取つてそこを出た。

下駄を穿く時、送り出して來た別の女中に、「あら半ちやん、隱れなくつても好いわ。」と聲掛けられて

お半は下足場の暗がりからバタ〳〵と座敷へ駈出して行つた。

その時チラと見た。潮染か何かの毒々しい色の浴衣をズル〳〵着て赤氣の帶を背負つたやうに高く結んて居た。花簪か何か挿して顔を眞白に塗つて居た。

僕はその後、成るべくその家の前を通らぬやうに氣を付けた。宿の娘や女中に聞くと、觀音樣の裏坂の上からこちを凝つと見て居たり、又小さな娘など捉へてはそれとなく僕の事など聞いて居たと云ふ。

旅商人でもあるらしい男と一緒に濱をブラ付いて居るのに一度邂逅した。何か話かけたい樣子だ。僕は睨付けてやつたら悄げ切つて行つた。そして後から見て居ると、途の半町とも行かない内にその男の肩に嚙り付いて切りとふざけて居た。

「山猿だ。」と僕は可笑しくてならなかつた。然し見たところ、色も蒼褪めて毛も抜け上つた。顋も大きく見えた。

舊暦の六月十五日は觀音樣のお籠日である。この日は三里四里も先きから參詣に出て來る。年寄は年寄、娘は娘と組を組んで、女が八分出る。一晩を山に籠つて、明日の朝は皆疲れた鈍るい顔して村々へ歸つて行く。

村の若衆も大氣込、出來るだけの用意して待受ける。踊り屋臺、俄芝居、連れ念佛、町内〳〵揃ひの浴衣に勢好い。、參詣の女どもは坂下から白地手拭を被つて、一人づゝ別れ〳〵に掛行燈の明るい坂を昇つて

行く。町でも堅い家の娘はこの晩は外に出さない事に決めて居る。

笠間巡査が違つて誘ふので、僕も一緒に出て見たが、狭い境内は居曲もならぬ程の人出である。石段の兩側は賣物屋のカンテラで咳ぶやうだ。近在近郷から出盛つた女どもは、赤い青い蹴出しを尻端折つて、グル／＼同じ所を往戻して居る。油と汗の臭が耐らない。派手な浴衣の若い衆はその間を縫つて、小唄か何かをそゝりながら、被つた白手拭の下からキョロ／＼女の顏を選んで歩いて居る。

堂裏の杉の木立の下を潜つた時、「何ぜうだね、この人。」と醉拂つた嚊衆に追駈られて逃出した。濟を涼んで旅宿へ歸らうと思ふと、玉樟の覆被さつた細横町の曲り角にお半が立つて居る。僕等を見付けて駈つて來た。

「旦那さん、俺だァ家さ歸られないだわで。」と眞から泣出しさうだ。

「何んだ。」と笠間は止つた。

「銀の指環持つて行かれたゞわでよ。野房の方の人だ。一寸借せッて自分の指さ篏めて何所か行つて了つたゞ。取返して下ッせいよ。俺だァお神さんに叱られるだかンよ。」

「見世へ來るお客か。」

「うゝん。」と頭を振つて居る。

「馬鹿、貴様が馬鹿だからだ。名も知らないんだらう。」

「あこの女坂の前から一緒になつた人だよ。」

「馬鹿な奴だ。未だお堂の邊に居るだらう、早く行つて探して見ろ。格にも無く男など探がすからなんだ。」と笠間はむごく叱り付けた。

「好いだわてよ、何んても。」と可笑しな目付を笠間に見せて、お堂の方へチョコ／＼走せて行つた。

「あれを見給へ。」と笠間はその後姿を見て笑つた。

旅宿へ歸つてこの話をすると、去年のお籠りの晩にもお牛は家を拔出して、ひどく手間を缺かせられた。今日の書入れ日にあれのやうな者でも飛出されては井筒屋が困つて居るだらうと、お神は笑ひながら話して居た。

それから後はお牛を見掛けなかつた。何んでも病氣にかゝつて寢て居ると云ふ話である。何れは親の毒も出たのだらう、見る影も無く痩せて、全るて拔けた頭に手拭を被つて蒲團に寢て居たと、見て來た人が話して居た。

八月の末、最う近々に歸京しやうと思つて居る或る日、宿の亭主が發起となつて、町内の誰彼が集つての碁會を開いた。

場所は井筒屋の裏二階。私も好きな道ゆゑ見物ながら出掛けた。

帳場に腰かけて、背の高い眇の漁士風な男が、汚れくたれた紺絣の着物の襟をはだけて、パフ／＼煙草を吹して居た。

私と一緒に行つた上總屋の亭主を見ると、裾を下ろして禮をした。
「お半は塩梅惡るいッてな、心配なことだッぺえ。」と亭主は聲掛けた。
「何ぜうにもはア、手のかゝる女で爲方がありませぬ。」とズブ〳〵煙を吹込んで居る。
「餘りしやぶり過ぎるからだよ。」
「なんのお前樣、そんな事ありませぬ。」と切りと辯解して居た。
碁を二三番打たところに女中が來て、今お半が親父と一緒に歸るところだから來て見ろと云ふ。
笠間と私と表二階の格子窓から見た。
親父は何所からか荷車を一臺引張つて來て、その上に井筒屋から惠まれた蒲團を敷いてある。垢光のする縛枕も梶の方に置いた。
「お半は何所だッけな。」と笠間は女に聞いた。
「鴨川ですッて、この暑いのに耐らないわ。」
「まア二晩泊りだな。」と笠間は云つた。
親父に負はれてお半が出て來た。流石に手拭に顏の半分を覆ふて、襟のかゝつた布子を素肌に着て細紐を締めて居た。外に小風呂敷が一つ。幾らも無いが、着物は前借のかたに取られたのだと云ふ。
途中の口慰に菓子か何かのハンケチ包みと、水を詰めたビール瓶を外の女中が持つて來て枕元にならべた。

「厭ァだな。」お半は荷車を見て避くる風であつたが、親父に叱付けられて海老のやうに足を丸るくその上に寢た。ふるい赤毛布がその上にかけられた。

「お半ちやん。」と私の傍の女中が二階から聲を掛けたが、お半は上を見上げる事もしなかつた。

「ぢや旦那樣、何うせ車返しに來ますかァ、そん時お禮に來ますだよ。」と親父は帳場に向いて諄々(くど〳〵)禮を云つて居た。

「氣を付けてお出よ。」

井筒屋のお神も下駄を穿掛けて門先きまで送り出した。(完)



新詩六篇

北原白秋

邪宗門秘曲

この一篇は『邪宗門新曲』と題する他の姉妹篇とともに、併せてわが詩集『邪宗門』の序詩也。

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、
色あかきびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる、
南蠻の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍酡の酒を。

眸青きドミニカびとは陀羅尼誦じ夢にも語る、
禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖磔、
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、
破羅葦僧の夢をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は
ぎやまんの壺に盛て夜となれば火點るといふ。
かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にまじり、
珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒艸の花よりしぼり、
腐れたる石の油に畫くてふ麻利耶の像よ、
はた羅甸波爾杜瓦爾らの横つづり青なる假名は
美くしきさいへ悲しき歡樂の音にかも滿つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の破天連尊者、
百年を刹那に縮め、血の磔背にし死すとも
惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅の夢、
善主磨、今日ぞ祈に身も靈も薫りこがるる。

魔國のたそがれ

うち曇る暗紅色の大き日の
魔法の國に病ましげの笑して入れば、
もの甘き驢馬の鳴く音にもよふされ、
このもかのもに惱ましき吐息ぞおこる。

そのかみの激しき夢や忍ぶらむ。
欝金の百合は血ににじむ眸をつぶり、
人間の聲して挑み、飛びかはし
鸚鵡の鳥はかなしげに翅ふるはす。

草も木もかの誘惑に化されつる
旅のわかうど、暮れゆけば心ひまなく
えもわかぬ毒の怨言になやまされ、
われと悲しき歡樂に怕れて顫ふ。

日は沈み、たそがれどきの空の色
青き魔藥の薫して古りつつゆけば、
ほのかにも誘はれきたる隊商の
鈴鳴る　：　あはれ今日もまた恐怖の豫報。

はとばかり默み戰くものの息。
色天鵝絨を擦るごとき裳裾のほかは
聲もなく甘く重たき霧の闇、
はやも王女の豫らすべき夜とこそなりぬ。

濁江の空

腐れたる林檎のごとき日のにほひ
圓らに、さあれ、光なく甘げに沈む。
晩春の濁重たき靄の內、
ただそことなく輕氣球くだるけはひす。

遠方の曇れる都市の塔の色
たゆげに仰ぐ人はいま鈍くもきかむ、
濁江のねぶたき、あるはやゝ赤き

にほひの空のいづれにか洩るる鐵の音。

なやましき、さは江の泥の沈澱より
あかるともなき灰紅の帆のふくらみに
傳へくる潜水夫が作業にか、
重たき吐息そこはかと水面に饐うる。

河岸になほ物見る子らはうづくまり、
はや倦ましげに人形をそが手に泣かす。
日暮どき、入日に濁る靄の内、
また、ふくらかに輕氣球くだるけはひす。

蜜の室

薄暮の潤みにごれる靄の内、
甘くも腐る百合の蜜、はた、靄ぼかし
色赤きいんくの壜のかたちして
ひそかに點る豆ランプ息づみ曇る。

「豐國」のぼやけし似顔生ぬるく、
曇硝子の窓のそと外光なやむ
ものの本、あるはちらばふ日のなげき、
暮れもなやめる靈の金字のにほひ。

接吻の長き甘さに倦きぬらむ。
そと手をほどき靄の内さぐる心地に、
色盲の瞳の女うらまどひ、
病めるペリガンいま遠き濕地になげく。

かかるときおぼめき摩るヸオロンの
なやみの絃の手觸のにほひの重さ。
鈍き毛の絨氈に甘き蜜の闇
重み饐ゑつつ――血のごともランプは消ゆる。

下枝のゆらぎ

日はさしぬ、白楊の梢に赤く、
さはあれど暮れ惑ふ下枝のゆらぎ……

水の面のやはらかきにほひの嘆
波もなき病ましさに靜みうつれる
晩春の窓あかき片側街よ、
暮れなやむ靄の内吹笛吹ける。

いづこにか、もの甘き蜂の巣のこゑ。
幼子のむれはまた吹笛鳴らし、
白楊の岸にそひ、曇り黄ばめる
教會の硝子窓ながめてくだる。

日はのこる、兩側の梢にあかく、
さはあれど暮れ惑ふ下枝のゆらぎ……

いましまた公園の長椅子にもたれ、
かなたには戀慕びと苦惱に抱く。
そのかげをのどやかに赤子飼ひいて
鵞の鳥をとらむとて岸より落ちぬ。

水面なるひと騷擾、さあれ、このとき
驀然に急ぎくる一列の郵便馬車よ、
薄闇ににほひゆくあかき曇の
快さ、人はたゞ街をばながむ。

灯點る、さあれなほ梢はにほひ、
全くいま暮れはてし下枝のゆらぎ……

吊橋のにほひ

夏の日の激しき光、
噴きいづる眞白き雲に照りうかび、
雲は熔けてひたおもて大河すぢに射かへせば
見よ、眩暈く水の面、波も眞白に
聲もなき潮のさしひき。
そがうへに懸る吊橋。
煤けたる黝の鐵の桁構。

半月形の幾圓み絶えつつ續くかげになほ
薄らに青む水の色、曇る柱の
古煉瓦映ろひ、さてはたゆたひぬ。

眞白なる光のなかに、
そろひゆく櫂のなげききらきらと、
あるひはほのの水鳥のそことしもなき音のうれひ
河岸の氷室の壁もはたただに眞晝の
白蠟の炎の沈默。

かくてただ惱む吊橋、
なべてみな眞白き水の面、はた、光、
ただにたゆたふ眩暈の、恐怖の、仄の哀愁の
白き眞晝に、色重き鐵のにほひぞ
欝憂に吊られ、壓さるる。

鋼鐵のにほひに噎び、
絶えずまた直裸なる男の子
眞白に光り、ひとならび、力あふるる面して
柵の上より躍り入る、水の飛沫や
眞白にぞ光りかがやく。

眞白なる眞夏の眞晝。
汗滴るしとどの熱に薄曇り、
暈みて歎く吊橋のにほひ目當にたぎち來る
小蒸汽船の灰白き鈍き唸や、
日は光り、烟うづまく。

さすらひ數篇

三木露風

故郷

あくがれまどひ、何處にか
はた故郷を我れは見む。
海超え、今も求め來ぬる
山の夕に我れは泣く。

木葉と旅人と

「その亡骸を通夜せむ」と
他國の森の夕暮れに
木の葉ら歌ひつぶやきぬ。
蒼ざめにたる旅人の
悲しき面を熟視めつゝ。

わが世のはての

夕となれば我れ思ふ
わが世の果ての海原の
浪の穗に泣く我聲を。

風ぞ行く

風ひとり
歔欷りつゝ
遠國の
果を行く。

さすらひや
その果ての
海原に
蒼白み
かゞやける
寒き星。

そを戀ひて
ああ獨り
ああ獨り
風ぞ行く。——

夕の谿

暗き緑に片照りて
夕暮れ、月ぞ泣きそぼつ。
夕の谿の靜けさは
木立のひまの薄明に
鳥も啼く音をひそめたり。

空腹

吉野臥城

卯の花くだし、幾日の
日の光見ぬ陰濕に、
生命の糧を奪はれて、
衰弱の身を横へし
夜なりき。――それより木賃宿
四壁の闇ぞ壓し來る。

餓えし腹はぐくと鳴り、
喉の唾の舌絡み、
夢結ばれぬ寐苦しさ。――
あゝ寐苦しさ、身動げば、
力なき胸へとへとと、
息ぎれのする堪へ難さ。

あゝ堪へ難さ、仰向きて、
双手を胸の上におき、
眼をつぶれば、おそろしき
幽鬼の群は行き通ひ、
眼を開けば、敏感の
鼻に物の香戲れ來る。

かかる一時、いと猛に
食慾の唾ほどばしり、
腹はさながら百雷の
音の轟き、――へとへとと
胸は喘ぎて、くらくらと
弱き頭腦やめくるめく。

恁くてぞ生や絶えぬると、
眼を瞑りて靜に待つ
刹那、冷たき風入りて、
頭腦の熱の去るここち。――

我は在りけり、身動げば、
蚤か、瘦せたる脛を螫す。

じめじめ濕める古疊、
その上に敷ける古綿の
凝りに脊柱や、肩骨の
うづく痛、痛。——横臥せば、
削る痛みの肋骨、
虱か臍のむづ痒さ。

あゝ堪へ難さ、仰向きて、
蒲團に顏し埋むれば、
幾ひとびとの垢染める
襟の異臭は、岑々と
鼻の底より腦に泌み、
屢時は夢に目くるめく。

あゝ寐苦しさ、身動げば、
蚤ひたひたと脛に跳び、
項さらさら行く虱。——
身の苦しさに食慾は
頓に退きぬ。しかはあれ、
雜魚寐の鼾聲更けまさる。

數の鼾聲は高低く、
暗き四壁に鳴り響き
耳を穿つに、物凄き
齒ぎり、魔され寐ぼけ聲、
わが神經の末梢を
脅かしつつ襲ひ來る。

かくて二時半。——褥つづき
隣の夫婦覺めけらし、
甘き私語べちやべちやと
雀の來鳴くさながらに、
耳に喧し。——さる程に、

早立の猿曳立ちぬ。
騒ぐ物音一しきり、
雀すなはち鳴き鎮め、
四壁の静寂——ことことと
さ走る鼠、——稍しばし、
簷の塒の雛は
聲を絞りて高鳴けり。

あゝ寐苦しさ、寐返りて、
枕を額に俯伏せば、
餓えし腹はぐゝと鳴り、
胸へとへとと肉落ちぬ。——
あゝ衰弱の眠らえず、
得意の昨日ひた思へば、
物悲しさに涙流るる。

渦

山本露葉

死魚の眼と水銹びて
ふつと鳴る渦の輪

かげる日は鈍むに
のびてゆくその輪よ

吐息する刻々
脈めきてふくだむ

爛れたる眞中に
ふと淀むさやらか

凋みゆくその音は
げに生のなきがら

ひとつらに喘げる泡を見よその輪も

和歌　柴舟選

淺野白汀

○

やすらけき眠のあとの醒めごゝろ胸に覺えぬ別れし日より
わがまへに鳥はくれども噤みたる嘴をひらかぬうらさびしさよ
わが胸は南の國の岸なればひねもすながるあたゝかき潮
おとろへて痩せたる君が肩をだにひたすらたのむわれとなりにき
蘆枯るゝ日より夕は白鷺のこゝろとなりてものおもひてき
かなしみのうれしさ來りうれしさのかなしみきたり胸は悶えぬ
幸ありと今日もうたひて鳥ゆきぬ日のあかみゆく大空のもと
あさましうとらへられけりわが心おぼえなきまで醉ひはてしとき
われ繞るあまたの人はみな同じ胸にあらずと知るさびしさよ
かたはらに小女のあるを市ゆくに誇としたる日もありしかな
さばかりに疎みし君の顔さへもなつかしまるゝ日となりにけり
ものいはぬ日のおほければ一言を忘れぬまでにわが覺えぬる

梶原重雄

○

曲るべき道をまがらず直くゆくわれ捨てし子の事のみ思ひ
うごかむとするものゝかげ先づわれが心にうつる夜のしづけさよ
疲れたる心にいよる野の石に君がみ胸の冷さをみる
われねむる離れ小島のあらいそに羽根折れて死ぬ鳥を思ひて
水無月の播摩の小野は水に咲くしろき花より夕かぜ

ぞふく

あやまたず巣に海鳥は歸れどもあまりにかなし靑き空ゆく

ふるさとの一本野木に耳をあて母ありし世のもの聲をきく

○ 關本梁村

大いなる希望とちさき苦しみにけものゝ如くうめきつゝ居ぬ

いたづらに一日一日をすぎてゆくわれには價てふもののなし

ちひさなるうれひの前にわがわかきよろこびどもはうちさわぎけり

いたづらに暮れてゆく日を顧みてまたさびしさに涙ながしぬ

いつはりの世にあきはてぬされどなほ死に得ず日々の悲しみに泣く

地の香に小草いきれて風もなきまひるのやうに心うんじぬ

○ 松本白衣

海と空無窮の蒼きそが中にわれ復活のよろこびをよぶ

蝸牛小さき角をおづおづともたげぬしばし靜かなる今

あゝ老樹枝うなだれて若き木の林のなかにあざまれてあり

事もなう涙ぞおつる夕磯にむなしき貝の殼見てしより

○ 篠原靜風

この黑き森はいづこにつゞけるや果知るわれに媚びて問へかし

白楊つゞける道をけふもまたわかき男はうなだれてゆく

おとろへをかこつ涙かさな泣きそうたひつゞけむ昨(きそ)夜のおもひを

あゝついにはての日今しちかづきぬほしいまゝにもこの世わらはむ

○ 佐藤琢琅

眠るとき明日を思はず死するとき來世を想ふことありや君

夏草の靑きが中にひとりなる白衣の君を見る凉しさや

月光はさめたる色ししら〴〵と野を照らすなり水無

月の朝

○ 太田生麥

安からず思はしむべき雲ありと空仰ぎ得ずうなだれて居り

戀さめし理智の一ときわが爲のわが魂ならぬ淋しさおもふ

○ 野の花

天みると云ふにひとしき喜びのその上の日を君にききかまし

そよとだに風なき晝を煉獄のひゞきほのして罌粟の花ちる

○ 川波まつ子

會ふ人もあふ人もまた異なれる面して行くをさびしと思ひぬ

遠雷の響はやみて樹々の葉の動かぬひまを蟬いたくなく

○ 井淵みたま

つくづくとものをおもひてわれとわが熱き涙に驚く夜かな

われたちて想にふける岩が根にのみしくだくと人はつどひぬ

○ 大津照水

よき人の歩みにそへて新箒疊の青を今すべり行く

思出の小さき幻我胸にむらがりて來ぬたわらはのごと

○ 那須行春

なにとなく涙流るあけがたの野に消えのこる火のさびしきに

○ 立光波帆

ありし日のごと若かへりし喜びを迎へむとして酒を呼ぶかな



二百十日

船主の田主訪ふ二百十日かな 石鐘

二百十日降らば金降る朝曇 同

耳鳴に山鳴る二百九日盡 同

二百十日船頭が空を見て語る　同
二百十日ダヾ泣き鳴子チレ案山子　同
大凪の二百十日や不時祭　同
裂け切れし芭蕉や二百九日盡　同
陣屍の動き出づ二百十日かな　同
二百十日畑見に犬と出たりけり　同
宿の前二百十日を流人行く　同
畔黍に刈及ばず二百九日盡　同
二百十日無事やと母の知らせけり　同
人寄れば二百十日の話かな　蛙聲
門を出て二百十日の稻を見る　淺牛
枝折れの梨もぐ二百十日かな　寒山老
芭蕉葉や二百十日の雨蛙　紅鬼
朝顔の二百十日を咲きにけり　春波
十反の田を有ち二百十日かな　益郎
二百十日過ぎて前山雲去來　哲郎
酒くむや二百十日の宵の月　金陽
太平の二百十日や稻の露　仙舟
骨が鳴る二百十日の障子かな　春濤
地震ふて風やむ二百十日かな　吼天
鷄頭に風死す二百十日かな　火箭

船持の田持の二百十日かな　象骨
牛走る二百十日の牧場かな　十七公
冲の雲亂るゝ二百十日かな　木瓜
舊き日記繰り見る二百十日哉　錦紗
吹きはるゝ二百十日の夕べかな　姑洗
寢てくらす二百十日の漁村かな　松碧
玉萩や二百十日を散りつくす　盛花
白々と二百十日の夜明かな　鯨舟
夜に入りて海鳴る二百十日かな　六絲
照降の半時二百十日かな　葵雨城
朝晴れを鵙鳴く二百十日かな　青葵郎
千町田や二百十日の稻の波　桃紅
芋煮るや二百十日の厄落し　伍平
縣吏來て稻見る二百十日かな　沐雨
農村も漁村も二百十日かな　小魚
日本晴二百十日の和風かな　尺水
神棚に灯ともす二百十日かな　陽雪庵
氏神や二百十日を村の人　同
鵙鳴くや二百十日の大榎　保葵子
背戸口や二百十日の鷄暮るゝ　同
茄子ひく二百十日の畑かな　梁村

人も無き二百十日の茶店かな　梁村
恙なき二百十日や古米干す　刀川
荒れやんで二百十日の夕日かな　同
出穂見ゆる二百十日の門田かな　麥村
灯を消して二百十日の早寢かな　同
裏山や二百十日の烏鳴く　槐山
夜明から雨降る二百十日かな　同
二百十日假日和となりにけり　朝影
泥鰌とる二百十日の小川かな　同
旅僧の菅笠二百十日かな　同
窓に見る二百十日の田の面かな　抱虎兒
犬蓼の葉は黄に二百十日かな　同
昨夜からの風暴れ二百十日かな　同
風車ある諏訪田の二百十日かな　兎魄
二百十日小作難儀を落首かな　同
寢藁飛ぶ馬にも二百十日かな　同
人買ふて二百十日を船去りぬ　胡角
米搗いて二百十日の事も無し　同
ドンタクの二百十日やホ句作る　同
酉東二百十日の雲も無し　秋灣
風祭二百十日の雨となる　同

海鳴りや二百十日の船かゝり　同
二百十日南瓜に雨のたゝき降る　小蔭
二百十日雲の去來の不安かな　同
小雨降る二百十日や藁仕事　同
龍呼ぶ雲虎誘ふ風二百十日かな　同
草の戸や二百十日の虫の聲　玉雪
田を休む二百十日や神詣で　同
人淋し二百十日の濱やじろ　同
起きぬけや二百十日の天を見る　同
篝木に二百十日の雨はれぬ　烏城
旅にして二百十日の泊りかな　同
燒米や二百十日も穏やかに　同
隱居屋へ寢に行く二百十日哉　同
冲曇り山晴れ二百十日かな　天睡郎
松前の船來し二百十日かな　同
にえきらぬ日和も十日厄日かな　同
凪ぎすぎて二百十日のうそ心　同
心細う二百十日の夜を寢たり　麥花
二百十日豊年太皷ならしけり　同
黍の根はあがりて二百十日哉　同
風穴に神寢て二百十日かな　同

氣壯んに二百十日の登山かな　濠雨
朝のほど蟬なく二百十日かな　同
島に寢て二百十日の里戀し　同
蝸牛の家飛ぶ二百十日かな　同
天の川二百十日の夜空かな　秋紅蓼
人の貌淋しき二百十日かな　同
浦波や二百十日のかゝり舟　同
晝の月二百十日の野面哉　同
蔦ないて二百十日の明けにけり　青城
五風十雨二百十日も無かりけり　同
黍切つて二百十日の嵐かな　同
ぶら下る絲瓜も二百十日かな　同
此村の二百十日や砂糖柿　同
萩くゝる二百十日の垣根かな　碧雲居
二百十日寺領の痩田見舞ひけり　同
茄子冬瓜二百十日の畠かな　同
二百十日過ぎて今日吹く嵐かな　同
とりつくす二百十日の茄子かな　同
穗に出でゝ二百十日の芒かな　同
明日となる二百十日や麻を刈る　同
下風も二百十日や萩の花　同
野鍛冶が戸二百十日を閉しけり　同
粟畑の案山子も二百十日かな　同

本號應募者は總て六十九名、句數千二百三十七句、前號に比して句も揃はざりしは遺憾なり。應募句數の多かりしは石鼎氏の五十句を筆頭として、蓼花の四十九句烏城氏の四十句にして、三十句以上なりしは玉響、梁村、碧雲居、木瓜、蓼村、六絲、癸雨城、伍平の八氏なりき。

募集課題
紫苑　九月十五日締切
蛇入穴　十月十五日締切

應募俳句は本月に限り本郷駒込四片町反省社宛の事

募集期日に遲れたる應募句中なほ編輯締切に間に合ひたるもののうちより

城を燒く二百十日の夜空かな　鬼洗
軍をやる二百十日の風雨かな　同
吹かれ飛ぶとんぼの二百十日哉　同
二百十日事なき柵のかぼちやかな　同
見に行くや二百十日の難破船　樟峰
芒原二百十日の月を吐く　同
祝ひ來る二百十日の樋守かな　三命
頻り鳴る二百十日の鳴子かな　太郎

出てし穗の出づる穗の風厄日かな　同
花まだき二百十日の紫苑かな　同
凪ぎたりと二百十日の濱に出づ　布哇　曲肱郎
糸瓜一つ二百十日の垣根かな　同
いやつのる阿蘇の火二百十日哉　南條生

社告

選者大谷繞石氏今般金澤に赴任せらるゝ事となりたれば、此れ迄て應募期日た後くれたる者にても編輯〆切に間に合ひたる分は採錄せられたれども、今後は應募期日に後れたる者は斷然採らざる事となりたり投稿者諸君豫め諒察を乞ふ。



中學の漢文科は何の要ぞ

「近著中學研究を讀みて」

默笑子

中學に漢文科を設くるはその主旨那邊にありや、敢て之を以て德性の涵養に資せんが爲なりといふか、然らば唯これ修身科の唯一補助敎科に過ぎざることとなる、補助敎科惡からずとせず、然れども一國敎育の方針にして苟も智德育の上に存すとせんか、個々介立して床上に散布せられたる粟粒の如きことあるべからず、必ずや、左に顧み右に眄み、前に提げ後に攜へて常に相併行せざるべからず、相關渉せざるべからず、

然らば地理、歴史、理化、博物、英語、習字の凡てより、其親疎遐邇の差こそはあるべけれ。孰れかそれ互に補助教科たらざるべき、而かも品性修養に資すべきもの獨り支那の典籍に限るとするは陋なり固より頑なり迷なり、英、佛、獨、伊、又各英、佛、獨、伊の優秀なる思想に伴ひ、別に各々優秀なる聖者を有す、賢人を有す、若しそれ古聖古賢の言行は長へに吾人の骨髓に沁してその品性に潤澤を與ふるものといふか、同じ意味に於て、英、佛、獨、伊、その他孰れといはず、孔孟のそれに匹敵するか、若くはそれ以上のものを求めてその遺教を味はしむべきに於てをや、求めなば與へらるべし、豈獨り孔孟を除いて天下に聖賢なかりしと云ふを得べきぞ、孔孟は支那人なり、東洋人なり、吾人に最も親き人種なるが故に亦その遺教も吾人に最も親きものなりといふか、將た親かるべき筈なりといふか、時潮に覺めたる眼よりして見ればそは唯机上の造論に止まる、此意味を以て予は中學の漢文科を以て敢て生徒の品性修養に資せんとするの論者に與する能はず、否

更にその何の所以たるかを怪む、されどそれは擱く、吾人の更に知らんと欲するところは、文部當局者の眞意直に那邊に存するか否か之なり、之を問ふに先つて吾人をして先づ疑はしめよ、漢字廢止論若くは漢字縮少論等のそれはあれど、二千有餘年傳來の久しき、今日の國語に混在して容易に淘汰せらるべくもあらず、せらるべくもあらざるに於て日常文書、新聞雜誌の世界よりも亦容易に除却せらるべくもあらず、茲に於てか漢字を敎ふるの要ありといふか、之は一理なり、されど漢字を敎ふるの要は必ずしも漢文を敎ふるの要とはならず、漢文を敎ふるの要は然らば又別に存せざるべからず、然り、有り、何といふとも漢文趣味の長く我國に浸潤したる、大小の典籍その過半は從來漢文によつて物せられざるはあらず、特にその思想の上に於て我々支那とは宗支の關係あり即ち輔車の關係なり、我を知るには彼を窮めざるべからず、此に於てか漢文は修められざるべからずといふか、是れ首肯くべきが如くにして實は容易に首肯き得べからず、支那と日本

とは兎にも角にも同文字なり、故に飜譯の爲し易きは西洋のそれに優ること萬々なるに於て、而して實際斯學の專門家が續々としてそれ等を飜譯し紹介すべきに於て、何を苦んでか獨り吃々として多數國民が一々それ等の修得に腐心すべき、若し中學の漢文科設置がその主旨單に此處に止まるとせば吾人は何の要ありて財政困難の現下の我國が、敢て中學に漢文敎員なるものを雇ふて多大の俸給を與ふるの費を盡すかを怪む、然らば汝は敢て漢文科を必要ならずといふかと、斯の如きの疑問を提出するものあらんか、予は斷じて否と答へん、日本は新興の雄邦にして未來に益々發展すべきものなりと妬まる、而かもその發展の方向は近く何處にありとせらるゝぞ、又實際に於て何處にありとするぞ、吾人は平和の國民なり平和を愛するの國民なり、已むを得ずんば腰下の秋水時に醜虜の頭に加はることあるべしとはいへ、平素は極めて平和を愛好するの國民なり、故に必ずしも干戈の上に說をなすにはあらずといへ、猶ほその平和的發展に於て、即ち商業的の發展に於て淸國や先づ我衝に當らざるべからず、之を第一として次には淸の國勢は今我國に賴むところ多し、男子腕を扼して鬱勃の氣を貯ひ、之を放つて自ら快を貪はんとするものは支那こそその絕好の舞臺なるべけれ、比年渡航者の數を增すもの明にその實を證す大國民には大膨脹なかるべからず、而してその大膨脹を試むべきの地は先づ支那に於てすべきにあらずや、商業者は行け、政治家は行け、工業家は行け、學者は行け、而して敎育者、而して宗敎者、皆行け!、一國の氣運は刻下正に此の如くに迫られつゝあるにあらずや、それ然り、吾人は今日の支那より直接に智識を修得するの必要あるものにあらずと雖も、而かも如上の關係あるに於ては、漢文の修得亦是れ無用なりとせんや、然り、故に我國現下の中學の漢文科にして、能く此精神に副ひ得るものなりとせんか、吾人何を以て文部當局者の眞意那邊に存せりや否やなどと、今更事々しくも問ふを要せん、只それ然らず、此に於てか問も亦已むべからざるなり、我國の歷史に於て最も長き漢

文とはいふものから、その教授の實際は如何、完全なる文法書少く、有るも都下は暫く擱く、地方の教員に在つては憒々として多くは之に通ぜず、通ぜざるが故に教へず、偶々心利きたる生徒の焉哉乎也の拔かし讀に不審を挾むものあれば、そは置字なりの一解にて平然たるもの滔々として俗を成す、是れその一大弊なり又怪むべきはその讀方にあり、英語獨語といはず、一切の外國語は今日盡く直讀をなし、唯便宜上譯讀の時にのみ、我國從來の語勢を追ふて轉倒し錯綜して讀むことをなせど獨り漢文に於ては此轉倒し錯綜する讀方、即ち訓讀を以て普通となし、直讀を以て却て坊主讀みとし御經讀とし、嘲らざるまでも奇異の感をなすを常とするは、心あるものをして却つてこれこそ甚だ奇異の感を抱かしむるものあるべけれ、訓讀は調法なるには相違なけれど、此の如くんば能く學生をしてその文字の位置、排字の性質によりて意義若くは情趣の微細に變化するの跡を伺ひ得しむべからず、焉哉乎也を置字として讀めば兎にも角にも讀み得べきも、而かも之を以て原文の眞義を精細に味はんことは究竟不可能の事に屬す、中學にては白文を教ふ、之れ無きに優る萬々なりとはいへども、而かもその讀方の直讀に出らざる以上は決してその効果の良善なるを期すべからず。

當局者にして敢て此科を以て他の補助教科となすの思を圖るに止まらば已みなん、然らずして見る事猶ほ一種の語學となすものならんか、吾人は何が故にその教授法の全然英語その他の國語と等うせられざるかを咎む、生漢學通には往々にして漢詩を訓讀しながら、而かも直に西詩とその音韻の如何を長短するさへありとも聞く、實に沙汰の限といふべし、若し中學校にしてその目的決して專門家を養成する機關にあらず、而かも只公人として當世に活躍するの人物を作らんとするに在らんか、吾人は進んで支那時文の一斑を教へ、少くも支那新聞支那雜誌によりて直に彼の情勢を知り、それを膝上に載せて破顔快談するの度にまで進めたしと思ふ、而かもそは吾人の圓滿なる希望なり、古文猶ほ能く今日の支那に趣いて直にその用を辨ずべきに於

て、我國に行はるゝ今日の漢文にてもその教授の方法だに完全ならば、有爲の青年を黄龍の旗翩飜たる彼岸の天地に活躍せしむるには大益あるべし、而して又別に志あり、更に時文を學ばんと欲するものにも、その與ふるところの裨補蓋し尠少ならざるものあらん、當局者の所見その何處にありやを知らざれども、忌憚なく吾人の所見を披瀝すれば明に右の如し、近著山本良吉氏の『中學研究』なる一書を讀み、感發せらるゝところありて敢て此一文を草す。

三面記事の改良

野　逸　道　人

新聞の三面記事はいふまでもなく、日々社會に生ずる諸般の出來事を忠實に報告するの役目を勤むるものに相違ない。處が近頃の所謂三面記事なるものは決してさうでない。只々讀者を面白がらせるのが其目的でウソでもかまはうがあるまいが一向にお構ひなしといふ風である。誠に困つた事である。

此間も某新聞に大袈裟な見出しの艶種が載て居た。其れて見ると其艶種の主人公は世にも稀なる素敵な美人で、一目見ると何人でもゾッとせずに居られぬ程の代物らしい。僕は好奇心に驅られて友人某氏と此美人を見に出掛けた。處が書いてある事とは違ふも違ふ大違ひ。てんでお話にならないやうな不別嬪で殆んど開いた口が塞がらぬ程の目に逢つた。恥を言はれば理が聞えぬからこんな懺悔話もするのであるが、僕等と全じ目に逢はされるものも決して少くあるまいと思ふ。イヤ僕等のは一時の浮氣心を挫かれた位の事だから何でもないが、もつと〳〵酷い目に逢はされる人はいくらもあるだらうと思ふ。極めて小さな事を大袈裟に書かれたり又は全く根も葉もない事を担れ上げて拵へられたり、飛んでもない一生の不幸を來す人もあらうし、或は其爲めに生命さへも捨てればならぬやうな羽目に陷るものもあらうと思ふ。只世間の人を面白がらせるといへば極めて罪のない、寧ろドシ〳〵進んでやるべき事のやうにも聞えるが、人は概れ他人の善事よりも惡事を聞くを喜ぶもの、世間の人を喜ばす記事の裏には必らず幾多の涙に沈む犠牲者の存することを忘れてはならぬ。千人の卑むべき好奇心に媚びんが爲めに一人の憐むべき人間を苦しむることは涙あるものゝ爲すに忍びざる事である。今の三面記事を見れば心中でもした女は必らず美人で、男は必らず美男であるやうに書いてある。又何か一寸とした種があるとウソと知りつゝ尾を附け鰭をつけいゝ加減に誤魔化して置くやうな事もしかれない模樣である。誠に言語同斷の事といはればならぬ。

以上は單に書かれた方の迷惑の上から立論したものであるが、暫く方の新聞紙自身からいつても餘り喜ぶべき事ではないだらうと思ふ。何故

なれば、書く事も書く事も皆信用ならぬ事が追々と世間に弘まれば新聞は當てにならぬといふので何人も其記事に興味を感せぬやうになるからである。興味は常に眞實を離るゝ事を許されぬ。虚僞の事には人は笑ひもしなければ泣くもしない。殊に無教育の社會になると此點は一層甚しい。彼等が芝居を見たり講談を聞いたりして面白がるのは寸分違はぬ此通りの事が世の中にあつたのだと信ずるからである。若し作者が世態人情を知らする爲めに作つたものだと話したら彼等は一半の興味を失ふて了ふに違ひない。今日どの新聞も三面記事に重きを置き三面記事を面白くして數に於て最も多き下層社會の讀者を得やうとするのは商賣上尤もの事であるが、然し彼等下層社會が三面記事に虚つぱしが多いと氣がついた時は、大いに彼等の人望を失はねばならぬ事を覺悟して居ればならぬ。

かく論じ來れば三面記事を今少し眞面目に忠實に書くべき必要のある事が分るだらと思ふ。凡て誇張とか、虚僞とか、揑造とかいふ事は如何なる方面に於ても充分に謹むべき事である。況してや眞實を傳へ、眞相を報ずることを其任務とする三面記事に於ては謹みの上にも謹を加へざるべからざるはいふまでもあるまい。玆に此小論文のある所以である。



存友帖

戸川殘花

高野孟矩氏が云々の事件で拘引せられた、新聞報がある、僕は高野氏に逢ふた事もなければ其友人らしい人も知らないが、驚いた。眞僞や曲直は分らぬが、世の中がコウ云ふ鹽梅になると、向ふ三軒兩隣誰に交はるにも警戒の念をゆるめてはならぬ、人を見たら泥坊と思へと云ッた古諺も中々に棄られない、世は澆季と云はねばならない、ソウデハ無いか！　然し僕は一ッ鍋を突ついた友人は棄てられない、氣狂になッたからッて女房は女房、馬鹿だからッて子は子である（僕の女

房は氣狂ひてはない、子供もカラ馬鹿てはないが）友人が境遇や事情や失策やて世から捨てられたとて交はられずには居られない。

海舟先生には亡友帖がある、僕には存友帖がある、(亡友もあるが)だが帖中に洩れたからッて怒ッてはいけない以下次號と思ッて與れ給へ。(載せたからッて餘り光榮てもあるまいからね。)

○武田信賢　醉霞、杏青の號あり、尾張の人、掃苔會員にて古墓探究に大熱心、餘暇には連俳、長唄、一中ぶしに遊ぶ、洒々落々古仙の風あり。

○岡野知十　敬胤は名なり、江戸ッ子なり俳諧は云はずもがな、昔は居を移すこと頻なりき、今は湯島梅園町に蕭洒たる一居を設けられ、市隱の趣きあり恐らく明治の普子とは此君なる可し、清初の詩を好まる、其の書また一種の氣韻あり、令閨また英語に割烹に茶に花に堪能なり、大雅の夫婦を忍ばしむ。

○押川方義　君は松山の人、基督教の耆宿なりき、今は社會事業に奔走せらる、同人曰く君若し軍人となりしならば今や大將の地位にあらんと。

秋水蘆花一片明、雖下同二鷹隼一共上二功名一、
橋邊飽飯垂レ頭睡、也似英雄髀肉生、

曾て外人より一年數万金を給與せんと請ふ、君斥ぞけて省みず、君は天外の猛鷲なる哉！

○松村介石　明石の人容膝堂と號す、容膝は君の理想なり、世人は君を豪放と云ふ、實は細心の君子なり此の濁世に出沒して秋毫も財利爵祿の爲に衣袂を穢せしことなし、聲大と雖も同情の念に厚く、禮容に乏しと雖も、信神敬天の心を失せず。

雲はみな拂ひはてたる秋風を
　松に殘して月を見るかな

○成瀬仁藏　長州の人日本女子大學校に長たることは邦人の知る所なり、恐らくは外人も識る所なる可し余生れて五十四歳なれど、君の如き奮闘的の人に接せず、實に君は君の理想の權化なり。

一身轉戰三千里、一劒曾當百萬師

恐らくは教育界中に於て第一位を占むる忠誠の人なる

可し。

○巖本善治　出石の人如雲と號す、女子大學を以て女學界の一期限と爲さば、明治女學校も亦た一大期限を作りしなり、當年の女學校、女學雜誌は實に都門の子女を風化せり、又女子教育のみならず、文藝に貢獻せし事尠少ならず、藤村、透谷、天知、花圃、一葉、鴎村の諸君も君と親交ありき。天知君の「文學界」連は直接間接に君と交はりしなりき。君今世波滔々の中に在り。

好是日斜風定後、半江紅樹賣鱸魚」

○島田三郎　江戸ッ子なり、島山、沼南の號は云はずとも人知る、君は實に篤行の政論家、懸河の辯士なり、また君の如き平民的の人はなし、君の眼中には大臣も書生も其の新聞社員も一樣の觀なるが如し、君は基督教會に屬せしことあれども其人格は孔子の教徒なり。

六二、直方大不レ習无レ不レ利

○鳥居嘉三郎　君は京都盲啞院長なりき、今は健康を失し顧問の地位にあれども、君の如き正直の人は稀有なり、寢ても盲啞院のみ、覺ても盲啞院のみ、一家靄々然しして春の如し、黄金も心を動かさず、白刄も恐ゝ所に非ず、君は獻身的の事業家否模範的校長なり。

○戸田欽堂　江戸ッ子、舊名は三郎四郎と稱す、今の式部長官戸田伯爵の實兄なりき、君今は白玉樓中の人なりと雖も、夜雨燈前君を思ふ時は、彷彿として其聲容に對する感あり「つく〲と春のながめの淋しきをしのぶに傳ふ軒の玉水」君は綱上を躍る、詩を作る小説を試む、十字屋發賣の紙腔琴の創作者なり洋行の極早かりし仲間なり、君若し早世せずば文藝壇に期待せしこと多かりしと噫。

○島田蕃根　岩國の人君の清操は人の知る所なり、君は俗人なり僧に非ず、君は僧なり、俗人に非ず、僕嘗て同人を會し君に佛教を説かしめんとす、君上座に任り僕を顧みて曰く佛教は白蓮華の開けしが如し、ネー戸川さん、其他に一語なし莞爾として座するのみ、坪内逍遙、大西操山、その他の先生啞然として是も亦一語な

かりき、

君問ニ終南山一、不知白雲外

君今は淨明圓覺の中に在るならん。

この十友の外に、敬友畏友信友親友あり曰く

長岡護美、高津柏樹、中根淑、大隈重信、小笠原長生、江原素六、小此木信六郎、德川達孝、本多晉、松浦詮、植村正久、勝海舟、栗本鋤雲、榎本武揚、木村芥舟、籾山東洲、高田耕安

諸伯諸子諸賢諸士多くは皆々御世話を蒙むりしなり、敬意を表する人なり、一ツ鍋は恐れおほし一ツ「テーブル」と修正せんか。

木の下は汁も膾もさくら哉

翁の句は我が意を得たり。落花紛々。立ちよれば大樹の陰。

警察の一と昔

黑　顏　子

僕の前身は巡査‖過ちの功名‖何者か怪しの人影‖行路病者の取扱‖赤坂警察の不埒‖兩署員の確執‖非常な敵愾心‖赤坂に對する復讐‖治外法權が殘念‖日本婦人凌辱事件‖陸軍から談判‖警戒令を喰つた‖連累者としての冤罪‖新派俳優になる

▲僕の前身は巡査でした、それが十年以前の素より血氣旺んな時代、隨分おもしろい事、苦しい事も澤山ありましたが、左樣サ、二三件變つた事をお話し申しませうか、僕は當時多く麴町署詰で、先づ

▲過ちの功名をしましたのは、九段の華表前の交番に居た時分、寒い頃の夜行や何か可なりに嫌らいもので、先輩がよくやらかすので、新參の僕等もいつか見習ひ、あの中坂の上に小さなお宮があつて、賽錢箱の後ろに蹲まると丁度、表からは見えず、午前二時から四時頃迄一ト巡りを大抵、其處で寢たものです、或晩の事、眠むくて堪らぬ處から一つ今夜もとやつて行き前後をうかゞい、例の賽錢箱の傍まで來ると、我より先に、

▲何者か怪しの人影がする、管内同僚では乃公一人の筈だがと、立坊でもある事かと左手の角燈を翳して

一寸箱の角を蹴つたが早いか、飛鳥の如く身を翻らして逃げ出す曲者、同時にガラリト落した一挺の出刃庖丁、ハッと思つて有繋にソコは職掌ですね、角燈投げ出し跡追掛け、漸くの事て取押へ拘引をして取調べると、これが前科者の强盜未遂で、見付かれば瀆職のお咎めを受けべき僕が賞與を貰ふ、即ちこれが怪我の功名、隨分斯ういつた樣な事はいくらもありましたよ、それから

▲行路病人の取扱　に就ては其當時隨分警察も亂暴な事をやつたもんてす、それは玆に一人の行路病者が出來ると餘所の管轄區域に乘ちやつたもので、僕の關係した此事件が大事になつた實驗談があります、それは僕が丁度夜の十二時頃てしたらう、淸水谷の大久保公園から赤坂の辨慶橋の方へ巡行中、フト向うを見ると赤坂の方から警察の提灯が三ツ計り、ブラ〳〵とコチラの方へ來る、ハテナと立留つて見て居ると、橋を渡つた大きな石の傍へ何か大きな物を置いたまゝ、其提灯は元來し途へサッサと引返して仕舞ひます、夫から近付いて何だらうと之を見ると、イヤ其臭氣といつたら衣類も身體もメチヤ〳〵に石炭酸をブッ掛けた例の病人てすね、彼處の辨慶橋の眞中から麴町と、赤坂と管轄が分れるので、僕は其時其病人を可愛想だと思ふと同時に

▲赤坂警察の不埒　を憤慨したのてす、又憤慨すると同時に、どうして吳れやうと大に考へたのてす、先づ取敢へず其病人を何ても赤坂の管内へやつておいてと、之を起すと「アヽまたお巡査さんてすか」と心細い聲を出して憐みを求める、抱くやうにして之を橋の方へやつて置いて急ぎ足て僕は警察へ引返し部長や署長へ此旨を報告した上、更らに其承認命令を得て、又直ぐと今度は赤坂の警察署へ談判に行つたのてす、果して其晚赤坂ては當直の巡査が面倒だと思つて小使を連れて麴町の方へ舁ぎ込んだのに相違なかつたのてすが翌朝署長と署長の往復て其事件はマア內分で濟ませる事になる。得て上の方てはコンナ不都合な交渉が成立つたものてすね、それはそれて濟んだけれど、其後

といふものは遂に何事によらす。

▲兩署員の確執となつたのです、無論赤坂の方が大變な事を素破抜かれたのを根に持つて、何か麹町の奴等が、と私かに眼を付けて居たものですね、すると生憎と少し酒癖のある僕の方の同僚が或夜赤坂の方で飲食をして少し亂暴をやつて居るのを知つた赤坂署の連中、直ちに現行犯として之を引致し、理も非もかまはず表沙汰にした、酒の上の少々位の間違は常にある事で、同僚の事などはイツも示談で濟ませる慣ひであるにも拘はらず、平素事あれかしと待構えて居たのですから、堪らない、遂に其巡査は免職になつて仕舞つたのです、サア、之を聞いた僕等は無暗に癪に觸つて、今度はコッチが

▲非常な敵愾心を起したのです、それから一二ヶ月も經ちましたか、恐れ多い事ですが　英照皇太后御崩御の朝です、今上陛下には御急電に接せられ、後ちに伺ひ奉つたのですが其時御馬車の扉も御自身に開かせられて青山御所へ行幸になつたのですが、咄嗟の場合此の行幸の仰出され、直ぐといふ、素より赤坂警察へも警戒命令が間に合はず、我麹町署に御出門の事が達した時に居合はして僕と今一人の巡査、それッといふので當時麹町八丁目の署から青山の御所まで一氣に驅け付けた位で、出來る丈の敏捷な方法を執て麹町署の巡査を徴發して赤坂方面まで悉く兎に角警護の固めをやつて仕舞つたのです、何しろ前後に例の無い事でせう、御馬車が侍從長と御同乘の只一輌、前に天皇旗を立てられた極めて簡單な事ですから、赤坂署などは始めの程は、僕等の騷ぎを見て何が始まつたのだらうと怪しんで居た位、僕等の方ではこれが即ち

▲赤坂に對する復讐の積りで一番鼻を明して呉れやうとの野心を持て居たのです、見事大成功で、やゝ少らくして赤坂の方からも出て來て我々の間々へ立て居たが、「コヽは僕の方で引受けたからお構い下さらんでも大丈夫です」と皮肉を言つて實に其時位愉快な、いい心持の事はありませんでした、其日も無事に相濟んで僕等は非常に面目を施こす、赤坂の署長は何でも進退

伺を出したといふ事でした、其お話はそれだけでしたが尚其當時、僕が巡査をして居て、屢々見聞し或は關係した中、常に、

▲治外法權が殘念　て堪りませんでしたよ、二言目には國と國との問題になるからッてんて、始終僕等は署長に叱られて居たのです、其一例を申せば歐羅巴の最も強い某國（筆者曰く總て國名、人名は預る）公使は大層日本通で評判の好かつた人で長く我國に駐在された人ですが、彼の人なども隨分、永い間に亂暴を働いたものですよ、彼の人の

▲日本婦人凌辱事件　なども我々仲間や其他にも隨分有名な話して、御承知の通り西洋館の構造が部屋の中からピンと錠を卸せば破璃窓て、それこそ呼べど叫べどですからね、例の雇女を強姦したのですね、それで何しろ公使といふので其筋でも殊に秘密に取扱ひ結局僅かの金で内濟といふ始末でさア、僕等も當時大に憤慨した一人ですが、我々が何んと言つても仕方がありませんや、それからモ一ツは○國公使でこの人はよく馬で市中を駈けたもので、隨分亂暴な往來のものを鞭でなぐる癖があつたのです、惡い癖ですね、當時二三の新聞にも極めて簡單に、この鞭打事件は出たものでしたが、それは士官學校の連中を打つたので遂に

▲陸軍から掛合　ふ騷ぎになつたので、事が大袈裟になりかゝつたのですが、何分例の治外法權といふので、尤も此公使は間もなく轉任する事になつたのですが、僕は一度斯ういふ事がありましたよ、永田町邊を巡行して居ると、後の方からやつて來た先生、例の無茶でピシリと僕の左の肩へ鞭をあてたのですね、其時に僕はチョイと右の手で、斯う掴むと同時に曳いたら、スルリと向うの手を辷つた鞭を其儘ポント投つた奴が何處かの屋敷の中へ飛込んだのですね、先生躍起となつて怒る、僕は始めて氣が付いた風をして二三押問答の末、『投つたのは惡るかつた』と口惜しいけれど例の治外法權の爲に謝まつて署に歸り、署長に此旨を報告しましたが、署長は僕がどんな失禮をしたかと大分心配の模様でした、トユカク鞭を引たくつて投つてやつた

のは自分ながら痛快てした、まア當時のお話しは此位な事て、其後僕は巡査をやめて浪人となり、友人のやつて居た或る下らぬ雜誌など手傳つて居る内に

▲豫戒令を喰つた　事があります、或日元と懇意な刑事がやつて來て、『一寸君に署長が遇いたいといふから署まで來て呉れ玉へ』といふので、何の氣なしに行つて見ると、別室へ通されて丁寧に署長が洋食など取て食はせる、ハテ何事だらう、以前は上官として知り相には相違ないが、今まで御馳走になる因緣はないと、不審に思つて居ると、やがて署長は威儀を正して一通の辭令樣のものを出し『どうも氣の毒ぢやが一度警視廳が之れを發すると、モウ一寸、恢復が出けんのてナアハ、、、、』と高田式に差付けられたのが即ち豫戒命令なのてす、僕は實に意外にも、心外にも、少し署長と爭ひながら其仔細を聞くと

▲連累者としての冤罪　て、それはチョッとして知人に當時某新聞の三面記者が、兩三日僕の處が靜かだといふので、原稿を書きに來て居たが、其原稿が某華族の家庭の事を書いたもので、奴は脅迫罪で引つぱられる、原稿を書いた家主の事とて僕の後援者といふ難有い認定を下されたのてした、これも偏に僕が無職業て居た罪であると、已なく例の『十日以内に正業に就くべし』との命令に從ひ、非常に考へた揚句の果、膝を打つて思ひ付たのは

▲新派俳優になる　事て、早速夫々の手續を履むて其筋だけの俳優の鑑札を受けましたが、まだ一度も舞臺を踏んだ事のない役者が一人出來上つたので、滑稽てすな、其後しばらくしてから川上さんの一座へはゐり爾來別種の辛酸を嘗め來つたのてす。（完）

新刊紹介

▲迷想的宇宙觀

加藤弘之著
丙午出版社發行

著者の「吾國體之基督教」の一書が平靜なる我國の思潮に忽ち一大波瀾を捲き起し、その唯物論に向つて兎角の批評を試みたものは實に鮮少でなかつた、之は何人も承知して居る事實だ、著者が老軀を提げて而かもその所信に忠實なる、その健闘的精神に富める、自著に對する世評の一斑を細に掻續し、それに就いて更に種々の辯明を試み、反駁を試みたもの、相手取られたる論敵には布川孫市、海老名彈正、山路愛山、向軍治、石川半山氏等より浮田和民、幾谷聖學、井上哲次郎の諸氏がある、氏が單に科學の研究にのみ腐心し唯物の一元にのみ據守し、別に情意的方面に異なる天地を拓開することを忘さぬ以上は、終に長く我等から見れば一種固陋の見たる自家の主張を拋棄することは叶はぬてあろう、が著者の如き見解は半信半疑ながらも國民の多數の頭腦には潜んで居ることてあろうし、而かもそれが大きくは人類全體の方針小さくは國家、更に狹くしては個人として五十年の生涯を送り行くヒに非常の關係を有するのだから、此際を機とし此著を緣として玆に學者の一大闡明を得、著者にのみかは同時に萬人の昏夢を覺まさんことを望むのである、吾人の見は機を見て評論欄に明にすることゝしやう。(定價金七十五錢)

▲時代と人物

笹川臨風著
春陽堂發行

該博なる歷史上の智識を傾倒し、我國に於ける古今の人物を把握して精緻なる叙述あり、透徹なる眼光あり、雄大なる議論あり、而かも風韻に富める一種の麗筆を以て快心の揮灑を試みたもの、全篇四百〇三頁の大著ながら讀んで頁數の盡くるを覺えざらしめる、著者は歷史を以て極めて意味多きものとし時代の精神を保存して更に後昆の血に混り腦に流れしめ、總て事あるに臨んでは發して掀天動地の大偉業をも爲さしむべき一大活力と見做して居るが此著は能くその抱負に副ふたけの力あるものだ、「卷首に題す」の一文是も亦見逃すべからざる一論文てある(實價金八拾錢)

▲水野越前守

塚原澁柿著
左久良書房發行

天明の田沼の後を承けて、關東治政の大難物といふ印旛沼の開墾を試みたは彼の天保度の水野越州てある、而かも經營幾年是亦遂に功をなさず、印旛沼の洪水をして依然害毒を後代に恣にせしめて居る、印旛沼の治水果して困難なるか、當局者の施設果して失當なりしか、因は前者にもあらず、將た後者にもあらず、實は越州の身邊に絡はる猜疑、嫉妬、讒間、復讐的運動、自營的妨害等人爲的のそれが大障礙をなして居るのだ、老儒にして生彩ある筆、而かも史眼炬の如く微として照さゞるなく細として透らざるなき著者の想を寫したもの、明治の今日に生れて尚ほ克く德川氏當時の大奧の空氣を呼吸せしめらるゝ思がある、(正價金壹圓十錢)

▲日本文典要義

岡澤鉦次郎著
博文館發行

大學程度若くは高等學校程度の學生、中等教育以上の內外語學の一般教師、及び或る程度の語學教育を受けたる者に日本文典を獨習するに當りて要する參考書としたもの、著者は從來摸稜の中に殘されたる諸多の問題を捉へて全體に統一ある解釋を施し、之を以て、日本文典の組織に一系亂れざる體系を付與せんと試みたものてある(正價一圓貳十錢)

▲中學研究

山本良吉著
同文館發行

著者が親しく中學教育に携はれる多年の經驗よりして、我國の中學に

於ける教育の理想並に方法等を仔細に研究したるもの、職に教務にあるものは元より、志のあるものは本書によつて啓發せらるゝところ盡し尠少てはあるまい（定價金一圓貳十錢）

▲大日蓮華　山崎紫紅著　左久良書房發行

偉聖日蓮一代の傳記を、現今の詩壇に於ける潮流とは一種異なる詩調を以て歌ひたるもの、雄渾の調、沈痛の調、壯偉の調、崇高の調、取次に相錯綜して能くその人を寫すの力に富んで居る。（正價金六十錢）

▲作文法講話　大町桂月著　東亞堂書店發行

劈頭先づ「申歳閑筆」といふ奇文妙文を黏出してそれから以下諸方面に端を開き作文法の講話を試みたもの、文に老くたる人が文に老くるの術を說く、何て惡かろう筈はない、興に浮かされ〳〵末段まで讀了する、同時に書かれたる事項が明瞭に頭腦に印象される、文を學ぶものゝ好參考書てあろう。（正價金三十錢）

▲露　大塚楠緒子著　明文堂發行

商家に生れた娘ながら女子大學院を了つた高等教育の備はる身の更に又此世に具はるべき美貌までが伴つて居れば、約婚の中とは言ふ條半纏前掛の店者は厭になる、別に相應しき理想の人を胸に秘めて居たのが、儘多きは此世の常、才、學、貌、と德とは兎角に矛盾するが常なるを悟ることの繁く續く、と又心契の寄宿舍友達、それは自分とは全然正反對の逆境から咒はれて我と此世を短くする臨終の遺書、外に父母の老衰とその子思ひ家思ひの心根、約婚の男の忠誠、更に自分の敎師の訓戒等が色々合して強き決意を迫る力となり、遂に心から優しく理想を引下げる事になり、限定通りの目出度き結婚に至るといふ筋、キリゝと締つた文章而かも精彩が裕かな上に、筋の運びにも難はない、が唯主人公の鈴音と領子とが何處々々までも反對なものに描かれて居るのは對照が余り際どいといふ點で拵いものゝ句がある、修辭も達者なものゝ何處やらその句を助ける樣な弊が失せぬ、が家庭小說として弱齡の女子に讀ませるには好個の作物と推賞するを憚らぬ。（定價金六十錢）

▲金盃　山本露滴著　東京堂發行

落葉哭、黃昏、花ぐもり、綠陰、新春十勝原頭に立ちて、秋晚十勝河畔に立ちて、街の雨、永日矢等、單歌新體詩取次に集めたもの聲調優麗諷誦に値するものに富んで居る。（正價三十錢）

▲修養資料はなし草　加藤咄堂著　東亞堂書房

雨窓閑話、文談武談、夜雨齋々錄、茶掛禪話、修身教材等各章共に取次に面白しとのみにはあらず、尙ほ題して修養資料といふに相應しきはなし草なば約百二十種を收む。（正價金四十錢）

▲社會側面觀　波多野烏峰著　實業之日本社發行

隨分の放言を、曰く敎師、曰く官吏、曰く文士、曰く政客、曰く婦人、曰く高襟、曰く電車の七つに分けて試みたもの、折々の感想をその折々に書き止めたといふ風て、說く所必ずしも正鵠を得ないが、時には聞くものを戒むるに足るものがないとはせぬ。（正價金七十錢）

▲決斷力修養　蘆川忠雄著　實業之日本社發行

決斷力の必要な事は言ふまでもなからう、而かもそれをして妄斷の弊に陷らず、運用その妙を得て誤るなからしむるには多少の注意が要る、本書は此必要に應じたものである。（正價金三十五錢）

▲新式昆蟲標本全書　松村松年著　警醒社書店發行

歐州、亞米利加、印度、馬來、支那、濠洲、及本邦に於ける著者の實驗に本き更に泰西の著述を參考して編纂したもの、昆蟲採集法、昆蟲製作法、標本保存法、研究法、昆蟲飼育法、の五編に分ち、一々圖解を施して懇切に說明したもの。（定價壹圓二十五錢）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一金七圓五拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味九十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目正味二頁卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商 玉寶堂

（電話下谷特九六五 一二四四）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　日本橋呉服町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋鎗屋町　良明堂
仝　日本橋住吉町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

中央公論　廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二、三、一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

廣告一手取扱　神田三河町一丁目　博報堂

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵稅共

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年八月廿七日印刷
明治四十一年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一
東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場



享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(又ハ)コ八
振替口座七八〇七
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦、
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券
六錢封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價
金銀函